語彙の研究と教育(上)

著者	国立国語研究所
ページ	1-150
発行年	1984-09-20
シリーズ	日本語教育指導参考書 ; 12
URL	http://doi.org/10.15084/00001836

日本語教育指導参考書12

語彙の研究と教育(上)

国立国語研究所

刊行のことば

「日本語教育指導参考書」は，外国人に対する日本語教育に携わっている方々の指導上の参考に供するために刊行するものです。

今回は，その第12編として「語彙の研究と教育(上)」を刊行します。本書は，同志社大学教授玉村文郎氏に執筆をお願いしたものです。同氏の御尽力に感謝の意を表するとともに，本書が教授上，研究上の資料として適切に活用されることを期待します。

昭和59年9月

国立国語研究所長

野　元　菊　雄

目　次

はじめに…… 1
1　語彙と語彙体系…… 3
1－1　語彙の定義…… 3
1－2　語彙体系…… 4
練習問題…… 8
2　単語……10
練習問題……12
3　語の形……13
3－1　語形……13
3－2　日本語らしい語形と日本語らしくない語形……15
3－3　音素の分布・機能負担量……23
3－4　拍の種類と構造……26
練習問題……29
3－5　同音語と類音語……30
(1)　同音語……30
(2)　類音語……32
練習問題……33
3－6　短い語と長い語（単音節語と多音節語）……34
(1)　短い語……34
(2)　長い語……40
練習問題……45
4　語の機能……47
4－1　概念を固定化し伝達する機能……47
4－2　概念を拡充し緻密化する機能……49
練習問題……50
5　語の数……52

5－1　ことばの海……52
5－2　特殊な語……55
5－3　基礎語彙……58
5－4　基本語彙……79
5－5　基幹語彙……89
練習問題……94
5－6　理解語彙と使用語彙……97
5－7　語数とカバー率……100
練習問題……103
6　語の出自（語種）……105
6－1　日本語の語彙の中の非固有成分……105
6－2　和語……112
(1)　語形……113
(2)　音象徴語……118
(3)　品詞……119
(4)　語義と造語力……122
6－3　漢語……123
(1)　語形……123
(2)　音象徴語……130
(3)　品詞……131
(4)　語義と造語力……131
(5)　漢語の身元……133
6－4　外来語（洋語）……134
6－5　混種語……138
6－6　語種と語彙徴標……140
練習問題……146
参考文献……149

はじめに

言語の習得に関して，<単語>と<文法>の両面が大切だと言われることが多い。しかし<単語>と言い，<文法>と言っても，それらが，切り離して別個に扱えるものでないことは，少しでも言語を科学的に考察しようとした人には理解されるところであろう。文法規則にいくら通暁していても，相当数の単語を知っていなければ，現実の言語の使用は明らかに不可能である。一体，単語を知らずして文法規則に通じるということ自体，ありえぬことである。冒頭のきわめて常識的な考え方にも，言語のあり方と，言語学習とにおける真理を見てとらなければならない。

日本では，生きのよい魚として喜ばれ，端午の節句の「のぼり」になったり，球団の名前になったりしている「鯉」は，中国の「登竜門」の伝説の影響もあって，とかくめでたい魚という好印象がつよい。また真鯉は食用に供されることも多い。しかし，一般に魚を食べることの少ないヨーロッパの国国では，「鯉」は汚い泥水の中にいるサエナイ魚であり，食べられることも珍しく，「男児の成長」や「立身出世」のイメージとはどうしてもつながらないようである。また，一般の日本人は「山」のことを，緑の木々でおおわれているものと思っているが，北アメリカでは，雪をいただく岩山と考えるのが普通のようである。'Longman Lexicon of Contemporary English' の mountain の項には，"a very large and high hill, especially of bare or snow-covered rock" と記されており，Albrecht Reum の 'A Dictionary of English Style' が挙げている mountain の代表的な連体修飾語(epithets)の中にも，"wooded"（木の茂った）はあるが "green"（緑色の）はない。国土が平坦で，海抜180メートルの山が最高峰であるデンマークでは，「山」("bjerg") という語による比喩にも，風土的な制約がつきまとっていると考えられる。

単語の世界は広くかつ深い大海であって，形と意味の2つの領域にわたっ

ている。また，言語の他の部門である音韻・文法とはちがって，生活の様式・伝統文化などとの関わりも深くて，その全体像をつかむことも容易ではない。先に「鯉」や「山」を例にとって触れた内包や連想や比喩の研究は，もっともむずかしい分野であって，それらの分野における外国語との対照ということになると，一層困難は大きくなり，今後の研究にまつところが多い。

本書では，日本語教育の指導上の参考になるよう，日本語の語彙について概説し，日本語の語彙面での特徴をあげて，外国語の語彙との対照が図れるようにした。

1　語彙と語彙体系

1—1　語彙の定義

「語彙」は，英語の vocabulary，フランス語の vocabulaire（又は lexique），ドイツ語の Wortschatz などに相当する語で，中国語の詞彙（词汇）と同じである。「彙」は「はりねずみ，たぐい・なかま，集める・集まる」という意味をもつ文字で，「語彙」という語の中で用いられているのは，その2番目の字義である「たぐい・なかま」であろう。（ただし，『漢和大辭典』には「語彙」の見出し語はあるが，出典は挙げていない。）本邦での用例としては，文部省編輯寮の書物名としての『語彙』（明治4年）が古く，島崎藤村の『落梅集』や宮本百合子の『伸子』などにも使用例が見られる。漢語「語彙」は，その字義のごとく「語の群がり，語の集まり」を指すのであって，個々の語（または単語，英語の word，フランス語の mot，ドイツ語の Wort，中国語の单词）を指すものではない。俗に，ある単語の集まりに属する特定の単語を指して「語彙」ということがあり、文学・語学の専門家の中にも，特定の一語をとりあげて，「その語彙の使い方は正しくない」などと言う人があるが，もちろんこれも「語彙」という語を誤って使った例である。「語彙」を少し厳密に定義すると，「一定の範囲において行われる語の集合である」ということになる。

たとえば，ある時代とか，ある地域とか，ある集団とか，ある世代とか，ある作品の中でとか，ある個人の家庭生活の中でとかいうように，通例なんらかの限定のついた＜語の集合＞を指す。具体的には，「王朝時代語彙」，「近松語彙」、「漁村語彙」，「近畿方言の語彙」，「ブラジル移民2世・3世の語彙」，「枕草子の美的語彙」，「現代新聞雑誌の語彙」，「小学校1年生の理解語彙」，「山岳語彙」などというふうに用いられる。限定を最小限に，つまり範囲を最大限にすると，「日本語の語彙」とか「英語の語彙」とかになる。この場合は，過去から現在まで使われてきた，日本語や英語の単語の総体を

指すことになる。さて，最後の限定もとり除いて，ただ単に「語彙」そのものについて考えることがあるだろうか。それは，一般言語学，言語理論の上では行われるが，普通は特定の言語について「〇〇語の語彙」として論じられるものである。

1—2　語彙体系

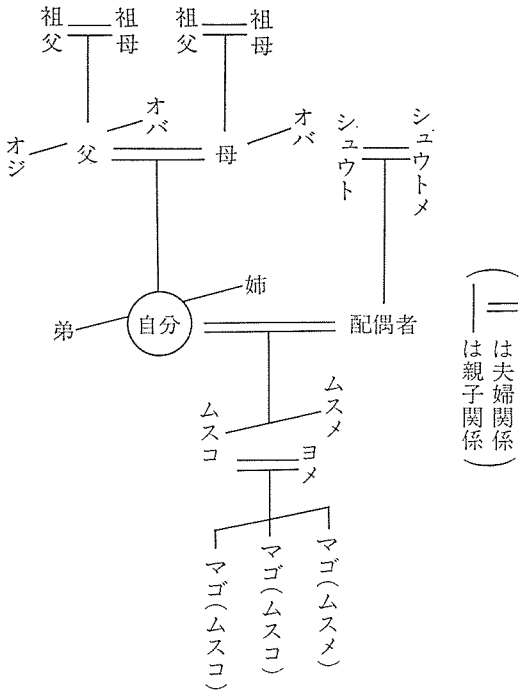
さて，「語の集合」とされる語彙に体系があるかという問いが発せられることがある。言語を構造的にとらえる場合には，音韻・文法・語彙・文字（あるいは表記）というふうに，分野を分けて考えるのが通例であるが，このうち語彙を除いた音韻・文法・文字（表記）については，誰しもその体系の存在を疑う人はいない。しかし，語彙については体系を云々することをはばかる人もいる。だからこそ＜語彙に体系はあるか＞（汐文社　新・日本語講座Ⅰ「現代日本語の単語と文字」の第3章《前田富祺氏執筆》）といった立論がなされるのである。

しかしながら，語彙体系を全面的なかたちでは認めない人でも，ある部分，ある範疇内の語彙については，体系の存在を否定することはできないであろう。親族呼称・身体部位名称・階級名称・指示詞（コソアドことばともいう）・擬音語や擬態語などの音象徴語がその例である。このうち，親族呼称は自然レベルの体系であり，階級名称などは人為レベルの体系である。またパラダイム（語表）に示されるような指示詞や音象徴語は言語レベルでの体系を示していると言える。

次の図のような親族関係語彙を見ると，「自分」を中心にした立体的な構造のあることがわかる。これは，われわれ日本人が外界の存在である親族に対して付けた呼称の体系である。この体系の要素の一つ一つに名としての語が与えられているので、結果としてそれらの語の集合である語彙にも体系が見られることになったと考えられる。その意味で，＜自然レベル＞と呼んだのである。

しかし，このような部分的な語彙体系が常に＜自然的・外在的＞なもので

図1　親族関係



あるとは限らない。たとえば，係員―係長―課長―部長　とか，巡査―巡査部長―警部補―警部―警視―警視正　とかの役職や官職の名称をとりあげてみよう。これらは人間社会の１つの約束によるもので，時代や社会のすがた，会社や機関の組織実態と関わることが多く，永続性はあっても変更可能なものである。その意味で，先の場合と対比して，＜人為的＞と呼んでもよいだろう。チチとハハの間に「チハ」とか，自分とムスコの間に「ジム」とかいった中間者の設定・存在が考えようもないのに対して，「課長心得」とか「課長補佐」の新増設や解消ができるのとは対照的である。近くは，警察官の階級の中に「巡査長」が新設された例があり，遠くは，旧日本陸軍で

「伍長勤務上等兵」が慣例的に行われ，やがて「兵長」として固定した例がある。

いずれの言語の中にも，このような部分的な語彙の体系があり，その中には上述のように自然的なものと人為的なものとの別があることがわかる。前者は，個々の言語を越えて普遍的に存在するもので，後者は，当然のことながら，個々の言語ごとに有無の差があり，分布のちがいがあるものである。自然レベル，人為レベルのほかに，言語レベルでの体系がある。日本語の指示詞は，英語・フランス語などのそれよりも整然とした体系をもつものである。また，日本語の音象徴語は，朝鮮語などごく少数の外国語を除くと，諸言語の中でもきわめて高い体系性をもつものであると言える。これらは，日本語の中の言語的な制度として存在していて，諸言語に共通する制度ではない。また「課長」「課長補佐」のようなレベルの語ともちがっていて，使用しないですますこともできないものである。いわば日本語の特質を形成している体系である。

さて，体系という観点から，言語構造の各レベルを眺めると，音韻体系・文字（表記）体系・文法体系というように，体系性が高い方から低い方へと並ぶようである。このあとに語彙体系を付け加えることができる。私見では，この高から低への順は，体系をなす要素（元素とも。‘elements’）の数の小さい方から大きい方への順と同一であると言える。換言すれば，体系性の高低は，要素の数の大小とは逆の関係になるのである。要素が少ない音韻（音素‘phonemes’）の場合は，1個の要素の増減も，ただちに体系の破壊・変更につながるので，容易には行われないが，語彙の場合は，要素が無数に存在するようなもので，基本的でない特殊な単語の増減はまったく自由であって，現実にも間断なくそれが行われていると見られるのである。音韻のような固い体系を，＜閉じた体系＞とか＜閉ざされた体系＞とか呼ぶのに対して，語彙の一般に見られるゆるい体系を，＜開いた体系＞とか＜開かれた体系＞とか呼ぶ。さらに具体的に述べるならば，現代日本語の母音音素は5種であって，アオイ（青い・葵）と発音するときに，アの代わりに /æ/ や /ā/

を使ってみるなどということはゆるされないが，(/ /内は音声でなく，音韻としてとらえられた音を示す。音声の場合には［　］が用いられる。)「苦痛を覚えた」という代わりに，少し通俗性を避けて「痛苦を覚えた」ということなどは容易なことである。また，「あざ笑う」という語の代わりに「馬鹿にして笑う」ということができるが，音素列/ude/(腕)を他の音素を借りて表すことは絶対にできない。語彙のレベルでは，ここに例示したような言い換え，別語の使用がきわめて簡単に行われるのである。文法体系は，ちょうどこの音韻体系と語彙体系の中間に位すると考えられる。当為・当然の表現として「ナケレバナラナイ」のほか，「ネバナラヌ」「ベキデアル」などが選択可能である。しかし，語彙の場合ほどには，選択・交換は自由でない。共同行為者を表す格助詞は「ト」であって，助詞相当連語を加えても「トトモニ」「トイッショニ」などわずかしかなく，交換範囲が限られていて，語彙よりは体系が固いと見られるのである。

語彙体系
- 自然的：親族呼称など
- 人為的：階級名称など
- 言語的：指示詞・音象徴語など

ここにフランス語の一対の語がある。

père：mère

'père' は「父」，'mère' は「母」を意味する語である。今もしとても論理的にものを考える人が，これらの2語を教えられたとすると，'-ère' は「親」を意味する要素で，'p-' は「男性」を，'m-' は「女性」を意味する要素と考えるかもしれない。教えられた2語を，考えられる要素3項に分析したわけで，そこまでの過程には少しも誤りは含まれていない。(誤りは，推論の前提「2語が論理的に構成されたものである」というところにある。)次に「男きょうだい」を意味する 'frère' を同じ人が教えられたとしよう。この人は，先刻の分析の誤りに気付いて，すぐ '-ère' を「肉親」とか「親族」を意味する要素であったと修正するだろう。そして，音声学の知識があれば，両唇性は「尊属」を意味するなどという，前項要素に関する微調整も行うか

もしれない。しかし，自然言語についてこのような分析を施すことは，いずれ早晩行きづまるはずである。「女きょうだい」を意味する‘sœur’を与えられたら，万事休すであろう。現実の言語の単語の中には，ごくわずかに，père : mère のような語形と意味とのある種の相関を感じさせるものがあるが，大部分はどんな似寄りも感じさせないもの同士である。

以上，語の意味について，あるいは，語の意味と語形の両面について，体系を考えてきた。しかし，語彙体系というものは、もう少し広く解釈して，語の使用率についても語の出自についても考えられるべきものである。

〔問1〕日本語と英語の「兄弟姉妹」の呼び方のちがいについて対照してみよ。語の意味，語形，語の意味構造の各面にわたって考えること。

〔問2〕イスパニア語では，「兄」を‘hermano mayor’，「弟」を‘hermano menor’，「姉」を‘hermana mayor’，「妹」を‘hermana menor’という。イスパニア語の「兄弟姉妹」の表し方を語形の面から整理してみよ。

〔問3〕中国語では，「兄弟姉妹」をそれぞれ次のようにいう。兄＝gēge（哥哥），弟＝dìdi（弟弟），姉＝jiějie（姐姐），妹＝mèimei（妹妹）これらの語形上の特徴について考え，日本語・英語・イスパニア語の「兄弟姉妹」の言い方との構造的なちがいを指摘せよ。

〔問4〕ヒマラヤ山麓の少数民族ブルシャスキ（Burushaski）の言語では，「きょうだい」を意味する‘cho’‘yas’の2語があり、その使い方は次の表のようになるという。兄弟姉妹の言い方において，ブルシャスキ語が日本語・英語・中国語などともっとも顕著にちがうのはどんな点か。

	呼ぶ方	呼ばれる方	
brother	＋ →	＋	cho
	－ →	＋	yas
sister	＋ →	－	
	－ →	－	cho

（＋は男性，－は女性）

〔問5〕上の問1から問4までをまとめて，「兄弟姉妹」の言い方のタイプを分類してみよ。

〔問6〕次の指示詞の表の空欄を埋めよ。

後置成分 / 前置成分	＋レ	＋コ	＋チラ	＋ッチ	＋ナタ	＋イツ	＋ノ	＋ンナ	＋引き音節
コー	コレ			コッチ	(コナタ)		コノ		コウ
ソー		ソコ	ソチラ		(ソナタ)	ソイツ		ソンナ	
アー	アレ	アソコ (アスコ アコ)	アチラ		(アナタ) (カナタ)			アンナ	アア
ドー				ドッチ		ドイツ	ドノ		
意味	もの	場所	方角	方角	人(敬)・(方角)	人(卑)	指定	形容	様子
品詞	代名詞						連体詞		副詞

〔問7〕回転のようすを形容する「くるくる」(kuru-kuru) という語を基にして，考えられる同系列の音象徴語をあげてみよ。「くる」を基にして，付加成分「り」，促音，撥音，「りん」，重複形などを考え，次に母音を交換して同様の形を考え，最後に，語頭子音をk-からg-に変えて同様の形を考えてみること。

〔問8〕「あによめ」という語はよく使われるのに，「おとうとよめ」という語は通常使われることはない。そのわけを考えてみよ。

2 単　　語

前章では，「単語」(「語」) について定義することなく，「語彙」を「語の集合」と定義した。ここでは，「単語」(「語」) について考えてみよう。

単語はもちろん言語単位の一つである。伝統的な言語学では「比較的独立性をもった，最小の意味的な統一体」と定義されてきた。意味をもった統一体としては，大きい単位として「文章」，次に「文」，(次に「節」)，次に「文節」があげられる。独立性を問題にしなければ，「白さ」の「-さ」や，「おじいさん」の「お-」「-さん」なども意味をもっている単位として数えることができる。しかし，独立性という条件を考えると，「-さ」「お-」「-さん」などは明らかに除外される。では，「川を渡る」の「を」や，「転ばぬ先の杖」の「転ば」「ぬ」「の」などはどうか。独立性という基準だけからは，どれも資格をもたないから，単語ではないという結論にならざるをえないであろう。しかし，次のように考えることも可能である。「転ば」はたしかにそれだけでは自立して用いられない形であるが，「転ぶ」「転べ」という自立的な形（つまり単語）の1形である。そして「転ば」が別個の独立した単語と考えられるならば，「ぬ」も別単語と考えられることになる。また，「川」「渡る」「先」「杖」に高い独立性が認められるならば，それらの間に置かれている，残余の成分としての「を」や「の」にも，結果として独立性が認められることになる。伝統的な定義の中に「比較的」という曖昧な部分が入っているのは，このような言語の実態が反映しているのである。フランス語の 'de la France'（フランスの，フランスから）は3語であるが，'du Japon'（日本の，日本から）は2語なのか，'du' は 'de'＋'le' の縮約形だからやはり3語と数えるべきか。基準の立て方が常に問題になるのである。イエスペルセン (O. Jespersen) は英語の副詞・接続詞・前置詞・間投詞は一括して「小辞」(particle)として扱うことを提案している。一般に，独立性という基準から見れば，名詞がもっとも高く，動詞がこれにつづき，

最後に冠詞がくることになろう。まず品詞そのものが言語ごとにそのありようを異にし，また印欧語のようには品詞を分けることがむずかしい中国語のような言語もあるわけで，あらゆる言語に適用できる単語の普遍的な定義を考えることは不可能に近いと言わなければならない。日本語の場合，印欧語に比べると，形態素（'morphemes'）はかなり高い独立性をもっていると考えられるので，助詞・助動詞をもひとしく単語として扱うのが普通である。

単語はもちろん形態ぬきに考えられるものではない。そして，観念の単位や事物そのものの単位と必ずしも一対一の対応をしているものでもない。「菜の花」はもともとは3語であったが，現代では1語になっている。しかし，同じく<名詞＋助詞＋名詞>という構造である「猿のこしかけ」は依然3語である。このような場合，アクセントの山がただ1か所だけかどうかというような外形的なことがある程度まで基準になる。しかしこれも絶対的なものではない。体操競技のわざの一つである「後方まきつけとび出し一回ひねり」というのは，単語か否か，街頭の投函用ポストを指す「明治四十一年式上方差し入れ下方引出し直立円筒赤色郵便箱」は単語か否か。アクセントの単複は単語認定の大きなよりどころではあるが，後に述べるように，長単位のものについてはアクセントだけで判断することができない。また「横車を押す」「顔が広い」のような慣用句は，ほぼこの形のまま用いられるから，単語の一部である複合語と同じ性質をもっていると言える。このように見てくると，「最小の意味的な統一体」という規定も，形態と関連させて理解される必要があり，個々の社会，個々の時代の言語主体の共時意識によって決定されることになる。「菜の花」はまさに時とともにとらえ方が変わった例である。イエスペルセンのいうように，語の認定は，意味の面だけからでも，形態の面だけからでもできないことなのである。

語および語彙の諸相を研究の対象とする学問は「語彙論」（lexicology, lexicologie, Wortkunde）と呼ばれるが，語彙論から見ると，語は，(1)形 (2)意味 (3)出自 (4)機能 (5)構造 (6)位相 などをもっている。また，語彙は，(1)計量的側面 (2)構造的側面 などから考察されることが多い。語彙論

が，体系的記述を目指すのに対して，辞書は個々の語について記述するものである。

〔問9〕「菜の花」のように現代では一語化していると考えられる例を5つあげよ。

〔問10〕次のうち，慣用句としてしか用いないものに○を，普通の用い方と慣用句としての用い方の両方があるものに△をつけよ。

角を出す	油を売る	肩をもつ
足がつく	足を洗う	鼻が高い
手を抜く	手を洗う	鼻につく
腹が黒い	馬が合う	羽をのばす

〔問11〕「気」(き)を要素にしている慣用句をあげてみよ。

〔問12〕「お先棒をかつぐ」「紺屋(こうや)の白ばかま」「けりがつく」はもとはどんな意味だったか考えてみよ。

3 語 の 形

3—1 語形

一般には、発音・文字・文法上の形態などを総称して「語形」というが、本書では、個々の単語を成り立たせている音素（‘phoneme’ 単音を一定の基準により解釈整理して抽出したもので、最小の音韻論的単位）または音素列を「語形」という。一般の使い方としては，動詞「書く」の未然形の語形は「書か」だ，のように使う。日本人は，語を書き表した文字（表記形）のことをしばしば語形と考えて，「抜と抜とは語形がちがう」とか「飛白と絣とでは語形を異にする」とか言うことがあるが，これらは文字・表記レベルのことであって，語形というのは正しくない。

前章で触れたように，単語は一定の形と一定の意味をもっている。その「一定の形」とは，一定の音素，または一定の音素列を指している。「山」は/jama/，「川」は/kawa/ というように，いくつかの選ばれた音素が一定の順序で並んでいる。単語の中には，「目」/me/，「毛」/ke/，「絵」/e/，「尾」/o/，「胃」/i/のように短いものもあって，音素が2個であるものも，ただの1個であるものもある。また単語の中には，「端」/haʃi/と「箸」/ha͡ʃi/と「橋」/haʃi/と「嘴」/ha͡ʃi/のように，音素の種類と配列が同じであって，アクセントだけが異なるものがある。こういう単語の組はいわゆる「同音異義語」または単に「同音語」と呼ばれている。（もっとも，後述するように「同音（異義）語」はアクセントの異同を問題にしない概念であるから，当然同一アクセントである「止場」「子葉」「飼養」「使用」「試用」「私用」「仕様」も，それらとはアクセントのちがう「姿容」「枝葉」もすべてが同音語である。同様に「どうか」「同価」「同化」「銅貨」「道家」や「高」「鷹」「多寡」「他科」「他課」「多価」なども互いに同音語関係にある。）形という語を広く解釈すれば，アクセントも語形の中に含めて考えられるが，通例アクセントは音素とは別の「超分節音素」（または「かぶせ音素」‘suprasegmental pho-

neme'）の１つとされるものであるから，上に記したように，一般にアクセントを考慮外において，音素だけで語形を考えるのがならわしである。

なお，「牛乳」と「ミルク」や「遊星」と「惑星」や「リラ」と「ライラック」のような，意味上いちおう等価と見なされる単語の組が存在するが，いずれも語形が異なるから当然別語として扱われる。「南京豆」「落花生」「ピーナッツ」のように３種以上になっても，同じように別語とすることには変わりはない。（ただし，菓子販売業者間では，これらは異なる品物を指す語とされている。）

しかし，語形のちがいが小さい場合，たとえば「やはり」「やっぱり」「やっぱし」，「むずかしい」「むつかしい」，「舌つづみ」「舌づつみ」，「さんしょくすみれ」「さんしきすみれ」，「とくしょ」「どくしょ」（ともに読書）のような場合は別語扱いをしないのが普通である。これらは，いわゆる「語形のゆれ」といわれる現象の例である。この場合も，同語・別語の判断をする基準は，厳密には立てにくいであろう。「しわがれる」に対する「しゃがれる」は口頭語の中での転訛形であるが，一般にはそれほど使われる形ではないから，「ゆれ」の中には入れない方がよいであろう。「くんだり」はもと「下り」から生まれた形ではあるが，「都会から遠く離れた辺地」の意味になっており，かつ「××くんだり」のように接尾辞的にしか使われないから，やはり「ゆれ」としては扱えない。単語ではないが，「-さま」「-さん」「-ちゃん」の間にもちがいが認められるので，「-さま」から出たもので用法も似ているが，３形を「ゆれ」と認めることはできない。すなわち，「-さま」には独立の名詞用法があり，「さまさま」「さまざま」のような重複形式があるが，あとの２者にはない。「-さん」には「ゾウさん」「おサルさん」のような用法があるが，「-さま」にはない。「-ちゃん」には，姓や役職名のあとに付ける用法や，「ご苦労さま」「おはようさん」「お疲れさん」のような用法がなく，「運ちゃん」「ワンちゃん」のような用法があるからである。（ただし，近年一部に，姓の一字をとって，近藤氏を「こんちゃん」，沢井氏を「おさわちゃん」などと愛称として呼ぶことがある。）

3—2　日本語らしい語形と日本語らしくない語形

手許にある賀状の1枚に「ボパナ」という人の名前が見られる。もちろん片仮名で書かれているが，かりに平仮名で書かれていても，日本の人の名前とは考えようもない。なぜだろうか。「ボ」という拍（モーラ‘mora’ともいう。日本語の発音が，等時間リズムが区切りになっているとの考えに基づいて，「音節」‘syllable’の代わりとして用いる。ヤマ「山」は2拍，ガッコウ「学校」は4拍，ショウセン「商船」は4拍というふうに数える。）も，「パ」という拍も，「ナ」という拍も，どれも日本語の中で程度の差はあっても使われている拍である。だのに，「ボパナ」という名前が，日本語らしくないという強い印象を与えるのは，「ボ」「パ」「ナ」の3個の拍のそれぞれの位置か配列順序に起因していると考えるほかはない。語頭の「ボ」，「ボ」の直後の「パ」，「ボパ」のあとにつづく「ナ」，こういう拍の種類と位置と連なりにこそ，日本語らしくないとの印象の原因が求められるだろう。では次のような語については，どういう印象がもたれるだろうか。

A　ザブキ　　グジニア　　ビドゴシュチ　　ブグ　　グダニスク

B　シバス　　カイセリ　　アダナ　　ツズ　　マラチャ

A群とB群とでは，多分A群は日本語らしくなく，B群は日本語らしいと感じる人が多いとおもう。（A群はポーランドの地名，B群はトルコの地名である。）

以下に具体的な拍と拍連続（音素と音素列）をとりあげて，語形面での日本語らしさについて考えていこう。

(1)　チューシャ・ミュー・リャ

この3者はどれも和語（以下「固有日本語」の意味で用いる。参照「語の出自」の項）とは考えられない。チューシャは漢語（参照「語の出自」の項）にも漢語以外にもある語形であるが，ミューやリャは漢語にもないもので，外来語（参照「語の出自」の項）であろうとの見当が付けられるものである。ミューは長さの単位μ。リャは外来語にもない。（驚きなどを表す感叫語としてなら，臨時的にリャが使われることがあるだろう。「れば」から

転じたリャがぞんざいな口頭語に用いられることがあるが，自立語ではない。例.「寒けりゃ行かないよ」)

これらは，古い日本語にはなかった拗音の拍を含んでいるために，日本語らしさを感じさせないと考えられる。チューシャは2個の拗音の拍からできており，リャはラ行音が語頭にあるため，いっそう日本語らしくなくなっている。スザク（朱雀，スサカとも。ただし，スは「朱」の呉音）やゲンザ（験者．栃木・秋田などでトンボの1種オニヤンマを指す。「修験者」の上略語。幼児による山伏への連想から生まれた語。）のように，拗音の拍の直音化が行われたのにも，表記手段の問題とは別に音韻面での日本語化の力がはたらいていたことが考えられる。フランス語の‘jupon’（ジュポン）が日本語に入って「ズボン」になったのも，（ペチコートやスリップからズボンへと意味も変化したが）同じように拗音の直音化の例と考えられるだろう。

(2) ゴルフ・ゲバルト・バラ・ザマ；パパイヤ・ピペット・ペパーミント・ポプラ

語頭に濁音/g，z，d，b/，半濁音/p/をもつ語は日本語として意識されにくい。まして，濁音や半濁音が連続する語形は，いっそう日本語印象を弱めるものである。バラは言うまでもなく，古語ウバラまたはイバラの第1拍が脱落したものであるが，外来語と感じる人もあるようである。ザマは和語サマの第1拍の有声化（＝濁音化）によってできた俗語形と説明されている。現代日本語の中には，もちろん濁音で始まる和語も，ドブ・ブタ・ガニマタ・バテル・ザラメ・ゴリ・ガラ・ジレルなどいくつもあるが，多かれ少なかれ俗語的印象の伴うのは避けがたい。また，濁音からは，混濁・不快・不整合が感じられるという人も少なくない。そこにも濁音の特殊性，殊に語頭における稀少性からくる特別の印象がはたらいているとおもわれる。

語頭の半濁音は，濁音よりもさらに珍しいという印象が強くなって，日本語らしさがさらに減少する。パパイヤ以下の4例は，もともと出現頻度が低くて珍しい半濁音の拍の連続であるから，日本語としては語音構造上きわめて珍しい部類に属するものである。

このように語頭に濁音・半濁音をもつ語は，いわゆる擬音語・擬態語などの音象徴語を除けば，日本語としては珍しいものであるため，日本語らしくないと感じさせることとなるのである。とくに半濁音の方は，漢字音としては語頭に立つことは皆無であるので，半濁音が語頭にある語は，和語である確率は小さく，漢語である可能性は完全にないと考えて差し支えがない。結果として，‘p-’の形の語は外来語である確率がきわめて高いということになる。（近松門左衛門の『冥途の飛脚』の中に「同じ事とよ豊川に，声の高瀬がさす腕には，ぱま，さんきう，ごう，りう，すむゐそれそれ何と」とあり，また『浮世風呂』にも「ちゐいパマくわいといふものだっさ」とあって，「パマ」という語が使われている。このパマについて，一部に漢語とする注釈などがあるが，数字「八」の近世中国音を模したものであるから，日本漢字音と見るべきではなかろう。パマは漢語とは考えられない。詳しくは後の「語の出自」の項を参照すること）

(3) テープ・マーチ・コードー・ヒーヤリ・ボート・トーイ

引き音節（2拍分の長さをもつ「長音」の後半1拍分の引きのばされた部分をいう。引きのばされた部分は，5種の異なる母音音素であるが，引きのばされるところに共通の弁別的特徴があると認めて，単一の音韻論的単位と見なす場合にこの術語を用いる）を含む語は，必ずしも非日本語的とは言えない。現代日本語では，トーイ（遠い），オーキイ（大きい），トール（通る），コージ（麹）など，和語にも引き音節をもっている語がある。また，音象徴語で，表情化・象徴化の手続きとして引き音節をもつことになったヒーヤリ（「冷やす」から）や音象徴語ではないが同じ手続きによったと考えられるマールイやマルーイ（ともに「丸い」から），あるいは，音象徴語の変異形と考えられるスート（「スト」・「スット」から），ヌート（「ヌット」から）などいろいろあげることができる。しかし，マーチ，ヒーヤリ，ヌート，マルーイなどの引き音節は，マー，ヒー，ヌー，ルーなどの長音が漢字音には存在しないから，これらが和語でなければ，漢語以外の外来成分ということになるものである。

日本の漢字音には/a:/や/i:/は存在しない。また，ウー，ズー，ブー，ムーやミューなども存在しない。したがって，このような拍とそれにつづく引き音節を含む語は漢語でないと決めることができる。引き音節自体は，日本語の中で決して特異なものではないが，漢語と外来語を除外すると，引き音節を含む語はかなり少なくなる。全体として引き音節も日本語印象を弱めるはたらきをすると言えるだろう。多分，引き音節が日本語の歴史の中で珍しい存在でなくなったのが，平安時代以後であるという事実と関係しているであろう。

（注） 日本漢字音の分布については，「国語シリーズ　別冊3『日本語と日本語教育―発音・表現編―』の中の「日本語の音韻の概説」（玉村文郎執筆）を参照すること。また，日本語の音声・音韻については，『岩波講座　日本語　第5巻　音韻』を参照すること。

(4) ローズ・イオー・オロシャ

古い日本語は語頭にラ行音をもっていなかったと考えられている。助動詞の中の完了の「り」，推量の「らし」「らむ」，接尾辞の「ら」「ろ」などは，いずれも自立して文節の頭に立つことのない付属成分である。だから，ローズ，リク，ラクダ，ルーム，レンズなどを，吟味ぬきでいきなり和語でないと判断してもよい。これらは，漢語でなければ他の外来要素，つまり外来語であると考えられるものである。ローズ（ろうず，破損のため売り物にならなくなった商品。ロズ「蘆頭」からできた語と考えられる）も漢語由来であろう。イオーはユオーから変化した語形で，漢語「硫黄」に発しているかと考えられる。/liu/→/rju/→/rju:/という変化の過程をたどってできた「硫」の字音とは別に，古く語頭のラ行子音を忌避して，/r-/のない/ju/から生まれた語形と考えられる。/liu huang/→/rju huang/→/juwau/→/juwa/ または→/juwo:/→/juo:/という過程が考えられる。古語としては「ユワ」という形があった。（ただし，ユオーの語源としては「湯の泡」「湯泡」を想定するのが普通である。）

「ノウゼンカズラ」（陵苕かづら）は「陵苕（霄）」の字音レウセウ（リョ

ウショウ）の転かと考えられているが，そうだとすれば，これも語頭ラ行音回避の例となる。

以上は語頭位置にあったラ行音を脱落させたり変質させたりした例であるが，オロシャ‘Russia’の場合は，語頭ラ行子音の準備音を顕在化させて，語頭ラ行音の前に1拍をつけて，元来の語頭拍を結果として第2拍の位置に転じてしまうという手続きをとっている。このように，さまざまな手続きを経た変容によって，ラ行子音を語頭に置かないようにしてきたのが日本語の強い性格であったから，もし語頭にラ行子音をもつ語（付属語や接尾辞を除く）があれば，それは和語ではないと即決してもよいのである。

(5) サハラ・オホーツク・タフ・ゼヒ・キホー・アヒル・ハハ・タハタ・ゴホン

語中・語尾のハ行音の拍は，平安時代中期ごろから変化しはじめ，ワイウエオになった。したがって，和語としては，語中・語尾にハ行の拍をもっているものは珍しい。サハラ砂漠の名を習った日本人はサワラと読んでしまうことが，とくに戦前には多かったが，これも歴史的かなづかいの干渉と，語中・語尾のハ行音の転化（いわゆる「ハ行転呼音」）との影響であろう。第2拍以後にハ行の拍をもっていて，明確に和語と認められるものは，ハハ（母），ホホ（頬，ホオの語形のゆれ，ホオの新しい言い方と見られる）など，きわめて少ないから，複合語タハタ（タ＋ハタ）などを除けば，多くは外来要素である漢語と外来語と考えられる。ゴホン・エヘン・オホホホなどは生理的・感情的な感叫語で，和語ではあるが一般の単語ではない。語中・語尾のハ行の拍は，日本語らしさを減殺するものである。

(6) エレベーター・セレナーデ・ゲレンデ・ゲレツ・セケン・セメテ・デレデレ

日本語の母音音素の中で，使われる率のもっとも低いものが/e/である。

表1　<母音音素頻度表>

A　/a/　14.61%
/o/　13.08
/i/　10.96
/u/　7.83
/e/　5.82
計　52.30%

染田利信「出現頻度から見た子音および母音の特性」(「天理大学学報　第49輯」)

B　2拍和語名詞1,134語の音素分布

/a/　13.89%……/ja/　1.34%……15.23%
/i/　10.63……10.63
/o/　9.34……/jo/　0.87……10.21
/u/　8.36……/ju/　0.45……8.81
/e/　7.46……7.46
計　49.68%　計　2.66%　合計52.34%

中村仁美「音韻論から見た現代日本語における2音節和語名詞について」(同志社大学1983年度卒業論文)

このうち，和語名詞の語頭について見ると，次表に見られるとおり，/e/はとくに低率である。(前記中村仁美論文による)

表2　2拍和語名詞の語頭母音の分布　(百分比)

音素＼位置	母音の前	子音の前	音素＼位置	母音の前	子音の前	計
/a/	0.44	3.44	/ja/	0.27	2.82	6.97
/i/	0.44	2.73				3.17
/o/	0.35	3.17	/jo/	0.27	2.56	6.35
/u/	0.35	2.65	/ju/	0.35	1.23	4.58
/e/	0.09	1.23				1.32
計	1.67	13.22	計	0.89	6.61	22.39%

このように母音音素/e/は，現代日本語の中で，とくに和語名詞の語頭部分においては出現率の低いものであるから，/e/の連続というのはきわだって珍しいものという印象を与える結果になる。1967年ごろに流行した「けめ子のうた」というのは，作詞者が創造した人名の/kemeko/という音素連続・

エ列拍の連続が<奇妙さ>という印象を与えるのに効果があったが，その際潜在力としてはたらいたのは，このような日本語における/e/の使用率の低さであったと見られる。上掲の例語のうち「エレベーター」などは外来語・漢語であり，和語「セメテ」「デレデレ」のたぐいは稀少例の代表である。したがって/e/の連続はやはり日本語らしくないものとの印象を与えるものと言える。

(7) ハットリ・ヤッパリ・ソットー・ポット・オットー

促音の拍/Q/の存在も，日本語らしさを低めるはたらきがあるようである。/Q/も古代日本語にはなかったと考えられており，現代においても多少とも雅語的でないとの語形印象が伴うようである。キト→キット，ピタト→ピタットのように音象徴語にはよく用いられ，ヤハリ→ヤッパリ，マタク→マッタク，マシロ→マッシロのように，音の面で強調を示すときに/Q/がよく用いられる。促音音素/Q/の特殊な性質がうかがえるだろう。これらを通じて，/Q/が語形の表情化（論理的変化を伴わない，語の感情価値の増幅）にあずかる度合が大きいと言えるだろう。なお，漢語のうち，元来入声音をもっていたものが，複合語の前項成分に立つときには，後項成分の語頭音との関係で，カッパツ（活発），シッコー（執行），ガッコー（学校）のように/Q/に変わることがある。

(8) チョンガー・アンゼンベン・インターン・コンモンセンス・モンド・ヒンヤリ・タンマリ

撥音/N/の拍も，やや日本語らしくないという感じを与える。/N/も古い時代には存在しなかったので，伝統的な雅語に見られることは少なく，逆に，外来成分や音象徴語，近世ごろから登場した俗語に多く現れるためである。モンド（主水）はモヒトリから転じたもので，ヒンヤリはヒヤスからの分出形ヒヤリに撥音が挿入された形である。またタンマリもタマルから生まれた，撥音添加形と考えられる。

モンド以下は和語であるが，ヒヤリとヒンヤリのように，また，ミナとミンナ，オナジとオンナジ，マガ（間が）とマンガのように，有声音，とりわ

け/m/，/n/の前に撥音/N/の入ることが多い。総じて/N/をもっている語は，古くからあった語から転じてできたものであって，/N/の印象は，固有日本語とは結びつかないと言えるのである。

以上，語形の日本語らしさを考えるのに，日本語らしくない要素8項をとりあげて，裏がわから眺めてきた。ここで，上記8項をまとめてみると，「よく使われるものに日本語らしさが感じられ，反対にあまり使われないもの，珍しいものには感じられない」と言えるだろう。個々の音素や拍の出現頻度以外に，音素や拍の組み合わせや位置も，日本語らしさの多少を決する役割の一端をになっている。つまり，どんな位置にも現れ，どんな音素や拍とも結合して，よく使われる音素・拍が，もっとも日本語らしいと感じられるのである。

(i) 直音と拗音
(ii) 語頭の清音と濁音・半濁音
(iii) 短音と長音（引き音節の有無）
(iv) 語頭ラ行音の有無
(v) 語中・語尾のハ行音の有無
(vi) エ列音
(vii) 促音の有無
(viii) 撥音の有無

の8項目のうち、(iii)までは左がわの方が標準的一般的で、日本語らいしのである。(iv) (v) (vii) (viii)では無い方，(vi)ではエ列音よりも他のア列音などの方が日本語らしいことになる。

レセプチオーネ・セシリンケ・ミョクソイ・ゲセテ・ハシクのような音素列は，どれも現代日本語では使われていないものである。つまり，どれも語としては存在しないものである。しかし，最後のハシクなどは，誰にも，日本語の音素結合の目録内の偶然のブランクに過ぎないと考えられるものである。上記の音素列について，多くの日本人は最初のものから最後のものに進

むにつれて，日本語らしさが増すと感じるであろう。

ここに見てきた語形面での日本語らしさはまだ十分には解明できていない。日本人には，たとえば，セシリンケとハシクのいずれがより日本語らしいかに答えることは簡単である。しかし，外国人にはそう簡単なことではあるまい。音素結合目録内の偶然のブランクと日本語として受けつけられないような音素給合とを見きわめる力を養うことが大切である。

3—3　音素の分布・機能負担量

先に，語形の日本語らしさを考えたとき，音素や拍の現れ方を基準にしたが，そのような音素などの分布を調べ分析すると，単に音声教育に資するだけでなく，語彙教育にも参考になるわけである。

機能負担量 (functional burdening, functional load) というのは，ある言語において，音韻論的対立が語の意味の識別に関してになう役割の軽重の度合のことである。別言すれば、個々の音素が語の意味の決定に消極的に関わる度合のことである。すでに，語形上の日本語らしさを考えるときに，素朴なかたちで機能負担量という考え方をとってきた。

市河三喜編『英語学辞典』（昭和15年第1刷）には，表3のような<単形態素，2音節までの語における子音頻度統計表>が紹介されている。

類似の調査として，先に一部を紹介した和語2拍名詞の音素頻度表の全体を表4に掲げよう。

表4から，語頭・語中・語尾の各位置を総合すると，

<語頭>	<語中>	<語尾>
/k/　/a/	母音	/r/　/i/
13.49→23.46	/k/　/a/　/r/	12.96←24.69
3.88	8.19←14.27→6.52	3.62
	2.37　1.88	
	子音	
	/a/　/r/　/i/	
	14.54←7.86→13.79	
	2.05　2.21	

（数字は%を示す）

表3　英語の子音頻度表（単形態素，2音節までの語における）

Pho-neme	Initial		Final		Intermediary				Total
	anti-vocal.	anti-conson.	post-vocal.	post-conson.	anti-conson.	post-conson.	inter-vocal.	inter-cons.	
f	53	121	92	11	35	24	65	6	407
v	101	1	73	6	9	14	94	—	298
p	318	129	158	68	41	118	81	34	947
b	325	147	84	4	20	55	116	3	754
θ	28	20	54	5	—	2	7	1	117
ð	13	—	17	—	—	—	34	—	64
t	262	129	462	323	40	250	164	57	1, 687
d	205	57	270	97	21	76	97	7	830
k	309	199	255	92	120	114	114	68	1, 271
g	157	126	84	—	25	35	65	6	498
s	266	317	265	110	302	62	73	32	1, 427
z	10	—	92	6	10	15	73	1	207
ʃ	92	17	80	43	1	17	33	—	283
ʒ	—	—	4	—	3	2	13	—	22
tʃ	82	1	83	42	—	9	24	—	241
dʒ	107	—	89	22	—	12	42	—	271
m	269	6	206	3	160	39	112	2	797
n	115	7	310	3	540	43	124	1	1, 143
ŋ	—	9	78	—	117	—	—	—	204
l	217	—	604	3	167	394	161	—	1, 546
j	39	—	11	—	37	173	1	—	261
h	232	6	—	—	—	—	(2)	—	240
r	251	—	—	—	(1)	680	156	—	1, 088
w	179	—	—	—	10	152	1	—	342
Total	3, 630	1, 292	3, 371	838	1, 659	2, 286	1, 652	218	14, 946

表4　出現位置別に見た音素頻度表（和語2拍名詞の場合）

音素（群）＼出現位置	語頭 母音の前	語頭 子音の前	語尾 母音の後	語尾 子音の後	語中 母音の前	語中 子音の前	語中 母音の後	語中 子音の後	計
a	5 (0.44)	39 (3.44)	2 (0.18)	255 (22.49)		265 (14.27)	29 (1.56)	236 (12.71)	831 (13.89)
i	5 (0.44)	31 (2.73)	30 (2.65)	250 (22.05)		160 (8.62)	19 (1.02)	141 (7.59)	636 (10.63)
u	4 (0.35)	30 (2.65)	8 (0.71)	114 (10.05)		172 (9.26)	20 (1.08)	152 (8.19)	500 (8.36)
e	1 (0.09)	14 (1.23)	24 (2.12)	203 (17.90)		102 (5.49)	10 (0.54)	92 (4.95)	446 (7.46)
o	4 (0.35)	36 (3.17)	24 (2.12)	163 (14.37)		166 (8.94)	24 (1.29)	142 (7.65)	559 (9.34)
ja	3 (0.27)	32 (2.82)	26 (2.29)	5 (0.44)		7 (0.38)	0	7 (3.77)	80 (1.34)
ju	4 (0.35)	14 (1.23)	9 (0.79)	0		0	0	0	27 (0.45)
jo	3 (0.27)	29 (2.56)	8 (0.71)	0		6 (0.32)	4 (0.22)	2 (0.11)	52 (0.87)
k	153 (13.49)				124 (6.68)		124 (6.68)		401 (6.70)
g	20 (1.76)				74 (3.98)		74 (3.98)		168 (2.81)
s	128 (11.29)				96 (5.17)		96 (5.17)		320 (5.35)
z	15 (1.32)				60 (3.23)		60 (3.23)		135 (2.26)
t	125 (11.02)				122 (6.57)		122 (6.57)		369 (6.17)
d	25 (2.20)				50 (2.69)		50 (2.69)		125 (2.10)
n	94 (8.29)				83 (4.47)		83 (4.47)		260 (4.35)
h	132 (11.64)				15 (0.81)		15 (0.81)		162 (2.71)
b	36 (3.17)				80 (4.31)		80 (4.31)		196 (3.28)
p	2 (0.18)				0		0		2 (0.03)
m	124 (10.93)				108 (5.82)		108 (5.82)		340 (5.68)
r	6 (0.53)				146 (7.86)		146 (7.86)		298 (4.98)
w	20 (1.76)				21 (1.13)		21 (1.13)		62 (1.04)
N	0		13 (1.15)		0		0		13 (0.22)
母音＋半母音計	29 (2.56)	225 (19.84)	131 (11.55)	990 (87.30)	0	878 (47.28)	106 (5.71)	772 (41.57)	3,131 (52.34)
子音計	880 (77.60)	0	13 (1.15)	0	979 (52.72)	0	979 (52.72)	0	2,851 (47.66)
総計	909 (80.16)	225 (19.84)	144 (12.70)	990 (87.30)	979 (52.72)	878 (47.28)	1,085 (58.43)	772 (41.57)	5,982 (100.00)
	1,134 (100.00)		1,134 (100.00)		1,857 (100.00)		1,857 (100.00)		5,982 (100.00)

※注　（　）内の数字は%を示す。

の結合率がもっとも頻度が高い。いま，これらを組み合わせると，和語2拍名詞の典型として，/kari/という語形が浮かび上がってくる。雁，狩り，借り，仮り，刈り　などがいかにも日本語らしい名詞の姿なのである。

3—4　拍の種類と構造

音素は単独で，または他の音素と結合して音節（syllable, syllabe, Silbe）をかたちづくっている。その場合の音素のならび方には，どんな言語にもそれぞれ一定の規律があって，まったく無規律という わけ ではない。すでに3—2で触れたように，本書では<拍>という考え方で，日本語の音節の特徴を説明していく。

日本語の拍は，すべて次のA，Bのどちらかに属する。

A　〔1C＋(1S＋)〕1V*……一般拍

B　N(撥音)，Q(促音)，V'(引き音節)……特殊拍

*Cは子音音素，Sは半母音音素，Vは母音音素を示す。

なお，〔　〕や（　）の中は非必須成分であることを示す。以下同じ。

A_1　1V（胃，鵜，絵，尾など）

A_2　1C＋1V（蚊，野，死，戸など）

A_3　1S*＋1V（矢，湯，油，夜；和，輪など）

*Sは，/j/と/w/の2音素だけ である が，現代日本の共通語では/j/につづく母音音素は/a/,/u/,/o/の3種だけ，/w/につづく母音音素は/a/1種だけである。

A_4　1C＋1S*＋1V（茶，斜，署，著，序など）

*この型のときには，Sとしては/j/だけで，/w/は含まれない。ただし，古い日本語や方言音は別である。

AB2種のうち，Aの拍は，語頭・語中・語尾のどの位置にも現れるが，Bの拍は語頭には現れない。その意味で，Bは特殊拍とされるのである。

なお，ここで漢字音の構造についても，同様に記号化して示すことにす

る。個々の漢字は，もとの中国での多様なタイプの単音節構造に関わらず，日本では次の一般式で表される1拍か2拍かの構造になる。

$$
\begin{array}{l}
\qquad\qquad\qquad\qquad\quad \text{核} \\
\qquad\qquad\qquad\qquad\quad \downarrow \\
[1C_1+(1S+)]\ 1V_1 \left(+\left\{\begin{array}{l} V' \\ N \\ (1C_2+)\ 1V_2 \end{array}\right.\right) \\
\longleftarrow \text{第 1 拍} \longrightarrow (\longleftarrow \text{第 2 拍} \longrightarrow)
\end{array}
$$

この漢字音の一般式について，ごく基本的な事項を記しておく。

①V_1以外はゼロであることもある。

②Sは/j/と/w/の2種であるが，/j/の出現率の方が高い。

③/Q/は現れない。ただし，熟字の前項成分の末尾部には「出発」「一筆」「国家」の場合のようにしばしば現れる。

④V'はV_1が/e/, /o/, /u/であるときにしか現れない。カー，キーのような漢字音は存在しないから。

⑤C_2は/t/か/k/に限られる。

⑥V_2は/u/か/i/に限られる。

（⑤⑥から，一般式の第2拍下段は，具体的には，チ・ツ・キ・ク・イに限られる。）

⑦/ju/, /juku/, /jutu/, /jun/を末尾にもつ1・2拍字の語頭音は/s/または/z/である。

具体的に例を示してみよう。

$1V_1$	阿 亜 以 宇 会 汚
$1S+1V_1$	野 癒 余 予 和 話
$1C_1+1V_1$	左 加 多 義 母 不
$1C_1+1S+1V_1$	斜 所 書 叙 朱 受
$1V_1+V'$	英 映 王 応
$1S+1V_1+N$	腕 湾
$1S+1V_1+1C_2+1V_2$	約 欲 惑
$1C_1+1V_1+V'$	偶 答 経 数 清 合

$1C_1$	$+1V_1+N$	感 真 全 凡 鈍 寸
$1C_1$	$+1V_1+1C_2+1V_2$	角 徳 的 錯 月 罰
$1C_1+1S+1V_1+1C_2+1V_2$		熟 釈 直 若 辱 脈

ここで応用練習をしてみよう。

練習1　「これまで厚い文字の壁ではばまれていた新しい職場にも，目の不自由な人が進出できるようになった。」という文の下線部をカベデワバマレテと読んだ留学生があった。どのように指導したらよいだろうか。

——バマレテと読んだ場合は，バマレルとかバムとかいう動詞を想定することになるが，和語動詞で濁音で始まるものは極端に少なく，その多くは俗語的なものであるから書きことばに用いられることはたいへん少ないと考えられる。そのことを話して他の読み方ができないかを考えさせるのがよい。これは，文字列の中で「は」「へ」が出てきたとき，助詞であれば，/wa/ /e/，助詞でなければ/ha/ /he/と読まなければならないが，理解できる語の数が少ない学習者にとってはいたしかたのない読みあやまりである。辞書をひくまえに，日本語の語形についての知識をもっていることが肝要で効果的であると言える。

練習2　「さすがソ連チームの選手はキジンがはやいですね。」（アイスホッケーの優勝戦のテレビ実況放送）

上のキジンはどんな漢字をあてるべき語か。

——次のような順で答えを考えてみる。

1)　漢字何字の語か。1字か2字か3字か。なぜその字数だと考えるのか。

2)　2字以上と考える場合，区切りはどこにあるか。また，なぜそう考えるのか。

3)　結局キジンにはどんな漢字が当てられるのか。

——<漢字音はすべて1拍か2拍である>から，キジンは「キ＋ジ＋ン」か「キ＋ジン」か「キジ＋ン」のいずれかであって，1字の「キジン」は

考えられない。ところが，「ン/N/」は自立拍（すなわち第1拍）にはならないから，上記のうち，「ン」を1字とする「キ＋ジ＋ン」と「キジ＋ン」とは成り立たない。また「キジ＋ン」についてはもう1つ問題がある。すなわち，＜C_2は/t/か/k/に限られる＞という条件にも抵触するから採用できないのである。したがって，キジンは「キ＋ジン」としか考えようがないことになって，2字漢語であることがわかる。結局，「奇・帰・貴・杞・気・希・汽」などのグループと「人・仁・神・陣・尋・訊・迅」などのグループから，「…がはやい」という文型に適合する動作名詞を想定して解を得ることになる。こうして，意味・場面から「帰陣」だけがふさわしいものとして選び出されることになる。

（キジンの場合には漢字音しか存在しないが，時には音か訓か判明しないことがある。なお，「帰陣」はもともと「戦場に出ていた将兵がおのが陣地に帰ること」を意味していたが，このように球技などにおいて味方のゴールに帰ることも指すようになってきている。）

〔問13〕次のうち，語形から見て日本語らしくないとおもうものを指摘し，その理由を述べよ。

サズリ	ミューショ	コタビキ	ラゴロ
シオキヤ	グジブ	ヌートカ	セミネ
ホコタ	ヌミトキ	チガー	コラル

〔問14〕任意の現代日本語辞書により，語頭字別の使用ページ数を調べてみよ。またローマ字で見出し語を表記している辞書（たとえば和英辞典など）により，同様に語頭字別の使用ページ数を調べてみよ。

〔問15〕次の漢字の字音構造はどんな式で表されるか。

階　安　欠　楽(a・b)　片　終　恩　怠　興(a・b)　急　空　純
色(a・b)　暑　賄　柳　毛　門　毎　妙　労　十　石(a・b・c)

〔問16〕/paQto/，/gaN/の音列には，どんな語があるかまず見当をつけてみて，あとで辞書を開いて，一致不一致をたしかめてみよ。

〔問17〕辞書のラ行の部には，どんな出自の語が何語ぐらい見出し語になっているか，調べてみよ。

〔問18〕先の英語の「子音頻度統計表」を基にして，1音節および2音節の代表的な英単語の例を考えてみよ。

〔問19〕促音/Q/が挿入されて，強調形になっているような和語をあげてみよ。

〔問20〕撥音/N/が挿入されて新しく生まれた語形があればあげてみよ。

3—5　同音語と類音語

(1)　同音語

2つ以上の語をかたちづくっている音素の種類と配列がたがいに完全に同一である場合，それらを「同音（異義）語」'homonym' と呼ぶことは先に述べたが，厳密には，同綴字の同音語(the pole of a tent; the pole of the earth) を 'homonym' と言い，異綴字の同音語(gauge; gage) を 'homophone' と呼ぶ。しかし，表記上<正字法>'orthography' の観念を有せず，それが習慣化していない日本語では，同一語を幾とおりにも書くということもあって（泉貨紙：仙花紙，涙：泪：なみだ，肝腎：肝心など），厳密な適用はむずかしく，「重文」（文法用語と，重要文化財の略語），「国体」（国家形態の特質と，国民体育大会の略語）など例も極端に少ない。本書では上に示した定義のように，広義に同音語を解しておく。この場合，アクセントの異同は前に触れたように問わない。

さて，日本語は，英語・フランス語・ドイツ語などと比べると，同音語の多い言語であると言える。しかし，中国語やマライ・ポリネシアその他の言語と比べた場合には必ずしも同音語が多いとは言えないかもしれない。日本語に同音語が多いのは，1つには語を構成する音素の種類が比較的に少なく，また前述のとおり拍の構造がわりに単純であるという，いわば日本語の生理的先天的な側面と，2つには中国語その他の外来要素をふんだんに受け入れて，それらを同化してきたという歴史的後天的な側面とにその理由が求

められる。

アオイ　青い　葵

カエル　蛙　変える　帰る　反る

ネル　寝る　練る「怒ってものをいう」

シロ　白　城　代

サク　裂く　咲く　幸く　放く「鍬で畑を打ち返す」

チ　血　乳　茅

などは，前者の例であり，

コード　光度　高度　硬度　公度　荒土　耕土　后土　紅土　皇土　膏土　黄土　cord　code

コーショー　口承　口証　口誦　工匠　工商　工廠　公称　公娼　公証　公傷　交渉　交睫　好尚　考証　行賞　厚相　厚賞　咬傷　哄笑　後章　後証　洪鐘　紅晶　降将　高小　高声　高尚　高唱　高商　高翔　黄鐘　鉱床　綱掌　講誦　翺翔

ショーコー　小康　昇汞　昇降　相公　将校　消光　消耗　症候　唱考　商工　商港　焼香　照校　韶光

ハイ　灰　はい(応答)　鮠　蠅　拝　杯(盃)　肺　背　胚　俳　配　排　敗　廃　牌　輩　ハイ (high)

などは，後者の例である。後者の例に見られるように，固有日本語のほかに，漢語が加わり，さらに外来語が加わって，同音語の数が増え，3層に及ぶまでになっている。

そして，ここで注目すべきことは「荒土」対「耕土」，「配水」対「排水」対「廃水」，「子音」対「歯音」，「長音」対「調音」，「発音」対「撥音」のように，相似た場面・文脈で使われる同音語の組や，相反する意味の同音語の組があることである。とりわけこういう組は，主に漢語（したがって，主として書きことば）の同音率の高さに起因しているので，語彙教育の面では，漢字熟語の入念な指導が求められるし，また，問題の文脈を一段と広くかつ深く把握させるような練習が必要である。

(2) 類音語

語または一連の語で，意味を異にするが，形が比較的近いものを「類音語」‘paronym’という。‘collision’と‘collusion’，‘matter’と‘mutter’，‘allocation’と‘allocution’などはその例である。日本語の「業苦」/goV'ku/と「五億」/gooku/，「幸運」/koV'uN/と「高温」/koV'oN/，「御恩」/gooN/と「ゴーン」(鐘声) /goV'N/なども，語形のよく似ている組で，類音語とされる。一般には，このような類音語への関心はあまり高くなく，「類音牽引」や「民衆語源」との関連で注意されるにとどまり，他は「もじり」など言語遊戯において問題にされるだけである。しかし，外国語教育の面では，とくに注意すべき事項の1つである。それは，学習の初期・中期においては，既習語が少ないうえに，個々の語の語形そのものが，母語の干渉なども受けて，十分正確に記憶されていないために，近似の語形をもつ語と聞きちがえたり，近似語形をその場で必要とする語の語形と思いこんで使ってしまったりすることがしばしばあるからである。

夏に「ガが多くて困った」と中国の人から聞いた場合には，「蛾」でなくて「蚊」であると考えた方がよいだろう。日本語を教えている人は，学生からよく「センサイはお元気ですか」と聞かれて，苦笑することがある。「東京駅でシンコンサンを見て，しあわせでした。」と目を輝かせて話した青年が，つづけて「シンコンサンに乗って京都へきました」と言ったので，驚いたことがある。「ガ」と夏，「シンコンサン」と東京駅というような取り合わせなので，しばらくは言いぞこないがそうと判らないのである。地下水汲み上げによる染色の話題で，「イト」と「イド」が混線するなど，類似の話は枚挙にいとまがないほどである。日本人ばかりでトランプをしていたときに，「ダイヤ・クィーン出ている？」とたずねられて，1人の青年が「僕，学部だけです」と答えたことがあった。この場合は，ダイヤ・クィーンとダイガクインとが混線してしまったのである。

既習の定着語が少ない入門期の学習者にとっては，このような「類音語」の幅が相当に広く，理解と表現の両面において，大きな問題になることを指

摘しておきたい。なお，その場合，もっとも多く契機になるのは，母音のまちがい（センセイ：センサイ，クライ：クロイ），引き音節の有無（クウキ：クキ，ハート：ハト），促音の有無（キッテ：キテ，スッパイ：スパイ）などである。音声教育と語彙教育との接点にある課題の1つである。

〔問21〕次の語形をもつ同音語をあげよ。

(ア) キク　　(イ) コウカン

(ウ) プロ　　(エ) コウガイ

〔問22〕任意の国語辞書により，同音語の多い語形を探し，なぜその語形に同音語が多いか考えてみよ。

〔問23〕次の語形に同音語があるかどうか調べよ。

(ア) スミレ　　(イ) テンペン

(ウ) コブトリ　　(エ) ムエン

(オ) ポカント　　(カ) メグム

(キ) メス　　(ク) ネアガリ

〔問24〕和語の同音語の組を5組以上あげよ。

〔問25〕入門期の学習者を想定して，次の語の類音語となりそうな語を考えてみよ。

(ア) もと（本・元）　　(イ) まち（街・町）

(ウ) がく（額）　　(エ) コート（coat・court）

(オ) 定期　　(カ) ショック

(キ) そっと〔副詞〕　　(ク) 千円

(ケ) 大学生　　(コ) 切符

(サ) 実験　　(シ) 美容院

(ス) 石屋　　(セ) バス

(ソ) 通り　　(タ) 議会

3—6　短い語と長い語（単音節語と多音節語）

(1)　短い語

語を成り立たせている拍数の多少を尺度にして，語形を観察するとき，短い語とか長い語とかの呼び方ができる。別に，1拍のものを「単音節語」'monosyllabic word'，拍の多いものを「多音節語」'polysyllabic word' と呼ぶことがある。もちろん，どの言語にも短い語と長い語があるが，言語の中には，短い語の多いものと，長い語の多いものとがある。概して語数の多い言語には長い語も多くなる必然性がある。それは，語数をふやす際にはどうしても後に触れる合成法や派生法に頼らざるをえないからで，要素になる基本的な単位語の何重にもわたる組み合わせになるからである。また，音素の種類が多く，その組み合わせが多様で，拍の構造も複雑な言語であれば，個々の語は相対的に長くなくてもすむわけである。中国語は単音節性 'monosyllabism' を性質の1つとする語族に属する言語で，現在も単音節の単語が多い言語である。また，英語は，中世英語（M. E.）以来，屈折語尾を失ったため多くの単音節語をもつことになって，現代英語（Mod.E.）の特徴の1つに単音節性が数えられるようになった。同じゲルマン語派に属するドイツ語よりも，英語の方が単音節傾向が強いと考えられている。とくに，口語英語においてその傾向が著しい。

(i)身体：head, eye, nose, arm, foot, blood

(ii)水陸：hill, earth, lake, ford, sea

(iii)天体・暦：sun, star, moon, day, month

(iv)動植物：fly, worm, beech, oak, elm, grass, tree

などは，単音節の基本語である。

次の表5は，そのような英語の単音節性を示す資料である。(Frederick Bodmer"The Loom of Language" 1943 London P.123)

表5　諸言語の単音節語率

言　　語	語　　数	単音節語数	百　分　率
英　　語	139	124	90
アイスランド語	138	100	73
ド　イ　ツ　語	135	100	74
フ　ラ　ン　ス　語	121	78	64.5
ラ　テ　ン　語	92	26	28

（上の調査は，聖書の対応章句をとりあげてなされたものである。）

ここで英語と中国語の音節構造を考えてみよう。

英　語（$C_1+C_2+C_3+$）V（$+C_{-4}+C_{-3}+C_{-2}+C_{-1}$）

中国語（C＋S＋）V（＋final）

声母　韻頭　主母音　韻尾

上のような構造の中で，C（子音音素）もV（母音音素）も，日本語よりは種類が多いから，異なり音節数は，英語で3,000以上，中国語で411となる。CがVの前に3種，後ろに4種まで立ちえる英語では，（$C_1+C_2+C_3$と並ぶときのCにはもちろん制限があって，自由な選択は許されないが）100あまりの異なり音節しかもたない日本語とは比べるまでもなく，多彩な音節が用いられている。そして，このことが英語に短い語を多く生ぜしめる条件になっているのである。同一子音の組 s-t を基にしても，sit, sat, set, seat, stop, stay, star, stand, sight, site, stir, state……などが立ちどころにあげられるだろう。1語1拍（1字）という強い性質があった中国語には，現代になっても，単音節性がまだ残っていて，我，你，他，看，走，干，嘗，念，行，写，高，好，甜，辛，不，是，就，越，呀など全品詞にわたって，基本的な語の例が見られる。

さて，古代日本語に/ko/（上代特殊仮名遣でも甲類）という語形をもつ子・卵・蚕・粉・籠などの語があった。これらの語は，そののち遅速の差はあったが，それぞれ，コドモ・タマゴ・カイコ・コナ・カゴという語形をもつようになり，とくに単独で使われるときには，もっぱら新しい語形が選ばれるようになってしまった。この変化には，/ko/が単音節の短い語形であったこと，および同音語が存在したことの2つの理由が考えられる。1拍の語は，その短小性（話しことばでは瞬間性）のゆえに，どうしても見（聞き）落とされやすく，また見（聞き）あやまられやすいという短所をもっている。したがって，言語記号の基本的役割である伝達性が低下し，語形の改変（ここでは長大化）傾向を胚胎するようになって，1拍語はきわめて不安定な存在になりやすいと見られるのである。とくにこの傾向は，話しことばにおいて，また基本的な語において強いと言える。ヒ（日）に対してヒルが，ヨに対してヨルがあり，ヒからヒニチという「文選読み」（もんぜんよみ：古代の漢文訓読法の1つで，同一の漢字・漢語をまず音で読み，さらに訓で読む方法。例．ニドトフタタビ，ユウニヤサシキなど）の逆順の語がつくられたりしているところに，複音節化（長大化）のちからを認めることができる。ハ（羽）に対するハネ，ハ（葉）に対するハッパ，ナ（菜）に対するナッパ，ナ（名）に対するナマエ，セ（背）に対するセイ，チ（乳）に対するチチなど，どれも同様の事情から生まれた語形と認められる。このように極端に短い語（単音節語）には，2拍語に，3拍語にというふうに複音節化していく傾向がある。古代日本語には，現代日本語ほど多音節の語は多くなかった。当然のことながら，それは多くの同音語の組を存在させることになった。/a/に「我」と「彼」とがあって，ともに代名詞であったり，/wi/に「井」「居」「猪」「堰」「藺」のような古代人の生活と密接な関係をもつ基本的な同音語群があったりするのはその例である。ちなみに，1拍の名詞については，古代から現代に至るまで，近畿方言では長音化して発音する傾向が強い。旧国名の「紀伊」は「木」の長音化した表記例とされている。

ところで，このような複音節化には，伝達力の維持強化というはたらきだ

けではなく，前記ヒに対するヒニチの例にうかがえるように，太陽をも意味する多義語「ヒ」の意味の１つ‘days’を特定化する＜意味限定作用＞が同時にはたらいていることが多い。元来単音節語であったと見られる中国語において，複音節の語が増えてきた一因として，この＜意味限定作用＞をあげることができる。漢語「気」に関して，キモチ・キゴコロ・キダテのような混種語（参照「語の出自」の章）やキシツ・キブンのような語がつくられるのは，１拍語「気」の多義性に対する分化特定のちからがはたらいた結果と見てよいだろう。

日本語には，鵜・江・尾・緒・蚊・木・毛・子・粉・洲・巣・酢・瀬・背・田・血・乳・津・手・戸・名・菜・荷・根・値・野・歯・葉・刃・火・日・樋・方・屁・帆・穂・間・身・実・三・六・目・芽・藻・裳・喪・矢・湯・夜・世・輪などの，現代も使われる１拍和語があるが，一見して，

(ア) 身体生理に関する語

(イ) 植物に関する語

が多いことがわかる。古代の多くの１拍語が消滅したり語形を変えたりした中で，これらが今も使われているのは注目すべきことであろう。唯一の濁音語「バ」（場）はもと「ニハ」であったとされるが，中世に音の変化によって２拍から１拍に縮まった例である。

先に紹介した英語に限らず，インド・ヨーロッパ語族の諸言語では，単音節の語がほとんどの品詞にわたって，基本的な語として分布しているが，とくに代名詞（I, we; je, nous; ich, wir; who; qui; wer），冠詞（a; un; ein），前置詞（from, of; de; von），接続詞（but ;mais; aber）などの頻繁に使用される機能語‘function word’では単音節性が顕著である。「2. 単語」の章で述べたイエスペルセンの小辞という名づけが，そもそも‘small part’の意味で，語形の短小性に由来していることを指摘しておきたい。このように多くの言語から例を集めてみると，語の短小性は多分に使用度数（‘frequency’参照「語の数」の章）と深い関係にあると考えられる。そこで，いま一度現代日本語にもどってみると，

①単音節語がきわめて少ない言語である。

②助詞・助動詞を除くと，単音節語は名詞の一部にしか存在しない。

③使用頻度の高い基本的な語の拍数は，平均2.86拍（基本語 1,216 語の平均，後述）であり，英仏独中の各言語と比べると，かなり長くなるようである。接辞類 101 項を含む 1,216 語のうち，1 拍のものは61であるから，5.02%にとどまる。

という特徴づけができる。ちなみに，日本語の人代名詞のうち，ワタシ・アナタ・カノジョ・ドナタやワタクシは 3 拍または 4 拍であって，語形の面からも，日本語の代名詞の特異性を印象づけるものとなっている。（意味・用法については後述する。）

次の表は，『新明解国語辞典（初版第 2 刷昭和47年 2 月刊）』を資料にして作った「単音節自立語分布表」である。

表 6　単音節自立語分布表

先行子音＼後続母音		＋a	＋i	＋u	＋e	＋o	＋ja	＋ju	＋jo
φ－	和	(あ)	(井)イ	鵜卯	柄江枝	尾緒	屋矢	湯	世夜
	漢		意医胃		絵		野		余
	洋								
k－	和	蚊香	木		毛褻	子粉			
	漢	可課	気奇機	苦句区	卦	弧故			
	洋								
g－	和					ご《豆汁》			
	漢	我蛾	儀義	具愚	下	五語後碁			
	洋								
s－	和	(然)		洲巣酢簀鬆	瀬背				
	漢	左差	死詩四			祖	社紗	朱主種	書署暑
	洋		シ			ソ			

z－	和								
	漢	座	字痔	図頭	是		蛇	(寿)	序除
	洋								
t－	和	田	血乳	津	手	戸ト			
	漢	他多	地知智			都徒途(斗)	茶		著
	洋								
d－	和				出				
	漢					度			
	洋					ド			
n－	和	名菜	荷煮ニ		子根値	野			
	漢		二						
	洋								
h－	和	葉歯刄ハ	火日樋	斑	屁(辺)ヘ	帆穂			
	漢	派覇	非否比	府麩負		歩			
	洋								
b－	和	場							
	漢		美	分部歩					
	洋								
p－	和								
	漢								
	洋	パ《仏》			(ペ)	(ポ)			
m－	和	間真	身実三	六	目芽(女)	藻裳喪			
	漢	魔		無					
	洋		ミ						
r－	和					ロ			
	漢		利理			炉艫			
	洋	ラ			レ				

w−	和	輪							
	漢	和							
	洋								

（　）は古語的なもの，略語的なもの

上表に見られるように，

①濁音・半濁音の拍には和語が少ない

②半母音を含む拍は種類が少ない

③外来語（洋語）の1拍語は少なく，略語（ポルトガルの意味のポなど）や音楽の音名（ドなど）にかたよっている

④全体として漢語の率が高い

ことなどがわかる。

(2)　長い語

どんな語が短い語であるかは，その言語の話し手であれば，だれでも容易に認識できるものである。しかし，長い語はそういうわけにはいかない。ある言語にどんな長さの語があるか，一般の人々は考えてもみないし，また考えてみたところで簡単に探しあてられるものでもない。

英語の単語では，‘floccinaucinihilipilification’（富などの軽視）が長い語として紹介されることが多いが，ウェブスターの辞書の第3版には‘pneumonoultramicroscopicsilicovolcanoconiosis’というさらに長い語が記載されており，また生化学の術語の中には1,913文字のものがあるよしである。（郡司利男『ことば遊び12講』）国によっては，地名・人名の中にもずいぶん長いものがあると言われるが，語の長さの限界はどのように考えられてきたのだろうか。

日本語においても長い語が問題になることはめったにない。『国語学大辞典』は「語」の認定のよりどころとして，

①文中での自立性によって

②文法的な語形によって

の２項をあげたのち，

③発音上の特質によって（一つづきの発音やアクセントの統一性など—「文節」は語の現象形態である—）

と記し，

④補助的には分かち書きの習慣

によるとしている（同辞典「語」の項からの抄出）が，具体的にはそれ以上の言及はしていない。これに対して，語の長さに関して，少し詳しく触れているのが，学生社刊の『日本語の意味・語彙　シンポジウム日本語③』である。

林　ただ，かりに「サトーナイカク」というふうな一つのアクセント核しか持っていないとすれば，それは一語としてとらえられているんだと考えておく，ということなんです。

鈴木　一つの整理のしかたとしてね。

阪倉　「東京大学国語研究室」という場合，一種の修飾語のようにとることもできるわけですか。

林　それはできましょうね。ただ，私はわざわざアクセントを変えたところに，一語意識というものがあるんだと考えてよくはないかと思う。

以上は，シンポジウムでの発言である。（なお「一語意識」については，同書18ページの脚注を参照のこと）

ここで，具体的に長い語をとりあげてそれらのアクセントを調べてみよう。アクセントについては，『明解日本語アクセント辞典』と『全国アクセント辞典』を参照した。

6拍　ゴナンツズキ

〃　ヒノヨージン

7拍　タツノオトシゴ

〃　コキューウンドー

8拍　オシツケガマシイ

8拍　コクサイレンゴー

〃　ダイタンフテキダ

9拍　サイコーサイバンショ
　　サイコーサイバンショ

〃　ミナモトノ(・)ヨリトモ

〃　サンジュー・サンカイキ

10拍　サンジュー(・)サンゲンドー

〃　チューオーユービンキョク

11拍　ナムミョーホーレンゲキョー
　　ナム・ミョーホーレンゲキョー

〃　ドーブツアイゴシューカン

〃　ゲンシリョクセンスイカン

12拍　チューカジンミンキョーワコク
　　チューカジンミンキョーワコク　（全国のみ）

〃　ナイカク・カンボーチョーカン　（明解）
　　ナイカクカンボーチョーカン　（全国）

13拍　トーカイドーチュー・ヒザクリゲ

（上記のうち，―は高い部分，…と┅とは高低が変わる部分）

以上の例から判ることは，おおよそ8拍以下のものについては，アクセントの山が2つあることはないが，9拍以上になると，山が2つに分かれるものが出てくるということである。上の例の中では，「三十三間堂」「三十三回忌」などが，アクセントの山が2つになる例である。11拍でも「動物愛護週間」や「原子力潜水艦」は山が1つであるから，山が複数個になるのは，単純に拍数の多さによるというわけにはいかず，厳密には語構成や語の熟合度なども関与した総合的なものと見るべきであろう。しかし，9拍以上になる

と，アクセントの山の単一性があやしくなり始めるという事実はとくに注目すべきことがらである。呼吸という生理的に避けられない作用によってわれわれ人間は個体の維持を図っている。どんな活動をしているときでも，休息・睡眠の最中でも，つねに新鮮な酸素を補いつづけている。言語音は呼気作用に伴って形成されるので，拍の多い語がつづくと，それだけ吸気の方が困難になる結果をきたすわけで，吸気のための調音休止が必要となる。あらゆる言語に，文節とか語とかの分節 'articulation' が存する理由がここにある。日本語のアクセントは，その機能の実態から見て，語の意味の識別よりは語としてのまとまり，すなわち統語性を示すものとされているが，この機能の限界が8拍ぐらいになるということである。つまり，「三十三回忌」や「三十三間堂」のような9拍・10拍の語になると，＜ただ1つのアクセントの山＞という原則が揺るぎ出すのである。前記の『国語学大辞典』や『日本語の意味・語彙　シンポジウム日本語③』にある，アクセントによる語の認定によると，日本語の中の長い語は，通常8拍ぐらいということになるであろう。

ヒノコ(火の粉)，エノキ(榎)，キノコ(茸)，タケノコ(筍)，ナノハナ（菜の花)，ヒノミヤグラ(火の見櫓)，サルノコシカケ，リューグーノオトヒメノモトユイノキリハズシ（竜宮の乙姫の元結の切り外し，甘藻の異名）などは，どれも＜名詞＋助詞ノ＋名詞＞（またはその重複）の構造になっている。普通の「象の鼻」「仏の顔」「太陽の黒点」のような場合は3単位に分析されるので，まとめて1語とすることはないが，ヒノコなどの8例は，単一の事物を指しているので，一般には1語と考えられやすい。たしかに，「猿の腰掛」までの7語は，そのアクセントからも，明瞭に1語であると判断してもよいものである。しかし，最後の「竜宮の乙姫の元結の切り外し」は，助詞「の」が3回も用いられている複雑な組み合わせであるだけでなく，20拍もの長大な語形であって，アクセントの面からはとうてい1語とは見なせない。助詞（「の」「て」「に」「を」など）を介して接合された全体は，ごく少数例（オキニイリ，マニアワセ，ヤッテクル，ミテクレ）を除いて，1語

とは見られないのである。それに反して，次のような例は，助詞を介さない多元結合の名詞で，アクセントを考慮しない一般の基準では1語のように扱われている。

ア　後方まきつけとび出し一回ひねり

イ　明治四十一年式上方差し入れ下方引き出し直立円筒赤色郵便箱

ウ　岡山県砒素ミルク中毒事件中央調査委員会中間報告書批判会

エ　昭和五十七年度海外勤務者子女教育実態調査集計報告書

アとイは先の「2　単語」のところで紹介したが，和語と漢語の結合による多元構造の例，ウは和語・漢語・外来語の結合の例，エは漢語ばかりの多元構造の例である。イは古い「逓信省」の規程に見られる表現であるが，日本人にはなじみの「ポスト」がこんなに長い名前であることに驚く人が多いだろう。法律や規約規程などにおいては，曖昧さを避けるために，やむをえず長大化した語が多い。

「日刊新聞紙の発行を目的とする株式会社及び有限会社の株式及び持分の譲渡の制限等に関する法律」

「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約第六条に基づく施設及び区域並びに日本国における合衆国軍隊の地位に関する協定の実施に伴う民事特別法」

などは，日本の法令の中の長大例であるが，「法律」の1種であるから，社会としてはそれぞれ名詞扱いをするであろう。しかし，言語的に見るときは，「…を目的とする」「…における」「…に関する」などを含んでいるので，句的なものとして処理すべきで，語とは考えられないであろう。「ポスト」の正式呼称にも，＜製作年次・用法用途・存在態様・形態・色彩・機能・目的等々＞が凝縮されたかたちで盛り込まれていて，まぎれ，まがい物をきびしく排除するような工夫が加えられている。このような多元の長大語に関して注意しなければならないのは，エのような漢語群の結合である。「国立国語研究所言語体系研究部第一研究室」「高等裁判所刑事上告事件移送規則」「国際連合教育科学文化機構」（いわゆるユネスコ UNESCO）「全国

高等学校国語教育研究連合会」「関西新国際空港設置期成同盟」「市立熱傷集中強化治療室」「厚生科学研究費補助金新薬開発研究費」のように，新聞その他で，日常的にいくらでも見られる。これも後述するように，漢語の特質を生かしてつくられた長大語である。しかし，厳密な意味では語と呼ぶべきではなかろう。このように長大なものは，既製単位である造語諸成分（参照「7　語の構成と造語法」）の直接的な多元結合によるもので，潜在的には，「国立国語研究所ノ言語体系研究部ノ第一研究室」のように分解され，さらに「国立ノ国語ニ関スル研究ヲスル所」のように，小さい形に還元される構造である。国語辞書にこのような多元的な長大語を求めても無駄である。その意味で，一般の辞書が採例している８拍ないし10拍を常識的に語の長さの限界と見ておくべきであろう。

〔問26〕英語の辞書を使って/ｂ＋母音＋ｔ/の構造をもつ単音節語を探せ。

〔問27〕中国語の動詞・形容詞で，単音節のものを各10語以上あげよ。

〔問28〕日本の古語の形/ka/には，「彼（副詞）」「鹿」「彼（代名詞）」などがあった。これらが，現代語ではどういう語形になっているか考えてみよ。

〔問29〕先の「単音節自立語分布表」の「和・洋」の欄にはブランクが多く，逆に漢語の欄にはブランクが少ない。この事実にはなにか必然的な理由が考えられるだろうか。

〔問30〕日本語の１拍語は名詞に集中しているが，それには理由があるだろうか。

〔問31〕国語と外国語の辞書各１点から，長い語を探し出し，それらの品詞や意味を調べてみよ。また，それらの語が，どんな成分から成り立っているかについても調べてみよ。

〔問32〕新聞・学術書から長大語を探し，それらの語が，どんな成分から成り立っているかを調べよ。

〔問33〕次の語のアクセントについて調べてみよ。

「夫唱婦随」「産業革命」「ジーゼルエンジン」「ジャーナリスティック」「自問自答」「泣き落とし戦術」「特命全権大使」「どうやらこうやら」「親分子分」「電気アイロン」「日本女子大学」

〔問34〕国語辞書の中から，なるべく長い見出し語を探し出し，そのアクセントの山が１つかどうか，また，アクセントが１種か２種か，調べてみよ。

〔問35〕＜名詞＋ノ＋名詞＞という構造をもつ長短さまざまの語を５つ以上あげよ。

4　語の機能

直立2足歩行によって獲得された人間の言語は，個々の社会的集団（言語共同体）ごとに異なった素材（音素やかぶせ音素）を異なった方法・様式で組み合わせて成った複雑な体系である。この体系の中に，一般に語という単位があると考えられているのであるが，言語の中には，日本語・英語・中国語と同じような方法では<語>のとり出しができない言語もある。文を構成するすべての要素が，密接に結合していて分析しがたい全一体となっており，複雑な文内容を外見上あたかも1語として表現するような言語があり，文すなわち語，語すなわち文であるような言語がある。「輯合語」'polysynthetic language' と呼ばれるものがそれである。エスキモー語やアメリカ・インディアンの諸言語にその典型を見ることができる。文の最終要素を除いて，語は普通の完全な形で使われることもなく，自立することもない。つまり，文末以外では非自立形である語幹形しか現れない。このような言語では，語というものの認識のしかたがかなりちがっているはずである。本章では，こういう特別な言語の場合を除外して，普通に把握認識される<語>の機能について簡単に述べておこう。

4—1　概念を固定化し伝達する機能

語は，もっとも基本的かつ普遍的に概念を固定化し，伝達するものである。ここで概念 'concept' というのは，「特性の共通する具体的対象の一系列全体に適合するような，1つの一般的意義をもった，言語的性質の象徴的表象」(『ラルース言語学用語辞典』) のことである。『新明解国語辞典』は簡略に「『…とは何か』ということについての受取り方（を表わす考え)。」と説明している。概念は言語によって表され，一般に人間の思考は概念によって行われるのである。

われわれ人間は，感覚器官をとおして，さまざまな事物の存在・態様・運

動のほか，自らの感情についてもある認識をもつことができるし，さらに他人の感情についても一定の推測をおこない，理解を示すことができる。しかし，具象的存在である草花も，猫も，実際には一本一本異なり，一匹一匹ちがっており，また生長変化の過程にあるために，厳密には一瞬一瞬変わっていっているはずである。しかしわれわれは，こういうちがいを超えて，草花や猫というものを，それぞれ同類のものの共通点においてとらえ，全体として認識している。このように多くの事物や事象の中から，個々の事物・表象だけに属する臨時的な性質とか偶然の特殊性とか個別性とかを捨てて，共通内容を抽象して得られる一般表象が概念である。例をあげると，サクラ・ヒノキ・カシ・ヤナギ・マツ・スギなどに共通する性質をまとめると，「木質がよく発達していて，堅く強い茎をもっている植物」という概念が得られ，それを日本人は/ki/（木）という語によって表しているわけである。また「クサ」「キン」「藻」などの各類に共通する性質をまとめると「植物」という概念が得られる。このように定義される概念は，もちろん抽象化のレベルのちがいによって，何層にもわたって得られるものであり，また人知の進歩によって，いくらでも精緻になるものである。そしてまた，その言語の使用者の生活・活動の舞台や範囲によっても，概念の網の大小・粗密が異なるのである。なお「木本」「草本」「菌類」「藻類」「バクテリア」などが，「植物」という概念の下位概念として考えられ，「木本」「草本」それぞれにも，厳密な概念規定が加えられるというように，科学の進歩に伴って，一般の「キ」「クサ」とはちがった科学上の概念が形成されてきていることなど，新しい概念の誕生や在来の概念の分化の例を各自の身辺に経験することが多いはずである。

ところで，このような多くの，さまざまな範囲にわたる，多様なレベルの概念に対して，もし「記号」（コード）が与えられなかったら，どうなるだろうか。人間は，自らの認識力によってとらえた事象を，空を漂う雲の如く，水に浮かぶ浮草のように，常に漂い流れるものとして，茫漠とした存在としてしか把握できないであろう。きわめて重要なことは，人間が概念に記

号とししての「語」を与えてきたということである。こうして，小は微粒子や細菌，大は地球・星雲・宇宙に至るまで，また１つの風景全体，悲しみにうちひしがれている青年の心情など，すべてが一個の語によって繋留され，固定される。また，時には数十，数百の語の積み重ねによって，意識の中の座標に確たる位置を占め，特定されることになるのである。同一の言語共同体ごとに，先人によって獲得され，形成された概念の体系が，語彙というかたちで世代から世代へと継承され，蓄積されている。したがって，共同体の内部の成員個々人がなんらかの伝達を試みようとするときには，必ず，概念に与えられた記号すなわち語の力を借りなければならない。もちろん，語のみをもってして，意志・感情の伝達が可能になるわけではなく，文法的手続をふまなければならないことは自明のことであるが，前述の如く，語そのものを知らなければ，伝達を果たすことは不可能である。ここに，語のもっとも基本的な，そしてもっとも普遍的な機能がある。

4—2　概念を拡充し緻密化する機能

概念を語として繋留し固定しえた人間は，意志・感情の伝達ができるようになっただけではなく，語によって整理され，体系化された概念を踏み台や手がかりにして，さまざまな概念の諸体系をつくり，概念の抽象化を進めることができるようになった。また，類概念・種概念というふうに，概念の緻密化・重層化・構造化を可能にした。換言すれば，１つの概念を中心にしてさまざまな関係概念の網を張りめぐらすようになった。このように，母語を駆使して果たされる伝達の機能のほかに，高度な思考をささえ，うながす機能が見られるのである。とくに，文法上の判断・推論などの形式と相まった語彙の量や質は，高度の思考をささえる重要な基盤であると言わなければならない。類似の自然現象であるのに「キリ」「カスミ」「モヤ」という語によって，微細なちがいを区別し，「無」と「空」と「虚」のちがいを云々するのである。五官でとらえられない「神」について人間は「神学」という抽象的な理論の体系さえ作ってきた。「億」「兆」「京」「垓」（ガイ）「秭」（ジョ）

という，とうてい実感できない巨大な数をも，頭の中に描くことができるし，逆に「虚数」というものも理解することができるのである。もし，概念を語というかたちあるもので表す（すなわち記号化する）ことがなかったとしたら，概念そのものについて語ることもできなかったし，ましてや，もとの概念から子概念・孫概念というように，細分化，増大化を図ることはとうていかなわないことであったであろう。

われわれ人間は，実に，概念の言語化によって，伝達と思考のかけがえのない貴重な手段を獲得したわけである。そしてまた，この伝達と思考のはたらきにより，概念の拡充・緻密化が進められ，思考のさらなる深化がうながされるという還流的作用が強化され，結果として人類の知的発展がうながされるようになったのである。

サル・ミツバチ・イルカなどの他の動物にあっても，低次の伝達媒体（匂い・光・超音波・電場・音波など）はあるが，それらには高度な分節性がないため，推論・分析・総合などを果たすレベルに達していないと考えられている。もちろん大脳のはたらきをはじめとするシンボル操作の機能全体を考慮すべきであるが，他の動物には，人間の言語に見られる思考のための機能はほとんど認めることができない理由がここにある。

〔問36〕「タヌキ」は動物分類学では，どのような科に属しているか。

〔問37〕鉄道用語としての「運賃」と「料金」はどうちがうか。

〔問38〕植物学の「珠根」の下位概念としてはどんなものがあるか。

〔問39〕次のうち「期末」に対する語はどれか。

期頭　期初　期端　期始　期首　期孟

〔問40〕「天候」「天気」「気候」の３語を，適用される時間の長短を基準にして，短から長への順に並べてみよ。

〔問41〕「天狗」のように，日本語の中に，外国語にはないと考えられる非実在の動物名があったら，あげてみよ。

〔問42〕『分類語彙表』によって，巨大なものをさす語，微細なものをさす

語を求め，各5語以上をあげよ。

〔問43〕「島」の上位概念・下位概念にあたる語にはどんなものがあるか。

〔問44〕「堅果」（けんか）という語と，概念上同レベルにあると考えられる語をあげよ。

〔問45〕《Roget's Thesaurus》の語の分類原理について調べてみよ。

〔問46〕「昆虫類」の上位概念と下位概念（複数）をあげよ。

〔問47〕次の語は，単位を表すものである。それぞれどんな単位を表しているか。

(ア) バーレル　　(イ) ナノ

(ウ) ダイン　　(エ) カラット

(オ) マッハ　　(カ) レム

(キ) ジオプトリー　　(ク) ソーン

5 語 の 数

5—1 ことばの海

われわれ日本人は日常何語ぐらい使っているのだろうか。また，何語ぐらい知っているのだろうか。一般の人々は，そのような問いを発することさえ考えたことがないであろう。国語教育の場でも，ほとんどの人はこのような<語の数>について関心を払うことはない。しかし，英語教育の場では事情が一変する。中学校から高校へ，高校から大学へという進学に際しては，英語の単語の力がきわめて頻繁に問題にされる。受験生の間で，「豆単」とか「シケタン」とか「デルタン」(「試験によく出る英単語」などの略語）とか呼ばれているポケット版小型英単語辞典の存在は，外国語の学習における必修語彙のリストの需要の熾烈さを物語るものであろう。大学受験では，英文和訳で最低3,000語が必要だとか，英作文で最低1,500語は要るなどと真剣に論じられ，また試験問題の調査・分析も徹底して行われている。辞書も，学習の目安として，見出し語にマークを付けているものがある。たとえば，研究社『新英和中辞典』(New Collegiate English-Japanese Dictionary) 第3版は，中学程度で習得すべき語 2,261 語に⁂を付し，高校程度で習得すべき語 6,639 語に＊を付し，計 8,900 語を「学習すべき基本となる語」としている。

たしかに，外国語として1つの言語を学ぶ場合には，何語ぐらい記憶すれば，どの程度その言語による表現が理解できるか，また逆に，日常の表現・理解行為をまっとうするためには，何語ぐらい必要なのか，といった目安が必要になるであろう。

普通，語は辞書の見出し項目 'entry' というかたちで記載登録されている。日本語と外国語の代表的な辞書について，その見出し項目数を紹介すると，次のようになる。

表7　代表的な辞典の収録語数

大辞典（平凡社）	750,000語
日本国語大辞典	400,000
国語大辞典	245,800
大日本国語辞典	190,000
広辞苑	150,000
角川国語中辞典	150,000
新潮国語辞典	140,000
辞海	100,000
大言海	100,000
三省堂国語辞典（第3版）	65,000
新明解国語辞典	58,431
岩波国語辞典	57,000
例解国語辞典	40,000
例解新国語辞典	40,000
言海	39,103
ウェブスター辞典	600,000
O. E. D.	500,000
佩文韻府	420,000
N. E. D.	410,000

概括的な言い方をするならば，超大型辞書で50万項目前後，小型辞書で5万項目前後というのが，見出し項目数の実態で，この点，日本語の場合も，英仏独中などの言語の場合もあまり差がないようである。この，小型辞書の場合の見出し項目数は，携帯に便で，価格も低廉，そしてなるべく求める知識がたくさん得られることという多方面のもとめに応ずるために結果したもので，個々の言語の語彙の実態とはあまり密接な関係はないとおもえる。先に辞書の「見出し項目数」という語を用いて「収録語数」とは書かなかったのには理由がある。つまり，辞書は語でないものも「見出し項目」としていることが多いからである。たとえば，日本で最大規模の辞書とされる『大辞典』には，いわゆる単語だけでなくて，人口に膾炙している諺・和歌・俳句などが独立項目としてあげられており，「名月」のほかに，「名月や池をめぐりて夜もすがら」などをこの辞書に求めることができる。そして，句意や作者を知ることができる。それだけではない。この辞書には，「ミナモトノ

ヨリトモ」「トクガワイエヤス」「センダイシ」「ミヤケジマ」等々，相当数の人名・地名も項目としてあげられていて，生没年とか事績とか所在とか人口とか産業とかが簡略に記載されている。つまり，今日から見ると『広辞苑』の詳細版というふうにとれるであろう。一般には，ことばの辞典（コトバテン）には，日本でも外国でも固有名詞は載せないというならわしがある。固有名詞とても名詞の１種であって，それぞれの言語の単語を成分としている限りは，すべて辞書に採録すべきであるという見解もあるだろう。しかしこの見解を実行に移すには大きな障害がある。一切の人名・地名等を採録することは，理論的にも実際的にも困難なことである。辞書完成に最低10年の歳月を要するとして，その間の生存者の死亡，新生児の誕生を記載することはできないし，それよりも何千万，何億という人名を記載する作業も，記載した辞書の作成も不可能である。地名の方でも，国名，州名，地方名，都市名などの採録は技術的にも数量的にも困難ではないが，一地域の入江の中にある小さな岩礁や山稜の鞍部などの１つ１つの呼称を採録することはとうていできることではない。一般のコトバテンが固有名詞を採録していない理由はここにあり，また大型のコトバテンが英雄・知名士の名や前記の国名などに限って採録している理由もここにある。

現実の辞書は，多く1,000ページ前後の，必ずしも多いとは言えない紙面に，あたう限り大量の言語情報を盛り込もうとさまざまな工夫をこらした結果出来上がったものであるが，そこにはおのずから紙面の制約からくる限界があるため，編集者の裁量による取捨選択が行われ，それが個々の辞書の特色となって結果するのである。そこに，小項目主義で，極力多くの語を見出し語とするか，大項目主義で基本的な語を見出し語としながら，複合語や派生語を子見出しとして一括して載せるかなど，さまざまなちがいが現出するのである。このように考えてくると，ある辞書にいくらくらいの語が採録されているかということも，あまり簡単には答えられないことがわかるし，また，語数自体に大きな意義をもたせることにも問題のあることが理解できるであろう。人により使用する語の数にちがいがあり，知っている語の多寡に

も大きな開きがあるので，本章冒頭の問いには，無理をしても平均的な値でしか答えることはできない。

このような，言わば大海のような語の世界ではあるが，どんな言語であっても，人々は小型中型の辞書に載っている語をすべて知っているわけではないのに，さして不自由なく意志の疎通を果たしているという実態がある。知っている語の数があまり多くなくても，このように大した支障もなく伝達行為が可能であるのは，どうしてだろうか。それは，１つには，使用される語の質に重要な意味があるからであり，いま１つには，語の組み合わせによって，多くの語が成り立っているからである。＜ことばの海＞という比喩的な表現を用いたが，この＜海＞には，いつも多くの人によって使われる語のグループと，あまり一般の人には使われることのない遠い存在である語のグループとがあり，両グループの間には，幾層もの語のグループがあって，使用者や場面によって，これらのグループの中の個々の語が，そのときどきに別のグループに移ることも多い。語彙の世界は，このような複雑な海流を蔵している，絶えず流動してやまない広く深い大海なのである。

５―２　特殊な語

前節で触れたように，伝達において問題になる語の数は，必ずしも多いことだけが重要であるとは言えない。とくに，日常生活に限るならば，２万語とか３万語とかを知っていることが前提になるとは言えず，むしろどんな語を知っているかということの方が問われると考えられるであろう。

たとえば，「耳珠」（ジシュ）という語を耳にした人が，意味がわからなくて困ったというような話は誰しも聞いたことがないであろう。「耳珠」は‘tragus’のことで，「外耳孔の前にある小突起」であるが，この語は，『日本国語大辞典』，『広辞苑』第３版，『学研国語大辞典』などには見当たらない。『大辞典』と『大漢和辞典』には「耳飾りのたま」という意味の「耳珠」が載っているだけである。ジシュが漢字「耳」と「珠」とでできている語ということがわかっている場合には，ミミかタマかに関係のある語であろうとい

う推測ができるであろうが，耳で聞いただけという場合には，「自主」や「自首」を考えてみるだけで，それ以上想像がはたらくことはあるまい。前後の文脈から「自主」や「自首」が該当しないとすれば，お手あげである。さらに，やや大きい辞書で「寺主」や「地主」を求めえた人があっても，これらはやはり文脈上不適切と判断されることになるだろう。「ジシュのわきにできものができた」とか「ジシュが赤くはれている」といった具体的な文脈もなく，また，ジシュという語が用いられたのが，病院や医務室でとか，医師によってとかいう場面的・位相的な条件がなければ，われわれにはとりつくシマもないわけである。

しかし，現実には，しりとり遊びとか，音声認知訓練などの特別の場合を想定しない限り，文脈も場面もなしに語だけが単独で用いられるということはまず考えられない。話しことばにおいても，書きことばにおいても，似た情況や条件がある。未知の語を耳にするのとは逆に，「耳珠」という語を知らない場合に，「耳珠がいたむ」ことを伝えたいときはどうすればよいだろうか。辞書や『分類語彙表』のページを繰って「耳珠」を探し求める人はめったにいないであろう。（そしてまた，そのような努力をしても，「耳珠」を探し出すことが無理であることもたしかである。）「耳珠がいたむ」ことを伝えるにしても，語「耳珠」を知らねばならないわけではない。「耳のあなの口のところにある軟骨の出っぱりがいたむ」のように，人は必要に迫られれば，他の表現をするであろう。そして，それが代理表現であるかどうかについても，医学を修めた人でなければ意識することはないであろう。

このような「耳珠」という語は，使用の回数や場面から見て，たいへん特殊な語であると言える。

ろうず（きず，または破損のため売り物にならなくなった商品）

うおじま（豊漁季の形容語で，５月初旬から１か月余りを瀬戸の人たちがいう。イヨジマとも）

あたり（印判の，捺印時人さし指のあたる部分で，通常縦に浅い凹みになっている。アタリツキとも）

モーゲージ（抵当，抵当権。‘mortgage’）

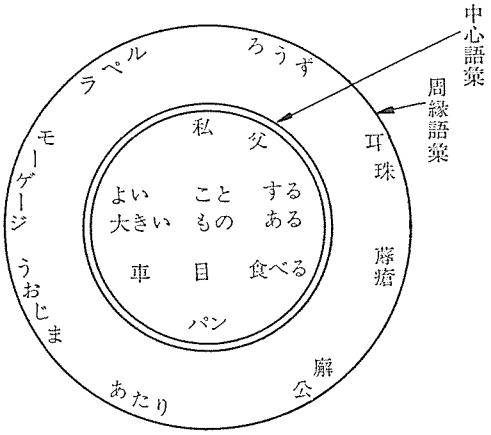
ラペル（〔上着の〕折り返したえり‘lapel’）

こうかい（公廨，巡査派出所の事務取扱い室。公廨は古くはクゲ・クガイと読まれて，役所の意であった）

じょくそう（蓐瘡，とこずれ。褥瘡とも書く）

なども，特殊な語であると考えられる。このような語は，ある限られた人たち，たとえば漁師，料理人，商人，警察官，医師たちが使うだけで，一般の人たちには，語の存在さえ知られていないことが多い。こういう特殊な語ばかり，1,000語記憶していたとしても，日常生活の中で，ことばを理解したり，ことばで伝達したりすることは，極端にむずかしいにちがいない。なぜなら，日常頻繁に用いられる語は身についていないため，簡単で卑近なことを理解したり表現したりすることが全然できないからである。ここにいう＜特殊な語＞は，使用の範囲が極端に狭く，したがってまた，使用の回数が一般の人々の間では無視されるほど少ないという点で，特殊なのである。上

図2　周縁語彙と中心語彙



例のように，専門用語，特殊な職務上の語，特定地域の方言語彙，古語，俗語，隠語などが，これに属する。日常，一般の人々が広く使う語に対して，これらは，日常の一般語彙の周縁に分布するから，周縁語彙 'marginal vocabulary' と呼んでもよいだろう。

さて，上に問題にしてきた＜特殊な語＞とは逆に，日常のいろんな表現においてしばしば用いられる語がある。日常生活で用いられる語というものが，ただちに日本人全体が共通して用いる語とは言えないし，また，すべての日本人に共通する＜日常生活＞というようなものが具体的に考えられるわけでは無論ないが，より多くの日本人が，よく使う語というものは考えられる。具体例をあげるとすれば，コト・モノ・トコロ・トキ・タメ・ワケ（以上名詞），アル・イル・ナル・スル（以上動詞），ヨイ・大キイ・ナイ・多イ（以上形容詞），ワタシ・コレ・ソレ・ドコ（以上代名詞）などは，調査をするまでもなく，われわれがきわめて頻繁に使っている語であるとの見当をつけることができるものである。ここで先の＜周縁語彙＞に対して，いろんな表現においてよく用いられる語を＜中心語彙＞と称してもよい。言語教育においては，当然のことながら，このような＜中心語彙＞を優先的かつ系統的に教え，教育効果を高めることが要請される。さて，そのような＜中心語彙＞について，これまでどのような研究調査が行われてきたであろうか。代表的なものとして，以下に＜基礎語彙＞＜基本語彙＞＜基幹語彙＞などをとりあげてみよう。

5—3　基礎語彙

基礎語彙という考え方は，もとイギリスのオグデン（C.K. Ogden）が中心になって1種の国際補助語を考案したときに端を発している。オグデンが所長を務めていたケンブリッジの 'Orthological Institute' から1930年に，Basic English という国際補助語が発表された。従来のいわゆる＜国際補助語＞が機会均等主義に基づき人工的に作成されていたために，国際語として広まる上で多くの障害があったことを反省して，実際に使われている自然言

語で，しかも人類全体の3分の1がすでに学んでいる英語が国際語としてもっとも適当であると考えて，われわれの言語表現の内容を心理学的に分析した結果，850語で日常普通のことがらはすべて表現できるという確信をもって発表されたものである。（参照『英語学辞典』研究社刊 'Basic English' の項。ただし，同辞典は《基本英語》と訳している）一般の英語とこの Basic English とがちがう点は，オグデンらが強調している<動詞不使用> 'no verbs' の原理である。もっとも，実際には，come, do, get, have などの動詞18語を 'operators'（作用語）として使用している。この 'operators' と24個の前置詞（'directives' 指向辞と称する）とを組み合わせて，多くの動詞を使うのと同じ働きをさせている。850語の内訳は次のとおりである。

名　詞　600語

形容詞　150語

接続詞・冠詞・代名詞・副詞　100語

なお，このほかに，週日名，月名，alcohol, automobile のような 'international terms' など，合計100語の使用が認められている上に，-ed, -er, -ly などの接尾辞が自由に使用できるとされている。（ちなみに，850語のうち単音節語は60.8%に及び，短い基本語が選ばれていることがわかる。）

この Basic English の考え方には，複合語や連語の扱いについて問題になることがある。すなわち，850語というふうに語数を制限しながら，実際は18語の operators と24語の directives の組み合わせによる連語が数百語使われることになっており，上述のように clear から派生される clearly は Basic English のリストには入っていなくても，使うことになっている。したがって，850語としながら，実際上の使用語は数千語に及ぶはずである。

さて，ここに紹介したオグデンの Basic English の発想の中には，1つの重大な点がある。それは日常普通の言語表現が，学問的な分析結果に基づきながらも，850語で可能であるとしていることである。これは，850語という総数の枠やゴールを決めて，現実の言語生活を律する方法であり，そこでは主観的演繹的な態度で850語が選び出されているのである。この Basic Eng-

lish をわが国に紹介し，語学教授上の価値を高く評価したのは，岡倉由三郎であった。ついで，Basic English の方法に準拠しながら，英文学者土居光知が日本語を対象にして考案したのが『基礎日本語』である。1933年に発表された『基礎日本語』のはしがきにおいて，土居光知は「できる限り単純な，しかし何事でもはっきり言ひ表し得る，整理された，また記憶することがたやすい，基礎となるべき日本語を組織すること」を目指すとして，1,000語のリストを発表した。のち1943年には，さらに100語を追加して，1,100語の基礎語表を発表した。（オグデンのものも，土居光知のものも，Basic Words<基礎語>と称して，Basic Vocabulary<基礎語彙>とは称していない。）土居光知の『基礎日本語』は作成以来すでに半世紀を経過しているので，多くの点で現在の教育にはそのまま使いがたいと考えられるが，歴史的な意義もあるので，ここに紹介して，検討してみよう。

表8　基礎日本語分類表

1【ひと】
兄（あに）
姉（あね）
相手（あひて）
妹（いもと）
をぢ
夫（をつと）
男（をとこ）
弟（おとと）
をば
女（をんな）
子（こ）
祖先（そせん）
父（ちゝ）
妻（つま）
友（とも）
母（はゝ）
ひと
夫人（ふじん）
王（わう）

2【體】
體（たい）
頭（かしら）
髪（かみ）
毛（け）
顔（かほ）
目（め）
涙（なみだ）
耳（みゝ）
鼻（はな）
口（くち）
くちびる
歯（は）
あご
のど
くび
肩（かた）
胸（むね）
腹（はら）
手（て）
指（ゆび）
つめ
腰（こし）
ひざ
足（あし）
脳（なう）
神經（しんけい）
心臓（しんぞう）
肺（はい）
胃（ゐ）
肉（にく）
血（ち）
骨（ほね）
皮（かは）
筋（すぢ）
角（つの）
翼（つばさ）
羽（はね）
尾（を）

3【住居】
住居（すまゐ）
家（いへ）
屋根（やね）
戸（と）
階（かい）
まど
かべ
室（しつ）
柱（はしら）
床（とこ）
たゝみ
席（せき）
たな
庭（にわ）
門（もん）
便所（べんじょ）

4【着もの】
服（ふく）
帶（おび）
そで
はかま
羽織（はおり）
帽子（ぼうし）
外套（がいとう）
たび
靴（くつ）
かくし
ひも
ボタン

5【道具】
道具（だうぐ）
紙（かみ）
筆（ふで）
ペン
鉛筆（えんぴつ）
墨（すみ）
インキ
くし
はけ
時計（とけい）
くさり
めがね
かさ
かばん
杖（つえ）
あみ
刀（かたな）
鎌（かま）
鍬（くわ）
釘（くぎ）
陶器（たうき）
包（つつ）み
ねぢ
棒（ぼう）
はしご
針（はり）
びん
ベル
むち
枠（わく）

6【家の道具】
鏡（かゞみ）
かぎ
かご

コップ
さかづき
さじ
皿
膳
たんす
机
鍋
バケツ
箱
箸
ふた
袋

7【食するもの】

米
飯
麥
豆
芋
野菜
卵
鹽
砂糖
蜜

果物
みかん
葡萄
りんご
桃
菓子

8【飲むもの】

酒
汁
たばこ
乳
茶

9【食事】

食事
食
料理
馳走
味
吸ひ
飲み
かむ

10【自然】

一 自然

世界
元素
生命
天
空
ひ
つき
星
氣
風
火
焔
熱
光
輝
明
電氣
雷
水
液
蒸氣
雲
霧
雨
露

氷
湯
流れ
波
ガス
煙
塵
砂

11【地の表面】

地
土
東洋
西洋
陸
海
山
谷
川
野
原
田
畑
都會
市

町
田舍
道
橋
港
穴
石
岸
井戸

12【鑛物】

鑛物
金屬
金
銀
銅
鐵
鉛
石炭
石油
玉

13【植物】

植物
木
幹
根
枝
莖
節
葉
たね
芽
つぼみ
花
穗
實
麻
かづら
かび
きのこ
草
苔
櫻
菊
竹
ばいきん
ばら
松
板

14【動物】

動物
性
牡
牝
鳥
魚
貝
虫
あり
犬
牛
馬
蚊
蠶
蝶
鷄
猫
ねずみ
蜂
はへ
豚
蛇

15【數と量】

一 數

量
單位
個
度
多い
少い
足たる
過ぎる
あまり
圓
錢
メートル
リットル
グラム
キロ
倍
分
減
半
〇
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
百
千
萬
億

16【時】

とき
とし
頃
いま
過去
のち
昨日
明日
晝
夜
朝
晩
暦
春
夏
秋
冬
年
月
週
日
時
分
秒
早い
緩かに
おそい
急
あわてる
いつ
かつて
常

17【形】

形
型
姿
大
中
小
大い
小い

面　積　線　平行　角　隅　點　うづまき　球　傾斜　粉　平　段　粒　圓　わ

18【色】

色　赤　黄　綠　青　紫　白　黑

暗い

19【聲】

聲　音　音樂　歌　うたふ　蓄音機　ラジオ　聞く

20【位置】

位置　ところ　初め　間　終り　基礎　頂　中心　圍　周り　へり　東　西

南　北　うち　そと　右　左　前　うしろ　上　下　縱　横　行　列　おもて　裏　距離　そば　近い　遠い

21【旅】

旅　宿　汽車　きつぷ

停車場　飛行機　船　帆

22【通信】

通信　郵便　はがき　切手　電話　電信

23【機械・工業】

機械　工業　建築　車　しやしん　パイプ　ポンプ　ガラス　セメント　酸　炭

あぶら　ガソリン　砲　銃　絹　糸　綿　のり　らふ　せきけん

24【組織】

組織　體系　縣　郡　村　會　會社　軍　團　國　民　族

25【社會・文化】

社會

文化　神　佛　宗教　神社　寺　教會　教育　學校　圖書館　博物館　政治　規則　法律　權利　義務　裁判　權威　統制　警察　恩　德　罪　罰　風俗　習慣

式

財産　かね　資本　保險　銀行　税　印刷　新聞　映畫　廣告　舞臺　農業　植民　外交　百貨店　店

26【知識】

知識　法則　教へ　學　研究　直觀　分析　綜合　觀察　比較　批評　判斷　了解　發見　發明　經驗　常識　言葉　話はし　語と　字　かな　雜誌　本　いふ　問ひ　答へ　書く　文　讀み　小説　繪　論

劇　彫刻　藝　術　業　職　工　醫　歴史　地理　經濟　物理　化學　心理　統計

27【心】

心　意識　衝動　意志　理性　觀念　思想　主義　想像

夢　慾

28【心の働き】

見る　眺め　聞く　知る　認める　信　疑ひ　思ひ　考へ　試み　企て　計り　志　望み　願ひ　驚き　恐れ　偽り　忘れ　おぼえ　誇り

注意　計畫　應用　選擇　案

發展　説明　態度　主觀　客觀　同情　興味　賛成　反對　區利　心配　遠慮

29【感情】

感情　感じ　愛　怒り　悲しみ　きらひ　苦しみ　悔み　好み　樂しみ　慰め　憎み　恥ぢ

30【感覺】

感覺　暖い　暑い　甘い　荒い　痛い　かゆい　寒い　冷すい　するどい　なめらかに　がい　にぶい　柔らか

31【手の働き】

洗ふ　受け　打ち　寫し　埋める　植える　押し　折り　織り　切れ　着る　しばる　手術　たふす　繋ぎ　閉ぢる　取る　捕へる　投げる　握り　縫ひ　引き　開く　振り　觸れる　掘る　卷き　招き　みがき　結び　もつ

32【足の働き】

歩み　起き　踊り　かへり　來る　ける　越える　立ち　通り　乘る　はく　走り　行き　渡り

33【体の働き】

生れ　成長

生活　養ひ　榮え　衰へ　死し　息　倦る　疲れ　眠り　慣れ

34【働き一般】

働き　動き　ある　なる　ゐる　する　できる　得る　運動　しげき　影響　變化　流行　續き　當る　入る　置く　落る　及ぶ　かゝる　碎け　定め　去る　しまり　進み　すべり　接ぎ　添へ　出す　保つ　附け　解け　留め　殘り　匂ひ　似る　ねぢれ　除く　破壞　ばくはつ　反射　吹く　震へる　まさつ　交へる　燒き　止め　割り

35【行ひ】

行ひ　忠　孝　禮　拜　尊敬　祭り　仕事　作る　勤め　勉强　訓練　戯れ　遊び　催し　泣く　笑ひ　微笑　ほめる　所有　蓄へ　預け　求め　賣る　買ふ　勘定　拂ひ　貸し　借り　遇ふ　別れ　集まり　誘ひ　避ける　送り　待つ　訴へ　勸め　賴み　仕へ　從へる　助け　與へる　もらふ　届け　爭ひ　害　勝ち　競爭　攻擊　負け　守り　妨げ　報い　支配　指導　命　任せる　表す　傳へ　示す　許し　世話　あいさつ　改め　案内　奢り　飾り　加へる　形容　結婚　交換　使用　省略　調べ　整理　紹介　盜み　約束　用意　聯絡

36【狀態・性質】

狀態　性質　性格　特徴　高い　低い　廣い　せまい　深い

浅い　長い　短い　厚い　濃い　薄い　直ぐ　曲がり

老い　若い　幼い　肥えた　やせた　健康　病氣　富んだ　ぜいたく　代かり　貧しい　幸い　めでたい　親しい　疎い　親切　殘酷　賢しい

愚か　強い　ゆかしい　きびしい　弱い　ほがらか

重い　輕い　堅い　しなやか　滿ちた　かわいた　しめつた　新しい　古い　清い　にごり　よごれ　騒ぎ　靜か

單純　かさなる　混んだ

はつきり　ぼんやり

美しい　みにくい　をかしい

よい　わるい　優れた　劣る

淡白　熱心

調和　上品　精密　微妙

同じ　等しい　異なる　正しい　誤り　おほやけ　祕密

たやすい　偶然　突然

安全　危險　藥　毒　惜しい　完全　自由　大切　確しか　適當　必要　平均　平和　便利　誠　まじめ　利益　やすい

積極

附屬　範圍　限り　界　たがひ

番　かた　全　部　順序　原因

もと　末　端　次

38【一般】

一般　特別　普通

意味　內容　問題　事實　要素

理由　實質

こと　もの　名　品　柄　材料

種　類　例　科　級　組み　價　傾向　結果　章　印　力　調子　代　表　標準　目的　役

39【雜】

跡　カード　影　漢　軌道　國際　雜　刃　旗　灰　枚　ペイヂ　群

40【名の代り】

私　あなた

自身　他

それ　そこ

これ　こゝ　あれ

誰　何　どこ

41【關係を表はす語】

て　に　を　は　の　で　も　や　か　へ　於て　やう　ほど　ばかり　故　から　より　さへ

づつ　ついて　以つて　共に　まゝ　まで

42【繫ぎの語】

そして　しかし　また　卽ち　あるひは　と　が　もし……　ならば　ながら　ため

43【添への語】

或る　いゝえ　いかに　いくらか

かすか　必ず　さう　實際　すこし　すべて　たゞ　どうぞ　すでに　遂に　なほ　さら　非常　殆んど　全く　わづか

44【語の頭に添へる語】

お　第　幾　諸　不　今　毎

自働的

45【語の尾に添へる語】

様 氏 人 者

等 など ども 達

らしい ようたい べき

ぬ ない ならぬ

ます

下さい

場 所 局 化

46【あいさつ】

もしもし

ありがたう

どめん下さい

左様なら

（注１） 表８は，土居光知『基礎日本語』（昭和８年六星館）の「基礎日本語第１表（分類）」によるが，表の見やすさを考慮し，各項目の上部に番号を付した。

（注２） 表９＊印欄：「聞く」は「聲」の欄と「心の働き」の欄の両方に提示されているので，表９では「聲」の欄の数値からこれを削除した。

なお，合計が1,100語でないのは，「聞く」の重出を除いたためである。

表9 『基　礎　日　本　語』　の

品詞等 / 意味分野	名詞	代名詞	居体言	動詞				
				五段	上一	下一	カ変	サ変
ひ　と	19							
體	38							
住　居	14		2					
着もの	9		3					
道　具	26		4					
家の道具	15		1					
食するもの	16							
飲むもの	5							
食　事	5		2	1				
自　然	26		8					
地の表面	24							
鑛　物	11							
植　物	25		2					
動　物	22							
數と量	19		1	1	1			
時	25		1			1		
形	20		1					
色	8							
聲	6			1				
位　置	26		5					
旅	8							
通　信	5		1					
機械・工業	22							

語　の　分　布（1）

形容詞	形容動詞	連体詞	副詞	感動詞	接続詞	助動詞	助詞	接頭辞	接尾辞	連語	計
											19
											38
											16
											12
											30
											16
											16
											5
											8
											34
											24
											11
											27
											22
2									11		35
2	2		1								32
3											24
1											9
											* 7
2											33
											8
											6
											22

表9『基　礎　日　本　語』の

品詞等 / 意味分野	名詞	代名詞	居体言	動詞				
				五段	上一	下一	カ変	サ変
組　織	12							
社會・文化	44							
知　識	41		5	2				
心	11							
心の働き	18		16	2	1	1		
感　情	2		11					
感　覺	1							
手の働き	1		17	7	2	6		
足の働き			9	2		2	1	
體の働き	4		7		1			
働き一般	11		19	11	4	2		1
行　ひ	30		35	10		6		
狀態・性質	22		7	3				
關　係	15		3					
一　般	28		3					
雜	10		1					
名の代り	1	12						
關係を表はす語	5							
繋ぎの語	1							
添への語								
語の頭に添へる語	1							
語の尾に添へる語				1				
あいさつ								
計	652	12	164	41	9	18	1	1

語　の　分　布 (2)

形容詞	形容動詞	連体詞	副詞	感動詞	接続詞	助動詞	助詞	接頭辞	接尾辞	連語	計
											12
											44
											48
											11
											38
											13
11	2										14
											33
											14
											12
											48
											81
41	21	9	2								105
			1					1	2		22
			2						1		34
	1								1		13
											13
							15		1	3	24
			2		4		4				11
		1	18	1							20
								7			8
						9	1		12		23
										4	4
62	26	10	26	1	4	9	20	8	28	7	*1,099

『基礎日本語』に採られた語は，後述の語彙調査によって得られる<基本語彙>とちがって，個人の考えによって選ばれているだけに1つのまとまりを示していて，はるかに体系的であるという特徴をもっている。だから，選ばれた個々の語については問題があるかもしれないが，1つの理論的モデルとしても，語彙教育上の1つの目標としても，十分意義があると考えられる。(「着もの」の類に「かくし」「服」「靴」があげられているのに，「下駄」「ズボン」があげられていない。また，「ひと」の類に「夫人」があって，「祖父」「祖母」がない。「水道」「バス」「自動車」がないのは時代のせいかもしれない。以上，あげられている語の適否当否についての私見の1部である。) なお，選ばれた語の個々について問題が出てくるのは，語の選定基準に起因していることが多い。『基礎日本語』について言うならば，まず英語のBasic Wordsの分析に比して，日本語の語彙の研究が十分でないままに作成されたために，現在ではかなり自明な事項が，当時としては避けがたい不利な事情をもたらしたことを考慮しなければならない。端的に言えば，日本語の日常全般のことが，1,000語そこそこで表現し切れるとした点に，無理があったと考えられることである。英語でかりに850語でまかなえるとしたオグデンの着想に対して，日本語でもそれに近い語数を考えたところに無理があった。日本語では，もっと多くの語を使わないと，日常的な表現をまかなうことは無理であろう。現に，Basic English にしても，厳密に数えるならば，850語だけではなくて，数千語に及んでいるはずであるから，日本語の場合も，5,000語や6,000語は必要であろう。土居は，自分の『基礎日本語』に対する批評の1つ「Basic English から思ひついたもので，それに似せて作ったものであるから，國語の性質を破壊するもの」という意見について，「英語のやうに分析的でない日本語は，それはできないことでありまして，私は基礎概念を體系的に定めることによって語の選擇をしました。」と述べている。(『日本語の姿』319・320ページ) たしかに，動詞を69語（項目としては70であるが，「聞く」が重出している）あげるなどして，英語の名詞構文傾向とはちがう，日本語の動詞型志向に意を払ったように見受けられ

るが，実際は，動詞69語に対して，居体言（動詞連用形からの転成名詞）と考えられるものが2倍を超す164語も採られているのである。名詞652語とこの転成名詞164語の和816語は総語数1,099語（土居は1,100語としたが，上述のように「聞く」が重出しているので，1,099語となる）の74.25％に相当する。これは，まことに顕著な名詞過多の特徴と言わなければならないが，この特徴はつまるところ，語数を制限したため，抽象度の高い語によって，さまざまな事象を表現し切ろうとする必要から生じてきた，個別言語を超えた一般的な名詞増加傾向と見られる。

なお，『基礎日本語』には，「停車場」「かくし」のような，現代生活では間遠くなった語や，今ではとうてい1,000語程度の基礎語の中には入るまいと考えられる「膳」「杖」「羽織」「はかま」「さくじつ」「うづまき」「らふ(蠟)」等々が入っていて，そのことが，語彙の世界の新陳代謝の速さを現代のわれわれに教える結果にもなっている。

さて<基礎語彙>という呼称で，今1つ重要なのは，アメリカのスワデシュ（Morris Swadesh 1909～1967）が考えた言語年代学 'glottochronology' において用いられるリストである。これはもともと2つの言語が分裂した過去の年代を知るために，スワデシュが作成した100項目の基礎語彙のリストである。次に，もとの英語の表と，それの中国語訳と日本語訳とをあげる。（後の2表は，和田祐一氏の編集によるもので，各語の頭に付されたナンバーは，左欄が東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の『アジア・アフリカ言語調査表』の数字で，次にとびとびにあるのがスワデシュの「基礎語彙」100項の番号である。）

表10　スワデシュの基礎語彙表

		基礎語彙表						英語					
227	1	I	044	30	blood	321	69	stand	(815)		split
228	2	thou (you sg.)	045	31	bone	384		fall	882		turn (to)
229		he	043	32	fat, grease	308		push	315		swell
231	3	we	061	33	egg	309		pull	132	85	path, way, road
232		ye (you pl.)	068	34	horn	310		hold (in hand)	130		woods
233		they	032		claw	298		hit	140		lake
249	4	this	100	35	tail	418	70	give	141		sea
251	5	that	064		wing	313		rub, scrub	136	86	mountain
237	6	who?	065	36	feather, plume	314		scratch	135		river
253	7	what?	002	37	hair	1751		squeeze, wring	479	87	red
176		when?	001	38	head	305		stab, pierce	481	88	green
260		where?	007	39	ear	379		dig	482	89	yellow
256		how	005	40	eye	361		cut	477	90	white
426	8	not	008	41	nose	303		throw, cast	478	91	black
236		other	009	42	mouth	350		tie	167		year
194	9	all	013	43	tooth	366		work	163		day
471	10	many	011	44	tongue	393		count, reckon	171	92	night
195		some	032	45	fingernail	353		sew	461	93	hot (warm)
472		few	033	46	foot	354		wash	464	94	cold
179	11	one	033		leg	355		wipe	470	95	full
180	12	two	034	47	knee	346		cook (by boiling)	467	96	new
181		three	030	48	hand	284		dance	468		old, ancient
182		four	026	49	belly	283		sing	485	97	good
183		five	037		guts	291		laugh	486		bad, wrong
427	13	big, large	018	50	neck	292		weep (cry)	487		right, correct
									448	98	round
									452		straight
									460		narrow

455	14	long
428	15	little, small
456		short, brief
225	16	woman, female
224	17	man, male
226	18	person, man, one
202		father, papa
203		mother, mama
208		child
200		wife
199		husband
091		animal
089	19	fish
082		snake
063	20	bird
094	21	dog
083		worm, insect
087	22	louse
118	23	tree
121		grass
127	24	seed
126		fruit, nut
125		flower, blossom
124	25	leaf
123	26	root
128	27	bark
038	28	skin
060	29	meat, flesh

021		back
025	51	breast(s)
036	52	heart
035	53	liver
329	54	drink
287		suck, breathe in
328	55	eat
290	56	bite
012		spit
288		vomit
279		breathe
275	57	see, look
277	58	hear
278		smell
421	59	know
406		think
325	60	sleep
398		live
397	61	die
349	62	kill
338	63	swim
337	64	fly
339		float, drift
380		flow, stream
316	65	walk
412	66	come
324	67	lie, lie down
322	68	sit

280	71	say
399		play
092		hunt(ing)
299		shoot
403		fight
294		fear
157		sky
159	72	sun
160	73	moon
162	74	star
143	75	water
144		ice
156		snow
155	76	rain
152		wind
145	77	stone
147	78	sand
053		salt
146	79	earth
153	80	cloud
154		fog
148		dust
149	81	smoke
151	82	fire
150	83	ash(es)
385	84	burn
386		blow
892		freeze

459		wide, broad
434		thin
433		thick
389	99	dry
388		wet, damp
335		rotten
454		dirty
449		sharp, acute
450		dull, blunt
451		smooth
435		heavy
239	100	name
079		clothing
095		rope
073		stick, pole, bar
076		spear, lance
257		here
258		there
266		leftside, left
267		rightside, right
458		near
457		far, distant
497		and
979		because, for
491		if
498		with, together
496		(at, in)
211–216		(brother/sister)*

基礎語彙表　　中国語

227 1 wǒ 我
228 2 nǐ 你
229 tā 他・她・它・牠
231 3 wǒmen 我們
232 nǐmen 你們
233 tāmen 他們・她們・它們・牠們
249 4 zhè(ge) 这个(這個)
251 5 nà(ge) 那个(個)
237 6 shuí 誰
253 7 shénme 什么(麼)・甚么(麼)
176 jǐshí 几时(幾時)
260 nǎr 哪儿(兒)
256 zěnme(yàng) 怎么样(麼樣)
426 8 méiyou 没有
236 biéde 别的
194 9 quànbù 全部, quándōu 全部
471 10 duō 多
195 yìxiē 一些, yìdiǎnr 一点儿(兒)
472 shǎo 少
179 11 yī 一, yīge 一个(個)
180 12 èr 二, liǎngge 两个(兩個)
181 sān 三・参, sān'ge 三个(個)
182 sì 四, sìge 四个(個)
183 wǔ 五, wǔge 五个(個)
427 13 dà 大
044 30 xuè 血
045 31 gútou 骨头(頭)
043 32 zhīfáng 脂肪
061 33 dànr 蛋儿(兒)
068 34 jiǎo 角
032 zhǎo 爪
100 35 wěiba 尾巴
064 chibǎng 翅膀
065 36 yǔmáo 羽毛
002 37 tóufa 头发(頭髮)
001 38 nǎodài 脑(腦)袋
007 39 ěrduo 耳朵(朵)
005 40 yǎnjing 眼睛
008 41 bíz 鼻子
009 42 zuǐ 嘴
013 43 yá 牙
011 44 shétou 舌头(頭)
032 45 zhǐjiǎr 指甲儿(兒)
033 46 jiǎo 脚
033 tuǐ 腿
034 47 xīgài 膝盖(蓋)
030 48 shǒu 手
026 49 dùz 肚子
037 cháng 腸
018 50 bóz 脖子
321 69 zhàn 站
384 luòxià 落下
308 tuī 推
309 lā 拉
310 ná 拿
298 dǎ 打
418 70 gěi 給
313 cā 擦
314 sāo 搔, náo 挠
1751 níng 拧
305 cì 刺, zhā 扎
379 wā 挖
361 gē 割, giē 切
303 shuāi 甩, rēng 扔
350 jì 繫, jié 結
366 zuohuo 做活, láodòng 劳动(勞動)
393 shǔ 数
353 féng 縫
354 xǐ 洗
355 cā 擦
346 zhǔ 煮
284 tiàowǔ 跳舞
283 chàng 唱
291 xiào 笑
292 kū 哭
(815) liè 裂
882 xiāng 向, guǎi 拐
315 zhǎng 漲(漲)
132 85 mǎlù 马(馬)路, dàolù 道路
130 lín 林
140 hú 湖
141 hǎi 海
136 86 shān 山
135 hé 河
479 87 hóng 紅
481 88 lǜ 綠
482 89 huáng 黄
477 90 bái 白
478 91 hēi 黑
167 nián 年
163 rì 日, tiān 天
171 92 wǎnshàng 晚上, yèli 夜里(裏)
461 93 rè 热(熱)
464 94 lěng 冷
470 95 mǎn 滿
467 96 xīn 新
468 lǎo 老, jiù 旧
485 97 hǎo 好
486 huài 坏(壞)
487 zhèngquè 正确(確)
448 98 yuán 圆(圓)
452 zhí 直
460 zhǎi 窄

455 14 cháng 长(長)
428 15 xiǎo 小
456 duǎn 短
225 16 nǚrén 女人
224 17 nánren 男人
226 18 rén 人
202 fùgīn 父亲(親)
203 mǔgīn 母亲(親)
208 háiz 孩子
200 qīz 妻子
199 zhángfu 丈夫
091 dòngwù 动(動)物
089 19 yú 鱼
082 shé 蛇
063 20 niǎor 鸟儿(鳥兒)
094 21 gǒu 狗
083 chóngz 虫子
087 22 shīz 蝨子·虱子
118 23 shùmù 树(樹)木
121 cǎo 草
127 24 zhǒngz 种(種)子
126 guǒshí 果实(實)
125 huār 花儿(兒)
124 25 yèz 叶(葉)子
123 26 gēnr 根儿(兒)
128 27 shùp 树(樹)皮
038 28 pífū 皮肤(膚)
060 29 ròu 肉

021 bèi 背
025 51 rǔfáng 乳房
036 52 xīnzàng 心脏(臟)
035 53 gān 肝
329 54 hē 喝
287 xī 吸, chōu 抽
328 55 chī 吃
290 56 yǎo 咬
012 tuòmo 唾沫
288 tǔ, tù 吐
279 hūxī 呼吸
275 57 kàn 看
277 58 tīng 听(聽)
278 wén 闻(聞)
421 59 zhīdao 知道
406 xiǎng 想
325 60 shuìjiào 睡觉(覺)
398 huó 活
397 61 sǐle 死了
349 62 shāsī 杀(殺)死
338 63 yóuyǒng 游泳
337 64 fēi 飞(飛)
339 fú 浮
380 liú 流
316 65 zǒu 走
412 66 lái 来(來)
324 67 shuì 睡, tǎng 躺
322 68 zuò 坐

280 71 shuō 說
399 wán 玩
092 shòuliè 狩猎(獵)
299 shè 射
403 dǎzhàng 打仗
294 hàipà 害怕
157 tiān (kōng) 天空
159 72 tàiyang 太阳(陽)
160 73 yuèliang 月亮
162 74 xīngxing 星星
143 75 shuǐ 水
144 bīng 冰
156 xuě 雪
155 76 yǔ 雨
152 fēng 风(風)
145 77 shítou 石头(頭)
147 78 shāz 沙子
053 yán 盐(鹽)
146 79 tǔ 土
153 80 yúncai 云(雲)彩
154 wù 雾(霧)
148 huīchén 灰尘(塵)
149 81 yān 烟·煙
151 82 huǒ 火
150 83 huī 灰
385 84 shāo 烧(燒)
386 chuī 吹, guā 刮(颳)
892 dòng 冻(凍)

459 kuān 寬
434 báo 薄
433 hòu 厚
389 99 gān 干(乾)
388 shī 湿(濕)
335 fǔbài 腐敗
454 zāng 脏(髒)
449 ruì 銳(銳)
450 dùn 钝(鈍)
451 guānghuá 光滑
435 zhòng 重
239 100 míngzi 名字
079 yīfú 衣服
095 suǒ 索, shéng 绳(繩)
073 gǎnzi 杆(桿)子, gùnzi 棍子
076 qiāng 枪(槍)
257 zhèr 这儿(這兒)
258 nàr 那儿(兒)
266 zuǒ 左
267 yòu 右
458 jìn 近
457 yuǎn 远(遠)
497 hé 和, gēn 跟, yǐjí 以及
979 yínwèi 因为(爲)
491 yàoshi~(de huà) 要是~(的話)
498 gēn 跟, yìqǐ 一齐, yīqǐ 一起
496 zài 在
211–216 (gēge 哥哥/jiějie 姐姐)*

基礎語彙表　日本語

227	1	わたし(私)
228	2	あなた
229		かれ(彼)
231	3	わたしたち(私達)
232		あなたたち
233		かれら
249	4	これ
251	5	あれ
237	6	だれ(誰)
253	7	なに(何)
176		いつ(何時)
260		どこ
256		どう，どのように
426	8	ない(無)
236		ほかの(他)
194	9	ぜんぶ(全部)，すべて
471	10	たくさん，おおい(多)
195		じゃっかん，いくつか，いくらか
472		すくない(少)
179	11	いち(一)，ひとつ
180	12	に(二)，ふたつ
181		さん(三)，みっつ
182		し(四)，よっつ
183		ご(五)，いつつ
427	13	おおきい(大)，おおきな(大)
044	30	ち(血)
045	31	ほね(骨)
043	32	あぶら(脂)，しぼう(脂肪)
061	33	たまご(卵)
068	34	つの(角)
032		つめ(動物の爪)
100	35	しっぽ(尻尾)，お(尾)
064		つばさ(翼)，はね(羽)
065	36	うもう(羽毛)
002	37	かみ(髪)，かみのけ(髪の毛)
001	38	あたま(頭)
007	39	みみ(耳)
005	40	め(目)
008	41	はな(鼻)
009	42	くち(口)
013	43	は(歯)
011	44	した(舌)
032	45	つめ(人の爪)
033	46	あし(足)
033		あし(脚)
034	47	ひざ(膝)
030	48	て(手)
026	49	おなか，はら(腹)
037		はらわた(腸)
018	50	くび(首)
321	69	たつ(立)
384		おちる(落)，らっかする(落下)
308		おす(押)
309		ひっぱる(引張)
310		もつ(持)
298		うつ(打)
418	70	あたえる(与)，やる
313		こする(擦)
314		かく(掻)，ひっかく(引掻)
1751		しぼる(絞)
305		さす(刺)
379		ほる(掘)
361		きる(切)
303		なげる(投)，ほうる(抛)
350		むすぶ(結)
366		はたらく(働)
393		かぞえる(数)
353		ぬう(縫)
354		あらう(洗)
355		ふく(拭)
346		にる(煮)
284		おどる(踊)
283		うたう(歌)
291		わらう(笑)
292		なく(泣)
(815)		われる(割)
882		むく(向)，まがる(曲)
315		ふくれる(脹)
132	85	みち(道)
130		はやし(林)
140		みずうみ(湖)
141		うみ(海)
136	86	やま(山)
135		かわ(川)
479	87	あかい(赤)
481	88	みどり(緑)
482	89	きいろ(黄色)
477	90	しろい(白)
478	91	くろい(黒)
167		とし(年)，ねん(年)
163		ひ(日)
171	92	ばん(晩)，よる(夜)
461	93	あつい(熱)，あつい(暑)
464	94	つめたい(冷)
470	95	いっぱい，みちた(満)
467	96	あたらしい(新)
468		ふるい(古)
485	97	いい(良・善)
486		わるい(悪)
487		ただしい(正)
448	98	まるい(丸)
452		まっすぐ(真直)
460		せまい(狭)

455 14 ながい(長)
428 15 ちいさい(小)，ちいさな(小)
456 みじかい(短)
225 16 おんな(女)
224 17 おとこ(男)
226 18 ひと(人)
202 ちち(父)
203 はは(母)
208 こ(人間の子)，こども(子供)
200 つま(妻)
199 おっと(夫)
091 どうぶつ(動物)
089 19 さかな(魚)
082 へび(蛇)
063 20 とり(鳥)
094 21 いぬ(犬)
083 むし(虫)
087 22 しらみ(虱)
118 23 き(木)
121 くさ(草)
127 24 しゅし(種子)，たね(種)
126 み(実)
125 はな(花)
124 25 は(葉)
123 26 ね(根)
128 27 じゅひ(樹皮)
038 28 ひふ(皮膚)，かわ(皮)
060 29 にく(肉)
021 せなか(背中)
025 51 ちち(乳)，ちぶさ(乳房)
036 52 しんぞう(心臓)
035 53 かんぞう(肝臓)
329 54 のむ(飲)
287 すう(吸)
328 55 たべる(食)
290 56 かむ(噛)，かみつく(咬)
012 つば(唾)
288 はく(吐)
279 こきゅうする(呼吸)，いきをする
275 57 みる(見)
277 58 きく(聞)
278 かぐ(嗅)
421 59 しる，しっている(知)
406 かんがえる(考)
325 60 ねむる(眠)
398 いきる(生)
397 61 しぬ(死)
349 62 ころす(殺)
338 63 およぐ(泳)
337 64 とぶ(飛)，ひこうする(飛行)
339 うく(浮)，うかぶ(浮)
380 ながれる(流)
316 65 あるく(歩)
412 66 くる(来)
324 67 ねる(寝)，ねている，よこたわる
322 68 すわる(坐)，こしかける(腰掛)
280 71 いう(言)
399 あそぶ(遊)
092 りょう(猟)
299 いる(射)，うつ(撃)
403 たたかう(戦)
294 こわがる(怖)，おそれる(恐)，おそろしい
157 そら(空)
159 72 たいよう(太陽)
160 73 つき(月)
162 74 ほし(星)
143 75 みず(水)
144 こおり(氷)
156 ゆき(雪)
155 76 あめ(雨)
152 かぜ(風)
145 77 いし(石)
147 78 すな(砂)
053 しお(塩)
146 79 つち(土)
153 80 くも(雲)
154 きり(霧)
148 ほこり(埃)
149 81 けむり(煙)
151 82 ひ(火)
150 83 はい(灰)
385 84 もえる(燃)
386 ふく(吹)
892 こおる(凍)
389 99 かわく(乾)，かんそうする(乾燥)，かわいた
388 ぬれる(濡)，ぬれた，しめった(湿)
335 くさる(腐)，くさった(腐)
454 きたない(汚)
449 きれる，するどい(鋭)
450 きれない，にぶい(鈍)
451 なめらか(滑)，すべっこい
435 おもい(重)
239 100 なまえ(名前)，めいしょう(名称)
079 きもの(着物)，いふく(衣服)
095 つな(綱)
073 ぼう(棒)
076 やり(槍)
257 ここ(此処)
258 そこ(其処)
266 ひだり(左)
267 みぎ(右)
458 ちかい(近)，ちかく(近)
457 とおい(遠)，とおく(遠)
497 および(及)，と
979 なぜなら，から
491 もし(…ならば)
498 (と)ともに，(と)いっしょに
496 で(場所)
211–216 あに，あね…(文献解説参照)*

スワデシュの表には「しらみ」のような，一見<基礎的>とは考えにくい語も入ってはいるが，原初的な生活や自然環境に関する基礎的な語が網羅されていて，本来比較言語学の問題解明にかなうような語が集められている。スワデシュの方法には，いくつかの原理的な疑問が提出されているが，ただ単に比較言語学上の新見であるにとどまらず，伝達の基礎となる語彙のレベルで，文化・思想・伝統などの抽象世界を除いた，普遍的なリストを提供した点でも大きな意義をもっていると言えるだろう。表に見られるとおり，代名詞，数詞，親族名称，動植物名，身体・生理関係の名詞，生命維持に直接関与する動詞，知覚動詞，一般的な動詞，自然物名，鉱物名，自然のはたらきを示す動詞，地形名，色彩形容詞，時間名詞，一般的な形容詞等々の100項目，二百数十語は，たしかにもっとも基礎的普遍的と考えられるものである。ただ，スワデシュのリストでは，人間の言語に特有な，文化的伝承に関わる基礎的な語彙が不問に付されているから，個別言語ごとにその分野の語彙を追補して吟味を加えることが必要になる。この部分にこそ個別の言語の特徴がはっきりと現れるのである。たとえば，「神」「天」「障子」「火鉢」「鳥居」「扇子」「ふろしき」などの語の有無・意味などが，先の100項目の基礎語の吟味の上に，検討されるべきであろう。

服部四郎氏はスワデシュの基礎語彙に補訂を加えて，『基礎語彙調査表』を作成し，次のような調査項目選定の原則を示された。

① それを表す単語がなければ生活に支障を来すであろうと考えられるような事物を表す単語は採集できるように項目を選ぶ。

② そういう事物の一部分を表すやや特殊な単語に該当しうる項目はできるだけ省略する。たとえば，「眼」はとるが，「まつげ」，「ひとみ」，「めじり」などはとらない。

③ 意味のあまりに抽象的な，あるいは不明確な単語はとらない。例，「意味」，「礼儀」，「性質」など。

④ できるだけ諸民族に共通して，その生活に関係が深いと考えられる事物に関する項目を採用し，少数の民族にのみ特有の事物に関するものは除く

ように努める。文明民族にのみ特有の事物に関するものはとらない。ただし，「雪」，「氷」のように熱帯地方にはなくても，その他の地方に共通のものはとる。

⑤ 同一あるいは類似の事物に関係した単語をできるだけ重複してとらないようにする。たとえば，「食物」をとったから「食事」はとらない。「働く」をとったから「仕事」はとらない。「近い」をとったから「近づく」はとらない。「盗む」をとったから「泥棒」はとらない。

⑥ スワデシュの言語年代学語彙は全部とる。

こうして，457の基礎的項目が選定され，日本語諸方言の比較検討に供されることになった（『言語学の方法』）。

スワデシュのものも服部氏のものも，もっぱら研究にあてられる基礎語彙であって，われわれが必要とする教育のための基礎語彙ではないから，まず語数の面でも極端におさえている点でちがいがあり，質の面でも，文化的で抽象的な語は除外するという原則を貫いている点でもちがいがある。しかし，＜基礎語彙＞というものの本質をよく教えてくれるものである。

5—4 基本語彙

前節においてとりあげた基礎語・基礎語彙が，主観的に選定されるものであるのに対して，客観的に選定される語彙がある。＜基本語彙＞ 'fundamental vocabulary' と呼ばれるものの多くは，ある何らかの目的のために選定されるものであるが，たいてい具体的な言語資料の調査分析に立脚しているので，単位の区切り方や分類法を一致させておけば，だれが調査を行っても，その結果にちがいが生じることはないはずである。「客観的」と書いたのはそのためである。また，調査前にあらかじめ1,000語とか2,000語とかいうふうに語彙の大きさを限っておくこともあまりしない。こういう点で，基本語彙は，前もって，850語とか，1,000語とかの枠を考えて，その枠内に充当すべき語を選定する基礎語彙とは対照的であると見られるのである。『国語学大辞典』には次のように記されている。

（上略）語彙は中心が密で確定しており，周辺に行くほど粗で動いている球にたとえることができる。語彙の中で，使用率（計量語彙論の項参照）の大きい語ははっきりとらえることができるが，使用率が極めて小さい語は存在がはっきりしない。たとえば，新語，流行語のように現われたり消えたりする。そこで言語学習のためには，球の中心部にあたる語の部分を取り出すことが役に立つが，これを基本語彙という。基本語彙とは，使用率が大きく，しかも対象とする言語作品あるいは言語体系の中に幾つかの層を設けて考えることができる場合（たとえば雑誌であれば，実用記事・文芸作品・趣味など掲載する内容別の層を設け，また平安時代物語であれば作品別に層を設けることができる），できるだけ多くの層にわたって出現する語の集合をいう。したがって，基本語彙は，小さな量の語によって，対象とする範囲に含まれる言語作品・言語体系中の語（単位語）の大部分を占めることができるという性格を持つ。（下略）（以上，樺島忠夫氏執筆の「語彙」の項からの抄出）

つまり，使用率（後述）が大きくて，使用範囲（後述）が広い語の集合が基本語彙である。使用率とか使用範囲とかいう具体的客観的な値を根拠にする点が基礎語彙と顕著にちがう点である。

基本語彙は，普通，特定の言語資料をとりあげて，その中にある大小さまざまの文を，個々の語（または単位語）に区切り，その区切られた語（または単位語）の現れ方を調べて決める。たとえば，

A　むかしむかしあるところに，おじいさんとおばあさんがありました。おじいさんは山へしばかりに，おばあさんは川へせんたくに行きました。

という文を単位語に分けると，

A’　むかし／むかし／ある／ところ／に／おじいさん／と／おばあさん／が／あり／まし／た／おじいさん／は／山／へ／しばかり／に／おばあさん／は／川／へ／せんたく／に／行き／まし／た／

のようになる。単位語に区切る方法にも幾とおりかあって，「おじいさん」

を「お」＋「じい」＋「さん」のように3単位に分けたり，「しばかり」を「しば」＋「かり」のように2単位に分けたりして，なるべく小さい成分に分ける考え方もあるが，上のA’では，普通の文法上の単位で区切った。このように，語彙調査をする場合には，作業開始に先立って，単位の区切り方に関する厳密な立場を確定しておくことが，とりわけ重要なことである。

参考までに，国立国語研究所の語彙調査で用いられてきた各種単位を紹介しておく。

M単位	（形態素 morpheme の略）	W単位	（語 word の略）
β単位	（短単位とも言われる）	α_0単位	
長単位		α単位	

この6種のうち，前の4種は「単語」に近く，後の2種は「文節」に近いものである。

M：型／紙／どおり／に／裁断／し／て／外出／着／を／作り／まし／た／。

β：型紙／どおり／に／裁断／し／て／外出／着／を／作り／まし／た。

長：型紙どおり／に／裁断し／て／外出着／を／作り／ました／。

W：型紙どおり／に／裁断して／外出着／を／作りました／。

α_0：型紙どおりに／裁断／して／外出着を／作りました。

α：型紙／どおりに／裁断して／外出着を／作りました。

M：「／心／」／を／読み／おえる／だろ／う／。

β：「心」／を／読み／おえる／だろ／う。

長：「／心／」／を／読みおえる／だろう／。

W：「／心／」／を／読みおえる／だろう／。

α_0：「心」を／読み／おえるだろう。

α：「心」を／読みおえるだろう。

さて，先のA’の単位語(27)の集まりの中には，「むかし」「に」「おじいさん」「おばあさん」「まし」「た」「は」「へ」のように2度以上出現しているものがある。そこで，単位語のうち，同一のものは何度出現しても1語と

考えて，異なるものだけをとりあげて並べると，次のように整理されることになる。

むかし　ある　ところ　に　おじいさん　と　おばあさん　が　ある（あり）ます（まし）　た　は　山　へ　しばかり　川　せんたく　行く（行き）　計18語

A・A'の単位語の中には，「あり」「まし」「行き」のような形しか見られないが，「行く」（終止形・連体形），「行か」（未然形），「行っ」（音便連用形）などのちがった形が出てきても，それらはひとしく同一の動詞「行く」の異なった形であるから，すべて，同じ「行く」という動詞であると判断される。このように，単位語を，同じ語か異なる語かという基準で整理して得られる語を＜見出し語＞と呼ぶ。Aの文章に，見出し語が何語あるかを数えると，18語ということになる。当該文章中に含まれている単位語の総数を＜延べ語数＞'the number of running words' という。Aの文章の延べ語数は27である。また，同じ文章に含まれているすべての見出し語の数を＜異なり語数＞'the number of different words' という。Aの文章の異なり語数は18である。さらに，特定された文章において，その文章の中で，各見出し語が何回使われているかを示す数（つまりその見出し語の延べ語数）を，その見出し語の＜使用度数＞'frequency' という。Aの文章での各見出し語の使用度数は次のとおりである。

むかし	2回	ます	2回
ある（連体詞）	1	た	2
ところ	1	は	2
に	3	山	1
おじいさん	2	へ	2
と	1	しばかり	1
おばあさん	2	川	1
が	1	せんたく	1
ある（動詞）	1	行く	1

18項（異なり語数18）　計27回（延べ語数27）

しかし，このような使用度数は，その文章の延べ語数の大小によってねうちが大いに変動するから，普通は<使用率>を算出して用いる。使用率は百分率（%，パーセント）でも，千分率（‰，パーミル）でも表されるが，現実には後者の方がよく用いられている。

$$語w の使用率 = \frac{語w の使用度数}{その文章の中のすべての語の使用度数} \times 1,000$$

〔参照，水谷静夫「基本語彙と語彙調査」(『国語教育のための国語講座4　語彙の理論と教育』)，樺島忠夫「基本語彙」(文化庁　国語シリーズ別冊1　『日本語と日本語教育―語彙編―』)〕

先のAの文章の中の見出し語の1つ「おじいさん」を例にとると，

$$使用率 = \frac{2}{27} \times 1,000 = 74.07\ (‰)$$

となって，使用率が74.07パーミルであることがわかる。このようにして，各見出し語の使用率が算出できれば，その使用率の大きい方から小さい方

No.	使用順位	見出し語	使用度数	使用率(‰)
1	1	に	3	111.11
2	5	むかし	2	74.07
3	5	おじいさん	2	74.07
4	5	おばあさん	2	74.07
5	5	ます	2	74.07
6	5	た	2	74.07
7	5	は	2	74.07
8	5	へ	2	74.07
9	13.5	ある(連体詞)	1	37.04
10	13.5	ところ	1	37.04
11	13.5	と	1	37.04
12	13.5	が	1	37.04
13	13.5	ある(動詞)	1	37.04
14	13.5	山	1	37.04
15	13.5	しばかり	1	37.04
16	13.5	川	1	37.04
17	13.5	せんたく	1	37.04
18	13.5	行く	1	37.04

へ，順に見出し語を配列する。この順が<使用順位>である。Aの文章の見出し語について，この作業をすると，83ページの表のようになる。

なお，以上の<見出し語><延べ語数><異なり語数><使用度数><使用率><使用順位>のほかに，<使用範囲> 'range' という語もよく用いられる。これはある見出し語がどんな言語資料・文章に使われているかを調べ，その言語資料・文章の点数を問うときに用いるもので，その見出し語のひろがりを測る尺度にされる。「ノーサイド」という語がラグビーの実況放送で何回か使われたとしても，この語は他の資料には出てこない。逆に「あと」という語は，他の資料にもよく出てくるであろう。「ノーサイド」と「あと」とが，1資料の中では同じ使用度数・使用率であったとしても，他の資料にも調査を広げると，この2語の使用の幅に大きなへだたりのあることがわかってくるのである。たとえば，5曲の歌を資料にして，「春」という語と「花」という語を調査すると，次の結果が得られる。

語＼資料	「蝶々」	「四季の雨」	「チューリップ」	「花」	「荒城の月」	使用範囲
春		○		○	○	3
花	○		○	○	○	4

上の5曲を資料にする限り，「春」が3点に，「花」が4点に使われていて，「春」という語よりも「花」という語の方が，<使用範囲>が広いことがわかる。

このような基本語彙という考え方で，大きな語彙表を完成したものとしては，ソーンダイク (E.L. Thorndike) の "Teacher's Word Book" (1921年) がある。延べ450万語，41種の資料による語彙調査のまとめとして，1万語をあげ詳述した。(本書の訳は，初版1934年，再版1950年の竹原常太訳『ソーンダイク基本英語単語』である)

以上，前節と本節にわたって基礎語彙と基本語彙の両者を対比的に説明してきたが，それぞれの概念や内容については，研究者の中にも意見を異にす

る人があり，著述においても両語彙がはっきりと識別されていない場合があることを，ここで断っておきたい。実際<基礎>といい<基本>といっても，その定義の中には漠然とした部分があり，主観性が混入したりして，両者が截然としないことがある。本書でとった説明は，もっとも一般的なものである。

次に，これまでに発表された日本語に関する語彙表・語彙調査の主なものを紹介しておこう。

表11　主な語彙表と語彙調査

①阪本一郎『日本語基本語彙　幼年の部』
②池原楢雄『国語教育のための基本語彙体系』
③国立国語研究所『語彙調査—現代新聞用語の一例—』
④同上『現代語の語彙調査　婦人雑誌の用語』
⑤同上『現代雑誌九十種の用語用字』
⑥同上『電子計算機による新聞の語彙調査』
⑦同上『現代語の語彙調査　総合雑誌の用語』
⑧同上『高校教科書の語彙調査』
⑨同上『日本語教育基本語彙第一次集計資料—6000語索引—』
⑩同上『日本語教育基本語彙六種　比較対照表』
⑪同上『日本語教育基本語彙七種　比較対照表』
⑫岡山県師範学校付属小学校『児童の語彙と教育』
⑬垣内松三『基本語彙学（上）』
⑭関東州公学堂・満鉄公学堂『基礎日本語』
⑮日本語教育振興会『成人読物についての語彙調査』
⑯国際文化振興会『日本語基本語彙』
⑰阪本一郎『教育基本語彙』
⑱甲斐睦朗『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』
⑲大西雅雄「基本語彙学」（『国語科学論考』）
⑳田中久直『国語科学習基本語彙』
㉑東京書籍『学習基本語彙』
㉒樺島忠夫・吉田弥寿夫『留学生教育のための基本語彙表』（大阪外大『日本語・日本文化』２）
㉓加藤彰彦「日本語教育における基礎学習語」（『日本語教育』２号，３・４号）
㉔J.N. Neustupny: A Classified List of Basic Japanese Vocabulary
㉕宮島達夫『古典対照語彙表』

このうち，⑭は<基礎>という語を用いているが，本書でいう<基本>的な方法によっている。また，日本語教育に直接資することが大きい⑨⑩⑪のうち，基準資料となるのは⑨であるが，その⑨には<基本>という語が冠せられている。しかし，作成過程では，語彙調査を土台にしながらも，専門家判定を加えていて，折衷方式をとっているものである。一々指摘しないが，上記25点の中には，このような折衷方式をとっているものがまじっている。この折衷方式は，言語資料に即した客観主義の調査（の，とくに規模が小さいために，延べ語数・異なり語数が少なく，個々の見出し語の使用度数・使用範囲が小さい場合）においては，臨時的個別的な語彙現象に左右されることがあるから，そのようなひずみを避け，修正する意味からも，専門家の判断評価による語彙表の補正措置が必要であって，望ましいことと言える。

語彙調査をしてみると，「おばあさん」が入っていて，「おじいさん」が入っていないとか，「東」「北」「南」が使われているのに，「西」が使われていないとか，また球団名の１つだけが異常に高い使用度数を示すとかいうことがあって，対や組になる語の片方とか一部が抜けていたり，一過性の特殊な語が混入していたりすることがある。こういう場合は，原資料の正確忠実な分析（それは一般の<総索引>にまとめられる）とは別に，研究上も教育上も，得られた語彙が全体としての体系性・整合性を保つように修正される必要がある。折衷主義という表現に伴う負のイメージを避けるならば，調整作業を加えたと言うべきであろう。大量の，語彙量の多い資料を対象にするときは，このような調整は多分必要とはしないだろうが，雑誌記事１編，単一作品，１地域の方言資料，婦人雑誌，児童読物，テレビのニュースなどは，どれもたいてい使用範囲が小さいために，語の使用率や見出し語そのものに大きな偏りが起こりやすい資料と見られる。

次に，『図説日本語』にまとめられている各種調査における上位20語の表を紹介しておく。

表12　話しことばの語彙調査——上位20語

	農民	%	商家の主婦	%	高級地方公務員	語数	手工業者	語数	商店主	語数	知識階層	語数
1	あれ	18.9	はい	38.6	はあ〔返事〕	443	ん〔返事〕	337	ん〔返事〕	101	いう(言)	2060
2	これ	14.6	これ	18.5	そう(そのように)	182	これ	86	はい〔返事〕	80	うん〔感〕	1167
3	ある	13.1	いい	17.7	ええ〔返事〕	148	いい	76	いい	58	する(為)	1122
4	それ	12.6	なに	15.8	それ	108	いく(行く)	74	ある	54	ない(無)	1038
5	そお	12.3	～ない	15.5	ああ〔返事〕	84	そう(そのように)	73	これ	54	ない(無)	1967
6	この	11.5	そお	14.6	はい〔返事〕	83	する	56	ああ〔返事〕	47	ええ〔感〕	955
7	なに(何)	11.1	ある(有)	13.6	は〔返事〕	78	もん(もの)	55	それ	38	ある(有)	887
8	なる(成)	10.2	ござる	12.5	ん〔返事〕	71	ああ〔感〕	51	はあ〔返事〕	38	これ〔指〕	867
9	いい(良)	9.8	ありがたい	10.8	する	70	それ〔代〕	47	くる(来る)	33	そう〔感〕	855
10	～くる	9.3	それ	10.8	いう(言)	61	なに	46	ネエ(無)	33	よい／いい(良)	845
11	うん	9.2	する	10.7	これ	57	はい〔返事〕	46	あれ	27	はい〔感〕	723
12	いく	8.6	ああ〔間〕	9.7	ください	55	～くる	45	なんぼ	25	あの〔感〕	696
13	いま	8.5	ええ〔返事〕	8.7	ほう(方)	55	～なる	43	ありがとう	24	こと(事)	582
14	する	8.4	くる(来)	8.4	～なる	54	ある	42	やる	23	なに／なん(何)	572
15	ああ〔感〕	8.0	～なる	7.8	いい	52	ほう(方)	39	あ〔返事〕	22	～さま／さん〔尾〕	566
16	ほお〔方〕	7.4	ああ(ゝ)〔感〕	7.2	ある	47	はあ〔返事〕	35	～ネエ	22	～さま／さん〔尾〕	555
17	おれ〔代〕	7.2	～くる	7.2	やる	42	くる(来る)	31	ほう(方)	22	で〔接〕	551
18	とる	6.9	あげる(やる)	6.9	なるほど	40	きょう(今日)	30	ええ〔返事〕	21	おー〔頭〕	508
19	やる(行う、わたす)	6.9	あと	6.5	～いる	37	ここ	29	ない(無い)	21	その〔指〕	506
20	ね(無い)	6.7	ない	6.5	その	34	かう(買う)	28	そー(そのように)	20	いち(一)	492

	農民	商家の主婦	高級地方公務員	手工業者	商店主	知識階層
対象	51歳・男・1日	49歳・女・1日	45歳・男・1日	45歳・男・1日	58歳・男・1日	7名延べ42時間
延べ	10,068	9,290	5,528	4,752	2,891	66,329
異なり	2,324	2,138	1,497	1,282	919	5,341
出典	国立国語研究所報告2(1951)		国立国語研究所報告5(1953)			65ページ参照

表13　書きことばの語彙調査——上位20語

	日本語基本語彙幼年の部*	語数	国語教育のための基本語彙体系**	語数	婦人雑誌の用語（主婦之友）	%	総合雑誌の用語	%	現代雑誌90種の用語用字	%	電子計算機による新聞の語彙調査***		郵便報知	%
1	いる	14698	いる	6213	する	22.092	する	38.466	する	29.820	一	12.862	ある(有)	17.941
2	お(御)	13194	する	5634	なる(然)	9.899	いる	20.450	いる	17.326	二	10.286	その	17.176
3	いう(言)	12316	～さん(様)	5448	こと	9.828	いう(言)	18.463	いう(言)	14.326	三	8.205	こと	11.712
4	こと	9823	いう(言)	4249	もの(物・者)	9.529	こと	14.557	いち(一)	11.444	する	7.702	もの(者・物)	11.249
5	なる(成)	8628	くる(来)	3118	ある(有)	9.229	なる(成・為)	10.591	こと(事)	11.161	万	7.452	これ	10.132
6	その	7724	お(御)	2990	よい(良)	8.276	その	8.870	なる(成・為)	9.274	五	7.231	この	7.315
7	する(代動)	7052	いく	2945	いる	7.570	もの(物・者)	8.233	れる・られる	8.037	○	7.106	なし(無)	6.842
8	ある(有)	6928	なる(成)	2889	いう(言)	7.005	ある(有・在)	7.898	二	7.405	日	7.006	する	6.057
9	くる(来)	6811	こと	2248	一	6.141	この	7.141	ある(有・在)	7.201	いる	6.798	いう(言)	5.182
10	する(自動)	6144	する(見)	2051	その	6.052	てき(的)	7.055	その	7.125	ある	5.341	どう	4.659
11	いく	5867	ある(有)	1918	二	5.717	よう(様)	6.564	もの(物・者)	6.717	円	5.086	なる(成)	4.015
12	さん(様)	5700	みんな	1911	ない(無)	5.629	それ	6.556	よう(様)	5.963	時	4.557	ところ	3.904
13	この	5435	たち(達)	1714	とき	4.747	の〔準体助詞〕	5.283	十	5.929	なる	4.518	つく(付)	3.834
14	わた(く)し	5240	ぼく	1364	この	4.535	一	5.248	三	5.721	十	4.360	いたる(至)	3.824
15	それ	4988	その	1356	これ	4.253	わたくし(私)	5.105	この	4.363	いう	3.901	える(得)	3.411
16	みる	4905	おかあさん	1201	おく(置)	4.076	日本	4.999	五	4.893	六	3.899	なす(為)	3.119
17	よう(様)	4333	よい	1190	つける(付)	4.023	これ	4.956	それ	4.860	者	3.750	また[接]	2.958
18	たち(達)	4272	ひと(人)	1175	四	3.406	ない(無)	4.904	お(御・於)	4.616	区	3.690	また[副]	2.908
19	よい(喜)	4006	なか(中)	1119	うえ(上)	3.335	くる(来)	4.370	ない(無)	4.444	月	3.674	よる(依)	2.827
20	しまう	3731	この	1109	三	3.300	される	3.923	くる	4.122	年	3.636	よし(由)	2.596

*——「です。・だ」を除く　**——助詞・助動詞を除く。20位の数字1,109より頻度の多い助詞・助動詞は21語である　***——全体の1/3の量。短単位、助詞・助動詞、固有名詞、算用数字、記号を除く。

5—5　基幹語彙

前節で<基礎語彙>や<基本語彙>にはっきりしない点のあることを述べたが，そういう不分明な情況に対して，林四郎氏は次の5つの概念を設定して，基本語彙の内容を整理しようとされた。(「語彙調査と基本語彙」《『電子計算機による国語研究　Ⅲ』国研報告39》)

(1)基礎語彙　意味の論理的分析によって求められた半人工的な語彙

(2)基本語彙　特定目的のための「○○基本語彙」

(3)基準語彙　標準的社会人としての生活に必要な語彙

(4)基調語彙　特定作品の基調を作るのに働く語彙

(5)基幹語彙　ある語集団の基幹部として存在する語彙

上のように概念規定をした上で，(1)(2)(3)はそれらの各群の語の働きによる功利性を土台にもつが，(5)はそういう功利性を除去したところに成立する概念であるとされた。林氏は，語彙調査から求められるのは，この(5)だけであって，(2)や(3)はただちに求められるものではないとされた。1968年に氏は，国立国語研究所の新聞語彙調査の資料を検討して，語の現れ方について<広さ>と<深さ>という考え方を提示された。(「新聞語彙の概略と語彙分析法試案」《『電子計算機による国語研究』国研報告31》) <広さ> とは，語の現れる層の幅（多くの種類の話題に現れるか，あるいは限られた種類の話題にだけ現れるか）のことであり，また<深さ>とは，各層の内部での頻度の高さのことである。こうして，度数10以上の5,417語について，政治・外交・経済・労働・社会・国際・文化・地方・スポーツ・婦人家庭・芸能・広告の計12層の話題の種類への各語の出現の<広さ>と<深さ>を判定して，次表にまとめられた。

所属語の一部を紹介すると，Ａ１には，「こと」「もの」「一」「二」「この」「いる」「ある」「ない」「多い」「よく」「しかし」などが所属し，Ｄ１には，「給」「歴」「完」「パマ」「左記」などが案内広告欄だけで頻用された語，「ダウ」「前期」などが経済欄だけで頻用された語としてあげられている。

また，林氏は1975年の「基本語彙はきめられるか」（新・日本語講座　1

表14　広さと深さのかけ合わせによる12区画と所属語数

		深さ			計
		1.深い	2.中位	3.浅い	
広さ	A極めて広い	A 1　162	A 2　229	A 3　198	589
	Bかなり広い	B 1　10	B 2　405	B 3　766	1,181
	C中位	C 1　213	C 2　580	C 3　1,330	2,123
	D狭い	D 1　987	D 2　409	D 3　128	1,524
計					5,417

『現代日本語の単語と文字』）という論文の中で，新聞基幹語彙を基にして，次のような600語弱の教育基本語彙を発表されている。

(一)　辞に連続する詞の一群（辞的な詞）

動詞　いる　ある　する　いう　なる　つく（について）　くる　みる　できる　おる　対する（に対して）　よる（によって）　とる（にとって）　あげる　やる　いく　くれる　しまう（てしまう）　すぎる　おく　もらう

名詞　こと　もの　ため　ところ　とき　わけ　ほど　うえ　まま　はず　ほう

指示語・疑問詞　この　これ　こう　ここ　これら　こんな　このような　その　それ　そう　そこ　そんな　あれ　あの　どう　どこ　どの　どんな　いずれ　だれ　いつ　何

接続詞　しかし　そして　だから　および　ところが　または　そこで　したがって

形容詞　ない　いい　よい

副詞　まだ　もう　すでに　なお　ほとんど　しかも　ただ　あまり　つまり　もちろん　やはり　あるいは　たとえば　もし　全く　ほぼ　むしろ　ぜひ　必ず

副詞句を作る接尾語　とおり　限り　等　くらい（ぐらい）　以上　以来

以外　以内　以降

計（93語）

㈡　いくぶん辞的性格をもつと考えられる詞（思考運用のための基本用語）

名詞1　点　場合　事実　意味　立場　方法　条件　問題　課題　話題　程度　関係　内容　材料　資料　目的　目標　ねらい　方針　原因　結果　理由　結論　状態　背景　影響　意見　意向　考え　感じ　見方　考え方　心　気持　関心　時間　時期　期間　機会　チャンス　場所　事件　事情　傾向　方向　効果　現実　現状　実際　名　対象　成果　場　規定　制度　政策　対策　働き　能力　可能性　性格　利益　次第　途中　資格　価格

名詞2　前　後　のち　先　前後　現在　将来　過去　今　同時　最初　最後　うえ　下　なか　内　中央　左　裏　幅　高さ　横　元　最近　今後

名詞3　単位　平均　代表　中心　焦点　各種　例　差　数　別　次　計　反対　同様　直接

名詞4　一般　普通　特別　高級　最高　最低　最大

名詞5　全体　全部　全員　総額　みんな　部分　後半　個人　多数

名詞6　自分　相手　彼　あなた

連体詞　約　同　各　全　いわゆる　あらゆる

動詞　思う　考える　知る　わかる　出来る　認める　決める　もつ

副詞1　最も　もっと　特に　非常に　きわめて　とても　十分　一切　かなり　やや　多少　少し　ほぼ　いろいろ　多く　明らかに　強く　当然　一応　つい　なかなか　わずか　いずれも

副詞2　初めて　はじめ　再び　今度　今回　当時　従来　このほど　早く　ますます

（計173語）

㈢　事象認知のための基本用語

動詞　行なう　与える　続く　はいる　除く　達する　ふえる　終る　含める　まとめる　示す　加える　出る　出す　受ける　見る　聞く　やめる　買う　語る　述べる　答える　行く　迎える　立つ　乗る　帰る　求める

集める　使う　落ちる　持つ　調べる　望む　わたる　かかる　つくる
生きる　死ぬ　生まれる　続ける　流れる　注目する　強調する

形容詞・形容動詞　大きい　大きな　少ない　長い　近い　高い　若い　新しい　強い　明るい　むずかしい　悪い　多い　美しい　激しい　必要な　重要な　古い　深い　安い

副詞　たくさん　いっぱい　時に

名詞1　春　夏　秋　冬

名詞2　朝　昼　夕　夜　きょう　今日　明日　あす　本日　午後　午前中　正午　前日　同日　毎日　今週　毎週　一週間　毎月　今年　来年　昨年

名詞3　昔　戦後　現代　時代　年齢

名詞4　南　西　北　東

名詞5　晴れ　曇り　風　快晴　天気　気温

名詞6　仕事　生活　通勤　訪問　司会　教育　採用　担当　事務　協力　努力　職場　業務　経営　主催　会　出席　輸出　成功　完成　参加　成績　専門　コース

名詞7　検討　審議　指定　運動　行動　措置　要求　計画　予定　期待　希望　疑い　開発　提案　注文　解釈　解説　見通し　批判　答申　交渉　質問　予想　相談　指導　連絡　発表　発言　報告　主張　呼びかけ　訴え　話し合い　会議　歓迎　話　手紙　書類　記録　攻撃　実施

名詞8　言葉　ことば　味　声　形　色　音　魅力　表情　デザイン　夢　音楽　写真　作品　姿　顔　力

名詞9　文化　景気　市場　金融　経済　社会　放送　物価　農業　産業　商業　企業　中小企業　業界　銀行　サービス　技術　政治　家庭　資金

名詞10　道　道路　駅　施設　建物　病院　旅館　倉庫　デパート　食堂　舞台　二階　本店　自宅　工場　設備　店

名詞11　町　住所　地元　海外　現地　現場　各地　国

名詞12　母親　親　父　母　夫婦　妻　娘　子供　子

名詞13　死　結婚　食事

名詞14　歴史　科学　数学　化学

名詞15　自由　責任　愛　心配　不安　不満　危険　自信　人気

名詞16　山　木　空気　花　海　自然

（計266語）

㈣　具体的題目語

名詞１　人　人間　人々　日本人　男子　男　女子　女性　婦人

名詞２　政府　国民　国会　学校　大学　会社　大蔵省　外務省　国連　国鉄

名詞３　首相　党　社長　会長　運転手　従業員　監督　先生　作家　一行

名詞４　わが国　世界　各国

名詞５　バス　自動車　車　機械　住宅　乗用車

名詞６　テレビ　ラジオ　映画　新聞　ニュース　電話

名詞７　電気　ガス　水道

名詞８　事故　台風　病気

名詞９　牛乳　酒

名詞10　販売　値上げ　下車　中止

名詞11　大会　総会　委員会　会談　記者会見　会場

名詞12　戦争　平和

（計64語）

合計 596 語

上の表には，㈣の「記者会見」のような＜新聞記事の中での話題の中心＞という性格が顕著に出ているものもあるが，大体において＜文句なしの基本語＞（林氏）と考えられるものである。（なお，氏は545語をあげたとされるが，合計596項であり，うち「うえ」が重出で，「言葉」と「ことば」が異表記で重出している。これらを減じると，594語になる。）

参考までに，596 語を部類別・品詞別に分けると，次の表のとおりになる。

表15　林四郎氏「教育基本語彙」の構成

部類	動　詞	名　詞	指示語疑問詞	接続詞	形容詞形容動詞	副　詞	連体詞	接尾辞的	計
㈠	21	11	22	8	3	19		9	93
㈡	8	126				33	6		173
㈢	44	199			20	3			266
㈣		64							64
計	73	400	22	8	23	55	6	9	596
百分比	12.25	67.11	3.69	1.34	3.86	9.23	1.01	1.51	100.00

林氏によって提示された語彙は，幼児や児童を対象にしない，高校生・大学生・社会人対象の語彙教育においては，たしかに基本語彙の一部と考えられるものである。

このように，林四郎氏は＜基幹語彙＞という考え方で，従来の＜基本語彙＞という考え方や中味に修正を加えて，新聞用語について検討して，実践的に語彙表を提示された。＜基礎語彙＞や＜基準語彙＞と同じく＜基本語彙＞も，要請によって空に描き出される仮設的存在であるとする氏の見解に従えば，＜基本語彙＞は特定の目的をもった「○○基本語彙」というふうになるのも当然で，真田信治氏のいう「人為的に選定されるべき功利性をもった語集団」ということになるであろう。（「基本語彙・基礎語彙」《岩波講座『日本語　9　語彙と意味』》）いずれにしても，林氏が＜基幹語彙＞の分析に根拠をおいて策定された語彙は，語彙教育の十分条件を示すものではないにしても，必要条件を示唆するものとなっている。

〔問48〕辞書によって，次の各語の意味を調べ，どんな場面・分野で用いられるものかを考えてみよ。

(1)　ぬき（緯）　　(2)　ちゅうげん（中元）

(3)　せんてい（剪定）　　(4)　ふち（不知）

(5) せいじょ（清女）　(6) かおう（花押）

(7) ぶんさん（分散）　(8) （お）つけこみ（お付け込み）

(9) しにたい（死に体）　(10) おくみ（衽・衽）

(11) トルソー　(12) トロール

(13) かんこ（喚呼）　(14) いぶつかん（異物感）

〔問49〕次の語の意味を，成分になっている語や文字に注意しつつ考えてみよ。

(1) はなめ（花芽）　(2) けんか（堅果）

(3) けんたいがく（嫌怠学）　(4) いちけい（1K）

(5) サーモンピンク　(6) かどう（渦動）

(7) ゆきたたき（雪叩き）　(8) ねこあし（猫足）

(9) ななとこがり（七所借り）　(10) なりもの（鳴り物）

〔問50〕「基礎日本語」1,099語と，林氏の「新聞基幹語彙に基づく教育基本語彙」596語とを比べて，A 両者に共通するもの，B 前者にだけあるもの，C 後者にだけあるもの　を調べてみよ。そして，A，B，Cのそれぞれに属する語には，どんな共通性があるかを考えてみよ。

〔問51〕学校文法の品詞分類の方法によって，次の文の語彙調査を行い，本文中の表にならって，延べ語数・異なり語数・使用率などを表にして示せ。

(1) サイタ　サイタ　チューリップノ
　　ハナガ，ナランダ　ナランダ
　　アカシロ　キイロ，
　ドノハナミテモ　キレイダナ。

(2) デタデタツキガ，
　　マルイマルイマンマルイ
　　ボンノヨウナツキガ。

(3) ほたるのやどは川ばたやなぎ，
　やなぎおぼろに夕やみ寄せて，

川の目高が夢見るころは，

ほ，ほ，ほたるが灯(ひ)をともす。

(4) 野外で眼に映ずる土地や地物の特性を景観という。単なる景色または風景との違いは，自然あるいは人文の地域的特性に着目し，客観的考察を進める点にある。内容から，自然景観と人文景観とに大別され、隣接する他の景観と区別して、景観地域という概念も作られている。

(5) 生物学では2つ以上のまったく別の系統の組織が合して，1つの生物体を形づくるものをキメラとよび，動植物界ではしばしばそれが見られる。ショウジョウバエのからだの半分が雄，他の半分は雌の組織から成り立っている雌雄兼有型などもその特殊な例である。ＡＢＯ血液型についてキメラの人もみつかっている。植物にもつぎ木の結果，組織の入りまじっているキメラがある。

〔問52〕問51の作業の結果できた表をもとにして，どんな語の使用範囲が広いかを答えよ。また，共通して使用率の高い語には，どんな性質があるかを答えよ。

〔問53〕先に5―4で紹介した『図説日本語』掲載の上位20語表に共通して登場している語には，どんな特徴があるか，意味の抽象度，拍数，品詞別などについて調べてみよ。

〔問54〕「さしみ」「すきやき」「まつり」「見合い」「げた」のような単語は，普通，基本語彙の中には数えられることがまれであるが，日本語教育では教えることが多い。それはどういう理由によるのだろうか。

〔問55〕日本に滞在している外国人として，特別に重要な単語にはどんなものがあるか，5語以上あげよ。

〔問56〕教えるために必要な教室用語，教授用語の主なものを，名詞，動詞，形容詞，副詞などに分けてあげてみよ。

〔問57〕次の語のうち，特殊だと考えられるものに✓の印を付せ。

山　　ズームイン　　パリティー計算　　砂　　にお（鳰）

スナック　　すなご　　小戻り　　ボート　　硬変　　シューバ

ぐっすり　浩々（こうこう）　くづめ（苦爪）　すえ
正月　啓蟄（けいちつ）

5—6　理解語彙と使用語彙

特定の個人やある発達段階について，理解語彙とか使用語彙（または表現語彙）とかが問題にされることがある。

理解語彙というのは，ある個人（またはある学年の児童など）が聞いたり読んだりするときに理解することができる見出し語の集合であり，使用語彙（表現語彙）というのは，ある個人（ある学年の児童など）が話したり書いたりするときに用いることができる語の集合である。

だれにとっても，使うことができる語は当然理解できているはずの語であるから，一般に使用語彙は理解語彙の一部分であって，使用語彙の量は理解語彙の量よりも小さい。もちろん理解語彙即使用語彙ではない。男性だけが使う語（たとえば，「きみ」「ぼく」など）やののしりことばなどは，女性が理解できる語でありながら，女性によって使われることのないものである。また，平素決して使うことのない語，それまでに接したことのない語であっても，聞いたり読んだりしたときに理解できる語は，どんな個人にとってもかなり多いはずである。しかし，理解語彙と言い，使用語彙と言っても，実際にはどうしてそれらの量を測定するのか。＜理解することができるかどうか＞をどういう方法で検査するのか，また＜使うことができるかどうか＞をどうして調べるのか，実は大きな問題なのである。ただ，＜使った＞語を調べるというなら，確実に測定する方法はある。したがって，先に述べてきた理解語彙と使用語彙の大小や包摂の関係などについては，理論的な面からの言及ととるべきであろう。

しかし，現実には，次のように何種類かの理解語彙の調査がなされている。

(1)　東京　沢柳氏調査（大正７年）
(2)　千葉　鳴浜校調査（大正11年）

(3) 岡山　師範付属小調査（昭和９年）

(4) 国立国語研究所調査（昭和25年）

(5) 牛島義友・森脇要氏調査（昭和17年）

(6) 久保良英氏調査（昭和18年）

(7) 大久保愛氏調査（昭和33～39年）

(8) 阪本一郎氏調査（昭和13年）　　（　）内は調査年

(1)～(3)は小学校入学時点の児童の理解語彙，(4)は義務教育終了時点の高校生の理解語彙，(5)～(7)は幼児の理解語彙，(8)は６歳から20歳までの理解語彙を調べて報告している。

(1)(2)(3)をまとめて対照すると，表16のとおりになる。

表16　小学校１年生の語彙量

語数等／調査者	年　齢	平均語数	最多語数	最少語数	最多最少の差	最大頻数
沢　柳　氏	6年5か月	4,089	5,162	3,500	1,662	4,800
鳴　浜　校	6年9か月	5,019	6,072	3,373	2,699	4,800
岡山付属	6年8か月	5,230	6,906	3,338	3,568	5,100

(4)は15人の高校１年生を対象にした調査で，最高36,330語，最低23,381語，平均30,664語と報告している。

(8)によれば，次表のように理解語彙の発達のようすが推定されている。

表17　理解語彙の発達

年　齢	理解語数	年　齢	理解語数	年　齢	理解語数
6	5,661	11	19,326	16	43,919
7	6,700	12	25,668	17	46,440
8	7,971	13	31.240	18	47,829
9	10,276	14	36,229	19	48,267
10	13,873	15	40,462	20	48,336

阪本一郎『読みと作文の心理』(1955年)

以上の調査を比べてみると，まず，理解語彙は個人差の大きいことが指摘できる。6歳児において最高が最低の2倍，また15歳高校1年生で約1.5倍という，大きな差が見られる。阪本氏の数値は少々多いめに出ているように見うけられるので，一般の成人の理解語彙はほぼ40,000語と考えればよいだろう。

前々節で紹介した阪本一郎『教育基本語彙』は，小中学校で「子どもに学習させることが望ましい単語」を専門家判定によって選定して，低学年語彙5,000，高学年語彙7,500，中学校語彙10,000，合計22,500語をあげているが，そこに示されている各段階での<教育基本語彙>は，理解語彙としてはかなり少ない見積もりであり，使用語彙としては高年部において多すぎると考えられる。

以上が国語教育の現状で，一口に教育基本語彙とか理解語彙とか言っても，語数自体についても選定されるべき個々の語についても，十分定説を見る段階ではない。一方，日本語教育の方では，国立国語研究所日本語教育センターの努力で，先に紹介した『日本語教育基本語彙第一次集計資料—6,000語索引—』が完成していて，現代日本語の新しい語彙表として活用できるようになってきた。ただし，これは，理解語彙・使用語彙という観点に立って編成されたものではない。教育・学習上の基本語6,880語と，その中の最重要語2,249語を示し，初中上の段階を問わず基本と考えられる語のリストとしたものである。

使用語彙を，個々人が潜在能力としてもっている使用できる語の集合ではなく，使用する語の集合というように解釈すると，年齢・知識・職業・趣味・生活などによって，量の面でも分布の面でも大きな差が出てくるはずである。量的に見ただけでも，職業別では，第1次・第2次産業の業種，サービス・流通部門では，語彙量が大きい。しかし，無職の人でも，老人ホームの人たちや近所に親しい人がいる主婦などは，一人職場の職業人よりは多い。教員・議員・弁護士・宣伝員・交換手・マスコミ関係者・落語家・漫才師たちは，職業がら語彙量が多い人たちである。分布の面では，まさに千差万別

の観を呈する。ファッション関係の人は，新語・流行語・外来語を多く使い，意味の面でも美的感覚にまつわる語を多用している。漁師は魚名・気象用語・海図海流に関する語を多用している。和紙・陶器・人形などの製作に従事している人，住宅の建設と販売に関する仕事をしている人など，それぞれが専門分野の語を多く使い，また細かく規定された意味をもっている専門用語を駆使している。こういう語彙の質は，古典文学作品の場合は，主に公刊された索引を利用することによって，かなり広範に調査ができるようになっており，現代の自然科学諸分野の場合も，『数学編』『天文学編』など20数部門の「学術用語集」が刊行されていて，具体的に吟味対照ができる状態になっている。しかし，個々人の使用語彙の調査は，まだ極端に少ない。理解語彙と比べると，使用語彙における個人差は，質的にも量的にもたいへん大きいことはたしかである。

5—7　語数とカバー率

日本語は<単語の数が多い>とか<単語をたくさん覚えなければならない言語である>とか言われることがある。しかし，これは<表記法が複雑である>とか<待遇表現がむずかしい>とか言うのと同じ確度で明言できることではないだろう。外国の言語と日本語とを同じ基準で分析する方法は容易に見つけられるものではない。とりわけ，語の多少について，そのような角度から論じることはむずかしい。しかし，外国語教育や日本語教育にたずさわっている人が，上記のような漠然とした印象をもつことが少なくないのも事実である。

たとえば，英語の‘person’に対して，日本語では，「かた（方）」，「ひと（人）」，「にんげん（人間）」，「もの（者）」，「やつ（奴）」，「人物」「法人」等々の訳語が考えられるし，中国語‘ren’（人）に対しても，「人間」「人物」「おとな」などが考えられる。もちろん，日本語の単語についても，英語や中国語で複数の訳語が考えられる場合も多いから，一概には言えないが，一般に外国語の単語に対する日本語の訳語の方が多いことは，経験的にも認め

られるところである。とくに「やりもらい」の表現などは，待遇語法と深く関わっているために，日本語では「やる」「あげる」「さしあげる」「もらう」「いただく」「くれる」「くださる」の7語を使い分けるのであるが，英語では 'give' と 'receive' で，ときには 'receive' の代わりに 'be given' を使うことによって，中国語でも 'gěi'（給）と 'shòu'（受）によって，語としては1～2語ですますことが多く，日本語の方がどうしても語数が多くなる。かつ 'be given' 式の代替表現は不自然で，求めても用をなさないのが常である。本節冒頭の感想は，こういう事情から生まれるものであろう。日本語の方が単純だと考えられる日常レベルの表現は，'Mr./Mrs./Miss Yamada' に対する「山田さん」など，ごくわずかであろう。

このような経験的な感想・印象と関係がありそうなデータがあるので，ここに紹介する。

表18 語数とカバー率

言語 / 語数(上位)	英語	フランス語	スペイン語	中国語	日本語
1～ 150				48.0	
1～ 300				59.7	45.3
1～ 500				67.1	51.5
1～1,000	80.5	83.5	81.0	76.5	60.5
1～1,500				79.0	
1～2,000	86.6	89.4	86.6		70.0
1～3,000	90.0	92.8	89.5		75.3
1～3,500					77.3
1～4,000	92.2	94.7	91.3		
1～5,000	93.5	96.0	92.5		81.7
計	93.5%	96.0%	92.5%		81.7%

英語・フランス語・スペイン語の3言語についてはモスクワ国立言語研究所の調査（南博『記憶術』に紹介されたもの）によったが，冠詞・前置詞・代名詞などの機能語は除外していると考えられる。中国語については，柴垣芳太郎氏らの調査によった（『中国語学事典』のⅧ語彙篇の〔1〕中国常用語彙）。これは「的」「了」などの助詞，「会」「要」などの助動詞を算入している。日本語については，国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字(1)—総記および語彙表—』の表1「90誌全体でその順位までの見出し語が延べ語数のどのくらいの割合を占めるか」によった。

英・仏・西の3言語に関する調査は，分析対象の3言語がそろってインド・ヨーロッパ語族内の言語であるため，姉妹語・従姉妹語の関係にあって，大局的に見れば相似た構造であること，また同一研究所の調査であるため分析手続きに一貫性があることによって，結果の数値は，十分に比較対照の意味をもつと考えられる。しかし，中国語と日本語については，構造上の相違の大きさに加えて，助詞・助動詞のような機能語を算入したか否かという点でも大きな差があり，表の左側3欄の言語と右側2欄の言語とを直接比べることはさし控えるべきであろう。上の表から，

(1)中国語の各欄の数値は，助詞・助動詞を除外すると，それぞれかなり小さくなるはずであること。

(2)英・仏・西の3言語の中では，フランス語がもっとも効率が高く，同一語数が延べ語数に占めるカバー率が一番高い言語と考えられること。

(3)英語とスペイン語とでは，上位2,000語未満では，スペイン語の方がカバー率が高いが，2,000語を超えると，英語の方がややカバー率が高くなること。

などが読みとれる。

なお，調査にいろいろ差があることを承知しつつ推論をすれば，英仏西3言語と比べると，日本語はやはり効率が低い言語ということになるだろう。日本語では，10,000語で91.7％のカバー率になることが報告されているが，これは，英仏西3言語の上位5,000語のカバー率よりも低いのである。この

ことは，日本語が単語をたくさん覚えなければならない言語であるとの一般の感想と無関係ではないだろう。

なお，フランス語がもっとも効率がよいということは，上の表から機械的に導き出される事項であるが，この事実からただちにフランス語の語彙の学習が楽であるなどと結論づけるのは早計であろう。上位2,000語を覚えれば90％ちかくをまかなうことができるというのはたしかな事実ではあっても，その2,000語は多分に抽象度の高い語群であって，多くが多義語である可能性が高い。したがって，少なくとも外国人（とくに日本人）にとっては，語形の学習の負担は小さいにしても，語義の学習の負担は決して小さくはないことを考える必要がある。いずれにしても，フランス語のこのようなカバー率の高さとよく指摘される抽象表現志向とが深い関係にあることを見落としてはならない。日本語は，抽象表現にあずかる語が少ない上に，個別的具体的表現を好む言語で，待遇表現・音象徴語などに見られるような＜即場面性＞＜即個別性＞＜相対的表現＞の強さが，異なり語を多くしていることを考え合わせなければならない。

以上をまとめると，日本語では語彙面で90％以上の理解を可能にするためには，上位約10,000語を覚えなければならず，基本語彙というときにも，最低5,000～7,000語が必要になるということである。

〔問58〕英語の‘thing’に対する日本語の訳語にはどんなものが考えられるか。

〔問59〕日本語の「心」と英語の‘heart’の意味上の共通点と相違点をあげよ。

〔問60〕中国語の‘huài’（坏・壊）という動詞には，「こわれる，こわす，いたむ」「くさる」「だめになる，だめにする」「からだをだめにする」などの意味がある。中国語の‘huài’と日本語の「こわす」とでは，どちらが抽象的な意味の語と言えるか。

〔問61〕3歳ぐらいの幼児の使用語彙にはどんなものが多いか，成人の生活

や環境とのちがいを考えて推測してみよ。

〔問62〕各自が理解できる語でありながら，使用すること（または使用したこと）のない語にはどんなものがあるか。また，それらを使用しない理由について考えてみよ。

〔問63〕性や世代のちがいのために使用しにくい語にはどんなものがあるか。

〔問64〕日本語の「アニ」(兄)や中国語の 'gēge'(哥哥)と，英語の 'brother' とでは，どちらがよく使われる語と考えられるか，理由を付して答えよ。

〔問65〕日本語の「ニオイ」(匂い・臭い)と「カオリ」(香り)とでは，どちらがよく使われる語だろうか，理由を付して答えよ。

〔問66〕日本語の「する」(為)，「くる」(来)，英語の 'do', 'come', 'make' の使用率は，これらが不規則動詞であることとどんな関係があると考えられるか。

〔問67〕英語・ドイツ語・フランス語などの不規則動詞には，意味上の共通点があるかないか調べてみよ。

6　語の出自（語種）

6－1　日本語の語彙の中の非固有成分

日本語の単語の中には，世界のさまざまな国・地域の言語から借用したものが入っている。（共通語が国内の諸方言から単語をとり入れることを＜内部借用＞というのに対して，外国語から単語をとり入れることを＜外部借用＞と呼ぶことがあるが，普通単に＜借用＞というときは＜外部借用＞のことである。）世界の言語の中では，英語の語彙に外来要素が多いことが早くから注目されている。イギリスの食肉動物は，生きているあいだはイギリス種だが，死んでしまうとフランス種になるなどというジョークが，端的に英語における外来要素の多さを物語っている。つまり，‘ox’（牛）が‘beef’（牛肉）に，‘pig’（豚）が‘pork’（豚肉）に，‘sheep’（羊）が‘mutton’（羊肉）に，‘calf’（仔牛）が‘veal’（仔牛肉）に変ずるので，ゲルマン系の単語からフランス語に転ずることを指しているわけである。（英語で「肉」を意味する‘beef’以下は，フランス語では，単にその動物を指すだけである。）英語にとっての固有語‘proper word’（英語学では「本来語」‘native word’と呼ぶことが多い）が借用語（借入語とも）‘borrowed word’（または‘loan word’）にとって替わられる代表的な例である。英語は中期英語‘Middle English’以来，語彙面における＜慢性的消化不良症状＞を呈したと言われるほど，ラテン語やフランス語をはじめとして，世界各地の言語から活発に借用をつづけてきた。その活発な借用のおかげで，今日世界でも有数の語彙のゆたかな言語に成熟したのである。このような英語語彙における借用語率の高さについて，研究社『新英和大辞典　第5版』は，2点の調査資料を対比しながら紹介している。

表19に見られるとおり，本来語は19％，14％と少なく，調査語数を増やすと，さらに比率は低下するとおもわれる。英語はゲルマン語派に属する言語であるのに，フランス語系などの単語の比率の方が高い。ここに英語の語彙

表19　現代英語語彙の語源（百分率）

語源＼調査語数	2　万　語*	14　万　語**
本　来　語	19 %	14 %
ラ　テ　ン　語	15	36
フ　ラ　ン　ス　語	36	21
ギ　リ　シ　ャ　語	13	4.5
北　欧　語	7	2
イタリア語・スペイン語	1	3
そ　の　他	9	19.5

*　使用頻度に基いて選んだ語，約2万語。北欧語の項にオランダ語・ドイツ語を含む。(R.G. Kent の Language and Philology による)

**　使用頻度に基いて選んだ語，約14万語。(Paul Roberts の Understanding English による)

の1つの特色がある。

英語とは反対に，フランス語や中国語は外部借用の少ない言語とされる。もともとフランス語の‘desporter’(楽しませる）という語の語頭音節を消失して出来た‘sport’という英単語が，フランス語の中に逆輸入されフランス人のあいだで用いられるようになって，アカデミー辞典に採録することの可否が論じられたが容易に認められず，約百年を経過してやっと採録を見たという有名な話がある。ミッテラン（H. Mitterand）は，

「国語純正論者に安心してもらうために，共通言語には外国語由来の要素の割合がきわめて低いことを直ちに確認しておこう。『基礎フランス語』の著者たちによって公表されたリストをもう一度取り上げると，もっとも頻度の高いものとしてあげられた1,000語のうち，外国語の形は speaker 1つしか見られない。（中略）グーゲネーム氏の『基本語辞典』のAから appareil まで（143語）には，ただの1語の≪外来語≫もみられない。（中略）言いかえると，広く技術上の語を含み，言語的愛国主義臭のない通用語彙のせいぜい3％から4％の割合ということになる。」

と言っている。(LES MOTS FRANÇAIS《QUE SAIS-JE?》) 最近ではこのような事情にも少し変化が見られるようであるが，フランス語の純粋さを守るために外来語の使用を極力おさえるという基本的態度には，他国には見られない強いものがある。中国でも伝統的に外部借用には抑制がはたらいてきたので，英語に見られるような直輸入形式のものは少ない。デンツェル・カー(Denzel Carr) はその論文 A Characterization of the Chinese National Language (1931) において，日本人はヨーロッパの語詞をかなり容易にとり入れるが，中国人にはそれができず，将来も無理であろうという趣旨のことを述べている。中国語にかような抑制がはたらく言語レベルの理由は，中国語の音韻組織と漢字にある。通常，外国語彙の借用（'借詞'）としては，

(1)音訳式　　馬达 (motor)，咖啡 (coffee)，坦克 (tank)

(2)半音訳半意訳式　马克思主義 (Marxism)，华尔街 (Wall Street)

(3)音訳加義式　啤酒 (beer)，巴蕾舞 (ballet)

(4)音義兼訳式　引得 (index)，幽默 (humour)

(5)熟語訳式　　馬力 (horse power)，笔名 (pen name)

(6)日本漢語　　積極，景气，手续

の6方式があげられる。（参考　徐青『词汇漫谈』浙江人民出版社）うち，最後の(6)を除いては，漢字の音または意味，あるいは双方にわたる選択に多少とも慎重な判断を要し，それだけ時間がかかるので，即時の機械的で無修正の借入は無理なのである。

さて日本語の固有要素である和語と非和語とを7点の資料にわたって比べると，①～④では和語の方が多いが，⑤～⑦では非和語の方が多くなっている。とくに明治期の②③と近年の⑤～⑦とでは，和語対非和語の比率が逆転していることがわかる。(108ページ　表20)

これは，混種語（後述）を除く異なり語総数の中で，和語と非和語（漢語と外来語，ともに後述）の比率を見たもので，資料の性質のちがいも大きく，除外した混種語の中の成分についての検討も保留しているため，早急な解釈を施すべきものではないであろう。しかし，⑤⑥⑦の3種の調査は，ほ

表20　和語と非和語の比率の推移（異なり語数）

資料(発行または調査の年)＼和語・非和語	和　　語	非　和　語
①　ヘボン・和英語林集成　(1867)	74.64%	25.36%
②　言　海　(1891)	60.75	39.25
③　井上十吉・新訳和英辞典 (1909)	60.45	39.55
④　研究社・新和英大辞典　(1954)	59.30	40.70
⑤　例解国語辞典　(1956)	39.06	60.94
⑥　現代雑誌90種　(1956)	39.06	60.94
⑦　新聞３紙　(1966)	40.77	59.23

ぼ４：６という近似した率を示していることに驚かされるし，それにも増して，現代日本語の語彙のうち単一種の要素では，非固有成分が固有成分の1.5倍にもなっていることに驚かされるのである。なお，延べ語数について調べてみると，次表のようになり，資料の質と年代にちがいがあるが，雑誌の方は和語をやや多く使うが，新聞の方は延べ語数でも和語の使い方が少ないことが判る。

表21　和語・非和語の比率（延べ語数）

資　料＼和語・非和語	和　　語	非　和　語
現代雑誌 90 種	54.93%	45.07%
新　聞　3　紙	44.49	55.51

このように，固有成分よりも非固有成分の方が多く使用されているという現実は，われわれに，外来要素の研究と教育が日本語の語彙の面での１つの重要な分野であることを教えている。

外来要素を多く受け入れるか否かということについては，いちおう言語レベルの理由と非言語レベルの理由とが考えられる。言語レベルの理由として，文字・音韻組織・造語法などが，非言語レベルの理由として，民族の歴史的体験・精神的態度などがあげられる。

(1) 言語レベル

		外来要素多	外来要素少
文字	表音性	英語・日本語	フランス語
	半表音性		中国語
音韻組織	単純	日本語	中国語
	複雑	英語	フランス語
	声調		中国語
造語力	強	英語	中国語
	弱	日本語	フランス語

表音文字（とくに音素文字）である方が借用が容易であり正確である。中国語のような声調言語では，漢字個々に固有の声調があるため，これが捨象しにくく，非声調言語の受け入れにあたって障害を生むことが考えられる。音素の種類が多く音節構造が複雑である方が，異質の語彙成分が受け入れやすい。また造語が簡単で自由な言語は，自身で豊かな語彙の形成が可能であるため，外部借用に積極的になる内的理由をもたない。

(2) 非言語レベル

言語レベルでの情況が近似していても，現実には言語ごとに外来要素の借用が活発であったり活発でなかったりで，差が見られることが多い。その場合には，その言語を使っている民族の精神的態度（民族主義・愛国主義・排外思想・拝外思想・進取性・保守性など），換言すれば，教育や伝統によってつちかわれる言語観によることが大きく，またその民族の過去における体験（近隣に先進文明が栄えた，外国の侵略・占領・支配を受けたなど）の有無・種類・規模にも大きく影響されているであろう。

日本語の場合は，まず，古代日本語が十分語彙を発達せしめる前に，隣国中国の隆盛をきわめた文化に学びこれを吸収するために，文字を有しなかったわが祖先が，漢字漢語を直接学び，用い始めたところに，固有要素以上に外来要素を尊ぶ風が生まれ，その風が継承されるもとが出来た。<真名（まな）>と

いう漢字の呼称にその態度をよみとるべきである。こうして漢語が日本語の語彙の中で重要な座を占め，とりわけ書きことばの中で仲間を増やしつづけた。のち，ポルトガル・オランダとの交流が始まり，ヨーロッパ語の語彙が流入しはじめるが，明治の開花期には，ヨーロッパ語をそのまま用いるよりは，漢語に訳してひろげるという方法が主なものとなったために，明治期に漢語の著しい増加を見ることになった。昭和の戦争時代は，外来語の代表格である英語が敵性語と言われて，スポーツ界にまで<外来語狩り>が及んだが，戦後は事情が一変して，1945年以前にはあまり外来語が見られなかった意味分野・品詞にまで，英語系を筆頭とする外来語が増えた。現在では，外来要素は，異なり語数・延べ語数の両面でさらに増えていることが推測される。

ここに概観したように，現代日本語の語彙には非固有成分が増えつつあり，少なくとも異なり語数では固有成分を凌いでいるわけで，単語の出自・来源を調べることは，単に語の表記ルールと密接に結びついているという表面的直接的事項としてだけではなく，語彙の研究と教育の諸分野に実質的に関わる重要な事項と考えなければならない。「語種」というのは語の種類とか種別というようにも解釈できるが，現在では日本語の単語の出自別分類を指す術語として定着している。先に触れてきた「固有成分」を「和語」（または「固有日本語」，「やまとことば」）といい，非固有成分のうち，通常漢字で書かれ，かつ音よみをされる語を「漢語」（または「字音語」）といい，古い中国以外から借入した語を「外来語」（または「洋語」）という。なお，以上の3種のうちの2種以上の語が結合して出来ている語もあるので，それらを「混種語」と呼んでいる。つまり，次のように分類されることになる。

（種の単複）	（出自）	（契機）	（語種）	（表記）	（例）
日本の単語 単種	固有成分		和語	平仮名	はな
				片仮名	ワンワン
				漢字	山，高い
	非固有成分（外来成分）	漢字音成分	漢語	漢字	工業，大根，愛，当然
		非漢字音成分	外来語	片仮名（ローマ字）	ミルク，クラス，SL
複種			混種語		あんパン，表玄関，極細ボールペン

ただし，上記の「漢語」「外来語」の定義については，次節以下において触れるように注釈をつける必要がある。

ここで，語種別分類と語数との関係を示す図と表を紹介しておこう。

図3　語種の異なり語数と延べ語数

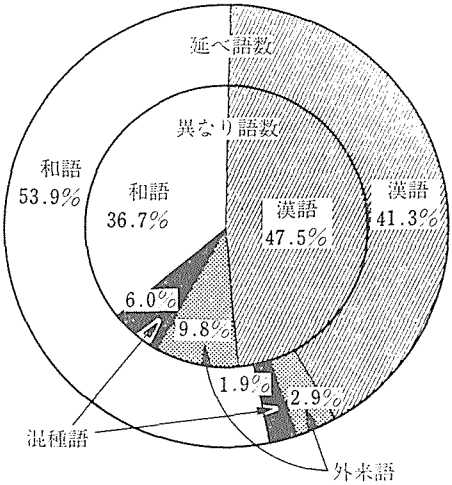


表22　語種別の異なり語数・延べ語数（雑誌90種）

語　種	異なり語数		延べ語数	
	語数	%	語数	%
和　語	11,134	36.7	221,875	53.9
漢　語	14,407	47.5	170,033	41.3
外来語	2,964	9.8	12,034	2.9
混種語	1,826	6.0	8,030	1.9
計	30,331	100	411,972	100

表23　語種別に見た言海・例解国語辞典の見出し語

辞書 / 語種	言海(明22年)		例解国語辞典(昭31年)	
	語数	%	語数	%
和語	21,817	55.8	14,798	36.6
漢語	13,546	34.7	21,656	53.6
混種語(和漢熟語)	2,724	7.0	2,307	5.7
外来語	551	1.4	1,428	3.5
その他	465	1.1	204	0.5
合計	39,103	100.0	40,393	100.0

宮島達夫「近代日本語における単語の問題」(「言語生活」第79号　昭和33年4月)

先に5—4で紹介した<上位20語表>からもうかがえるように，和語は当然のことながら日本語の語彙の根幹をなしていて，漢語・外来語に比して，使用範囲も広く使用度数も高い。しかし，上の図3や表22・23に見られるように，本来，日本語の語彙の根幹であるはずの和語が，異なり語数では漢語に首位をゆずって第2位になっており，上述したように非固有成分2語種をまとめると，いっそう和語の比率は小さくなってしまう。表20，表23の物語るように，明治期に漢語が増え，基本語以外では大正期以後もずっと増えつづけてきたわけである。こうして，日本語の語彙を量的に見た場合には，漢語は実に大きな勢力になり，和語は質を考えない限り第2位に落ち込んでいて，日本語の語彙の量的・語種的構造の一大特徴となっている。そして，漢語・外来語の増加と関わって，和語のさまざまなはたらきやあり方に反省の目が及ぶのである。

6—2　和語

和語は日本語の語彙の基層を成す重要な語種である。日本人にとっては，古くから受け継いできた基本的な語彙であって，生まれ落ちてから絶えず使いつづける生活・生存のための語彙の大半が和語である。教養・訓練の深浅

に関わりなく，すべての日本人が耳で聞いてすぐわかり，肌で意味の感じとれる語種である。日本語を母語とするすべての人の汗・垢・感情がもっとも色濃く付いているのも和語である。和語は，日常もっとも広範囲にわたって回数多く使われる語種である。現代の語彙調査では，異なり語数で漢語に首位をゆずってはいるが，一般人の話しことばの中では，和語の比重は決して軽くはないであろう。以下に，和語の性質・はたらきについて項目に分けて考えてみる。

(1) 語形

(i)拍数　和語の基本的な語形は1拍または2拍であり，3拍以上のものも要素としては，1＋2，2＋1，1＋1＋1；2＋2，1＋1＋2，1＋2＋1……などの拍構成によって成り立っているのが普通である。古代日本語の音韻組織と拍の構造・母音重複忌避等々の条件が，紆余曲折を経ながらも現代日本語の標準的な語形に強い影響を与えている。単音節語の多くは，多音節化するか死語のようになるかして，2拍語形への集中率はたいへん高くなった。現代の新聞用語の拍数を調べた中野洋氏の調査「現代日本語の音素連続の実態」（国立国語研究所報告49『電子計算機による国語研究V』所

表24　新聞用語の語種と拍数の関係（異なり語数）

拍数＼語種	漢語	外来語	和語
1拍	393(2.3)	52(1.3)	171(1.4)
2拍	1,895(11.3)	223(5.8)	2,260(18.0)
3拍	5,300(31.7)	831(21.7)	3,974(31.6)
4拍	9,040(54.0)	983(25.7)	4,145(33.0)
5拍	59(0.4)	742(19.4)	1,614(12.8)
6拍	35(0.2)	577(15.1)	352(2.8)
7拍	13(0.1)	421(11.0)	47(0.4)
計	16,735(100)	3,829(100)	12,563(100)

（　）のなかは%

表25　新聞用語の語種と拍数の関係（延べ語数）

拍数＼語種	漢　語	外来語	和　語
1　拍	22,870(9.6)	569(3.0)	12,899(13.2)
2　拍	69,283(29.0)	2,676(13.9)	39,396(40.4)
3　拍	61,077(25.5)	5,675(29.5)	26,495(27.2)
4　拍	85,423(35.7)	5,448(28.3)	14,591(15.0)
5　拍	158(0.1)	2,664(13.9)	3,462(3.6)
6　拍	266(0.1)	1,426(7.4)	510(0.5)
7　拍	14(0)	772(4.0)	49(0.1)
計	239,091(100)	19,230(100)	97,402(100)

（　）のなかは%

収。ただし，表中の%は松井利彦氏の計算による）を借りると，異なり語数（表24）では，和語は3拍・4拍を中心にして，2拍・5拍にも割に厚く分布しているのに対して，漢語は4拍を筆頭にして3拍と2拍に急減しながら分布している。外来語は4拍を筆頭にして，3拍・5拍・6拍・7拍というふうに長大語が割に多い。語種の如何を問わず異なり語としては共通して4拍語がいちばん多い。ところで延べ語数（表25）に目を転ずると，和語は2拍が圧倒的に多く，3拍・4拍・1拍がこれに次ぐ。5拍以上は無視できるほど少ない。漢語の4拍集中傾向，外来語の3拍・4拍への分散化とはかなり事情を異にする。これらのことから，4拍が日本語の単語の多数派であり，もっとも安定した形であること，また和語は，異なり語数としては18%にすぎない2拍語が，延べでは総数の40%を占めるほどに頻繁に用いられていることなどがあらためてわかる。しかし，この2拍集中率の高い和語でもって，現代社会で要請される諸分野の一切の概念を形成していこうとすると，いきおい，4拍（2＋2），6拍（2＋2＋2），8拍（2＋2＋2＋2）のような多単位の長大語が求められることになる。ここに，和語のみによる造語が拍数をむやみにたくさん要することになり，効率上好まれないという

一面の理由がある。

(ii)転音・連濁など　和語の語形に関して注意すべきことの一つに，転音とか連濁とかの変音現象がある。<転音>というのは合成形式の前項末母音が交替することで，もっとも多く見られるのは，/e/→/a/の転音である。例．アメ→アマヤドリ，サケ→サカヤ，フネ→フナアシ，アメ→アマクダリ，カゼ→カザカミなど。（しかし，池・亀・ヒゲ・桶・苔など転音の起こらない語も多い。）他にも，/i/→/o/のような転音がある。例．キ→コダチ，ヒ→ホムラなど。（血には転音は起こらない。）古代日本語においては，転音がもっと活発に行われ，そのタイプももっと多かった。（ちなみに，単独形式の「アメ」「キ」などの語形を露出形，合成形式の前項末にしか現れない語形を被覆形と呼んでいることを紹介しておく。）次に<連濁>は，合成形式において後項成分の語頭音が清音から濁音に転ずることをいう。例．川＋クチ→川グチ，山＋サクラ→山ザクラ，子＋タヌキ→子ダヌキ，オシロイ＋ハナ→オシロイバナ　連濁について次のような調査が行われ

表26　『日葡辞書』における連濁

	連濁可能結合例	連　濁　例	連　濁　率(%)
和　語＋和　語	4,267	1,873	43.90
漢　語＋和　語	185	144	77.84
和　語＋漢　語	135	62	45.93

（注）漢語＋漢語の結合は例数が多いために計量されなかった。
（戸田綾子「中世和語における連濁の規則性について―『日葡辞書』の場合―」同志社大学文学部昭和57年度卒業論文）

ている。表26に見られるとおり，後項語頭が本来清音であって連濁可能な条件下にありながら，連濁を起こしていない例がある。〔漢語＋和語〕の場合は，前項末に長音・撥音がくることが多いため，78%という高い連濁率になっているが，後項が和語である2つの合成形式の連濁率は45.31%であって，全連濁例の連濁率45.32%と差はない。結局，一般的には和語が後項に立つ合成語の約45%において連濁が見られるというのが中世和語の実態であろ

う。また，〔和語＋漢語〕の結合において，45.93％もの連濁率があるのは，漢語の性格からして，少し多いように見受けられるが，これは結合例も連濁例も少なく，かつこれらが混種語であるところから，Tebiŏxi テビャゥシ手拍子，Samuraidaixŏ サムライダイシャウ侍大将，Yamabôxi ヤマボゥシ山法師などの使用度の高い合成語が多く採録されているためであると考えるべきであろう。なお，登坂俊子氏に次のような現代語の連濁に関する調査があ

表27　現代語の拍数と連濁率

拍　　数	連　　濁	非 連 濁	計
2　　拍	13(43％)	17(57％)	30
3　　拍	497(59％)	346(41％)	843
4　　拍	1,564(58％)	1,139(42％)	2,703
5　　拍	996(64％)	555(36％)	1,551
計	3,070(60％)	2,057(40％)	5,127

（注）『日本語アクセント辞典』の名詞のうち，人名・地名・外来語を除いたものの調査。4拍の計の欄の2,704を私に正した。下記の論文の表1による。
（登坂俊子「現代語における連濁とアクセント」学習院女子短期大学『国語国文論集　第13号』所収）

る。語種別調査ではないので，和語に限っての連濁率は算出できない。漢語も含めた2拍～5拍の語では，60％の連濁率を示しており，『日葡辞書』の率よりも高い。

(iii)和語らしい語形　語形上和語らしく感じられる条件については，大要3—2において見てきた。/モノ/という形から，スペイン語の「猿」，ギリシャ語系接辞「単一」などが考えられもするが，日本語の「物」「者」（「もの-」接頭辞，「もの」形式名詞）も考えられる。/パット/は外来語 'pad' と 'putt' でもあるが，和語音象徴語「ぱっと」（副詞）でもある。しかし，/モノ/や/パット/から漢語を想い浮かべることはできない。/ゴガン/，/ラデン/，/パンダ/，/シューギョー/，/ジュース/などは和語とは考えにくい語形である。和語（自立語）には語頭にラ行音をもつものが極端に少なく，『新潮国語

辞典』（この辞典は，和語見出し語を平仮名で書き，漢語と外来語の見出し語を片仮名で書いている）によって求めても，次の25語を得るだけである。

ら（らギョウ）らくのみ（らヘン）　り　りす　りゅうと　りゅうりゅう　りん　りんりん　る　るいれ　るつぼ　るべり　るまた　れ　れこ　れそ　ろ　ろせうるし　ろは　ろま　ろませ　ろりめく　ろりろり

これらの語は，語源の見当のつけにくい「るべり」を除いて，

①漢語由来と考えられるもの（りす，りゅうと，ろせうるし）

②逆順法によって出来た隠語的倒語（れこ，れそ）

③語頭拍脱落によって出来たもの（い-るつぼ）

④言語・文字に関して出来た語（ら，り，る，れ，ろ，るまた，ろは，らギョウ，らヘン）

⑤音象徴語（りゅうりゅう，りん，りんりん，ろりめく，ろりろり）

のように分類でき，⑤を除けば，やはり語頭にラ行音をもつ和語は本来存しなかったと考えられる。②と③のように，そして⑤も含めて，これらの語がそろって伝統的な雅語とはちがって，登場も新しく俗語的な印象を与えることに注目すべきである。そして『新潮国語辞典』では漢語扱いになっている「レッキと」「ラニ」なども「歴（レキ）と」「蘭（ラン）」にそれぞれ促音が挿入されたり，語末に母音/ｉ/が添加したりして，原音が一段と日本化しているので，次節で詳しく見るように，和語として扱う方がよいであろう。和語には，マ→マン（間），タビ→タンビ（度），アマリ→アンマリ（余り），クダリ→クンダリ（下り）；ネカラ→ネッカラ，トテモ→トッテモ，ヨホド→ヨッポド，ヤハリ→ヤッパリ，キト→キット，モトモ→モットモ，チョト→チョット，モハラ→モッパラのように撥音や促音が加わった形が生まれることも珍しくなく，新旧両形が<二重語> ‘doublet’ のように並び行われることがある。このように，撥音・促音などの拍を形成する音素が，着脱自在の活躍をして語彙を豊富にし，語義を微妙に変質させるのも，和語の世界の１つの特徴に数えられる。そして，このような音の挿入・添加あるいは拗音化を受けた新しい語形と，もとの語形とのあいだに，おおむね<俗>と

<雅>のちがいがあると感じられるのであるが，新語形の方には新しい時代の表現欲求に応える力づよさが感じられることが多い。オット，ヤット，ズット；とんび（鳶），マンビキ（∠間引き），よんべ（∠よべ），まんま（∠まま　儘・飯）；チャチ（な），しょいなげ（背負い投げ），しゃぶる，ちゃんと，ちょくちょく，ひょんな　などは，その語形から比較的新しい時代に日本語の舞台に登場した語であることが推測できるものである。

(2)　音象徴語

上に述べたような語形上の変容の延長線上に，和語の特徴の１つである音象徴語の生成という現象が考えられる。

促音挿入　あッさり　うッすら　ぬッくり　ふッさり

撥音挿入　こンがり　しンなり　はンなり　ひンやり　しンずしンず

引き音節挿入（長音化）　ごろーり　ずらーり　たらーり　ひーやり

拗音化　　めた→めちゃ，くたくた→くちゃくちゃ，へなへな→へにゃへにゃ

このような手続きは，外界の音そのものの直接的模倣である擬音語よりも，音の象徴的機能による擬態語の方の生成において活発である。カタカタ：カチャカチャ　のような対では，おのおのが音を即物的に描写するようにつくられていると考えられるが，ごろり：ごろーり　のような対では，明らかに前者を基礎にしてその語義の一部を増幅強調するために後者が生成されたと考えられるのである。音象徴語の豊かさは日本語の語彙の特色の１つであるが，とくに新語づくりが自由であることと，擬態語の数が多いことは，他言語にはほとんど見られない特徴的な事項である。新しい音象徴語を幼児や劇画作者が創り出しても，日本人は何の用意もなしにその語の意味を即座に理解することができるし，喜んでその語を受け入れる。ヨーロッパの言語には‘zigzag’や‘brrr’（寒いときのブルブル）のような一般に使われる擬態語はきわめて少なく，擬音語も量的には日本語のそれと比べることができるほど多くはない。中国語においても，擬音語の方は，‘shasha’（沙沙。サラサラ，ザーザー），‘wuwu’（烏烏。ウーウー　嗚咽・うなり声や音），‘gulu gulu’

（骨碌骨碌・咕嚕咕嚕。ゴロゴロ，グーグー，グラグラ）など，多彩で数もかなりあるが，擬態語は数もきわめて限られているようで，一般にはあまり意識されていないようである。（中国の語彙関係書は「象声词」「拟声词」「象声造词」などをあげるのみであって，漢語研究者にたずねても「擬態語」に相当する語は知らないと言われるのが普通である。修辞学用語の＜摹状＞が擬態語に近いのであろう。）

(3) 品詞

和語が他の語種と明確にちがう点の１つは全品詞に分布していることである。付属語であるため，本書では語としては扱わない助詞・助動詞も一，二の例外を除いて和語である。漢語成分を含む「ソウだ」「ヨウだ」「-条」（について，とはいうものの）のようなものが付属語になっているのは異例のことである。また「僕」「貴殿」のような漢語が代名詞として用いられるのも珍しいことで，これは日本語の代名詞が機能語としてよりは実体語として用いられていることを語っているのであろう。

なお，連体詞のうち，整然たる体系をなす指示詞コンナ，コノ，コノヨウナ（ソンナ…，アンナ…，ドンナ…）の系列は，語形と機能の両面で注目すべき語群である。（ただし，-ヨウ-は漢語である。）また日本語の形容詞は終止形形態素/イ/または/シイ/を語末にもつが，「イ語尾」をもつもの（国文法でいう「ク活用」）は「ヨイ」「ワルイ」など数語を除いて，客観的な性状を意味する形容詞であり，「シイ語尾」をもつもの（国文法でいう「シク活用」）は情意的な感情を表す形容詞である。（参照　山本俊英「形容詞ク活用シク活用の意味上の相違について」『国語学23集』所収）これは，後者が２次的派生によって成っているという事由もあって，性状対感情という，意味の分野と語形とが対応しているケースである。

基本的な形容詞を語末音で分けると，次のような分布になる。

-ai	で終わるもの	103	たいへん多い
-ii	〃	6	たいへん少ない（シク活用を除く）
-ui	〃	46	多い

-ei	〃	0*	ない
-oi	〃	44	多い

(注) 国立国語研究所『動詞形容詞問題語用例集』の「N　語末からの逆びきによる動詞形容詞一覧」にあげられた「単純語（形容詞）」分類の項の数値。
＊古典語には「執念し（シュウネシ）」があるが，現在「シュウネイ」という形容詞は用いられていない（シュウネクつきまとうのような連用形用法のみ）。同じように「猛し（タケシ）」から想定される「タケイ」も現実には存在せず，「タケダケシイ」という畳語形容詞が用いられている。

表28　動詞の語末音と活用類型

-u	-V+u	-au	会う，買う，かまう		I
		-iu	言う		
		-uu	吸う，食う，縫う		
		-ou	追う，思う，問う		
	-C+u	-C（rを除く）+u	-ku	書く，抜く，着く	
			-gu	脱ぐ，急ぐ，かつぐ	
			-su	出す，貸す，なす	
			-tsu	立つ，勝つ，待つ	
			-nu	死ぬ，去ぬ	
			-bu	飛ぶ，呼ぶ	
			-mu	読む，止む，咬む	
		r+u	-a+ru	有る，遣る，張る，成る，去る	
			-o+ru	折る，取る，乗る，剃る	
			-u+ru	売る，釣る，刷る，繰る，降る，塗る，揺る	
				kuru（来る）	III
				suru（為る）	
			-i+ru	知る，散る，限る，走る，まじる，ちぎる，切る，はいる	I
				上記以外(居る，着る…)	II
			-e+ru	下記以外(下げる，なめる…)	
				照る，減る，湿る，茂る，しゃべる，滑る，ひねる，耽る，蹴る，帰る	I

動詞は，サ行変格の複合動詞（研究-スル，チャレンジ-スルなど）と，和語化の進んだ漢語・外来語由来の少数の動詞（装束→ソウゾ-ク，サボター

ジュ→サボール　など）を除くと，すべて完全な和語動詞である。日本語の動詞はその活用類型から，Ⅰ 五段活用（強変化），Ⅱ 一段活用（弱変化），Ⅲ 変格活用（不規則）の3類に分けられるが，それは語末音によって表28のように分類される。（Cは子音，Vは母音を表す）

また動詞の活用類型別分布は，表29のとおりである。動詞のうち，五段活用が約63%，下一段活用が約30%，他のものは基本的なものであるが数が少

表29　動詞の活用類型の分布

活用類型	異なり語数	%
五段	2,174	62.89
上一段	66	1.91
下一段	1,028	29.74
カ変	5	0.14
サ変	181	5.24
その他	3	0.08
計	3,457	100

（国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字(3)分析』から）

ないので，覚えるのに記憶力の負担は大きくない。教育的には表28にしたがって，次の順で指導するのが望ましい。

(i)不規則動詞「来る」「為る」を覚える。

(ii)強変化動詞の中で，'-iru' および '-eru' で終わる，使用頻度の高い動詞を覚える。（表28の右端最下段のⅠと下から三段目のⅠの動詞）

(iii) '-iru' および '-eru' で終わる動詞のうち，(ii)を除くと，残りはすべて弱変化動詞である。

(iv)以上(i)と(iii)の動詞を除くと，残りはすべて強変化動詞である。

副詞は特定の語末形式をもつものが多い。-ッカリ，-ッサリ，-ッシリ，-ッショリ，-ットリ，-ラリなどで終わるものは，『岩波国語辞典』の見出し語の場合はすべて副詞であって，例外はない。-ニで終わるものの46.8%，

-リトで終わるものの94.1%が副詞であるというように，副詞集中率の高い語末形式がある。語彙全般では，-ン（13.67%）を筆頭にして，-ウ，-イ，-ク（-グ），-キ(-ギ)，-ル　の順で語末音分布が漸減するが，副詞だけに限ると，-リ（20.02%），-ニ（11.17%），-ト（10.54%）の3語尾に集中していることが顕著な現象である。

(4)　語義と造語力

和語は抽象的な語が少なく，具体的な個物や事象を表す語は豊富である。'nature' を意味する「自然」は漢語であって，和語でその概念を表すことはむずかしい。にもかかわらず，その「自然」に包摂される下位項目としての「雨」，さらにその下位項目としての「春雨」「菜種づゆ」「五月雨」「夕立」「時雨」「日照り雨」「秋雨」などは実に豊かで，数多くの語をあげることができる。『分類語彙表』の「1,510　自然・物体・物質」の項を探しても「汁」「粉(こ・こな)」の3語を除くと，漢語61語，外来語3語で，如何に和語がこの分野に稀薄であるかがよくわかる。「1,304$_7$　信仰・宗教」「1,181　点・線」など，和語が極端に少ない分野は他にいくらもあげることができる。反対に「1,552　植物名」「1,553　枝・葉・花など」「1,561　獣」「1,562　鳥」「1,564　魚」「1,565　虫」などの項目は和語が多い。動詞・形容詞は和語が中心になる分野であるが，形容動詞では，漢語を語幹とする混種語が多くなる。このような語の分布を細かく調査していくと，和語の具象語集中と即物性志向が明らかになってくる。前述の音象徴語の豊かさも，日本人の感性のはたらきやあり方と結びついていると言えるだろう。

ところで，新しい単語を形成する際にもっとも重要なことは，概念を精確に規定し，的確に表現することである。そして，そのようなことばづくりのいとなみが容易かつ迅速に果たされることである。このような造語の観点から和語の性質が問題になることが多い。名詞において上位概念を表す抽象語に乏しい和語は，動詞・形容詞においては，漢語とは逆に外延 'extension または denotation' の大きい抽象語が多くなる。いま，同訓の漢字を『大漢和辞典』によって数えると，

みる：見・視・看・相…　217字
あきらか：明・昌・灼・白…　201字
とる：取・採・盗・撮…　139字
はかる：計・測・量・諮…　137字
つつしむ：愼・謹・恭・姞…　131字
みめよい：妦・佼・娟・嬌…　108字
たすける：佑・助・左・亮…　84字
ただす：糾・是・正・尹…　53字
なく：泣・鳴・哭・涕…　49字

など，3桁の数に上る同訓字も見られる。ここにうかがえるように，漢語はさまざまな語（漢字）を使って，詳細・的確に，限定的に事物・事態を表現することができるが，和語によってそれを果たすことは，残念ながらむずかしいようである。和語による造語に，限界が生じるのは，語形が長大になるという効率上の負担とともに，ここに見た語義の非限定性・拡散性が原因になっていると考えられる。「わび（侘び）」「さび」「しをり」「あはれ」「をかし」といった，文学理念として用いられる和語の内包 'connotation' の理解には，かなりの読書経験を前提としなければならないだろう。「わび」を「閑居の情趣を楽しむこと」とか「質素で落ち着いた趣」とか説明しても十分な把握にはいたらないのである。

6—3　漢語

6-1で見たように，語彙について考えるときは，和語のほかに豊富な漢語の存在に注目しなければならない。この節では既述の項の内容を補足しながら漢語の形・はたらきなどについて考えてみる。

(1)　語形

(i)音よみ　＜漢語＞は，日本語の中で通常漢字1字または2字以上で書かれ，かつそれらが音よみになっている語のことである。したがって，辻・滝・山田・大原・立木・岩山などは漢字で書かれていても漢語ではなく，和

語である。また，三年・草原・生花・市場・山川・日本・中空・高山などは，音よみと訓よみの両様のよみ方が可能であるため，表記面だけでは漢語か和語かの判定はできない。漢字表記が普通である人名(姓)・地名の中にも，木村・田中・吉川・白浜・高田・茨城・などの和語がある一方，安藤・五味・頼・南波・東京・京都・高知・新宿などの漢語もあって，まちまちである。和語と考えられている「むやみやたら」は語形からも漢語とは考えにくい語であるが，「めちゃめちゃ（滅茶滅茶)」「めちゃくちゃ（滅茶苦茶)」などは，当てられた漢字の字音に近いので，漢語かと錯覚する人も多い。

＜音よみ＞というときの音（字音）は，狭義には呉音および漢音をさし，これらよりも古い古音（例．奇ガ，意オ，移オ）や漢呉音よりも新しい宋音（＝唐音，唐宋音とも）を除外することがある。馬ウマ・梅ウメ・竹タケなども古音とする説があって，たとえばウマについては，ma の頭子音‘m’に準備音‘m’が用意され，それが顕在化して mma となり，やがて uma となったと推測するのであるが，確実に中国音に基づくのかどうかの判断が困難である。また，ラニ（蘭)，エニ（縁)，ゼニ（銭)，ショウソコ（消息)，ユウソコ（有職)，ダイトコ（大徳）などは，字音ラン，エン，ソクなどに発しているのであるが，これらは，閉音節（‘closed syllable’子音で終わる拍）の漢字音を古代日本語の音節組織にしたがって開音節（‘open syllable’母音で終わる拍）にするために，狭母音/ｉ/や半狭母音/ｏ/を付して成ったもので，原音より遠くなっている上に，おおむね平安初中期の文献に見える限られた数の語形であるため，本書では純然たる漢字音の中には含めないことにした。「レッキと（歴と)」や「キビショ（急須)」についても，漢語扱いをする辞書があるが，それぞれ，「レキと」に促音が挿入されたもの，唐音「急焼（キヒシヤキ)」が転じたものと説明されている。後者については「『急焼』の唐宋音『きゅうしゃ』の変化。『きびしょう』とも。」とする辞典もある。しかし，この「レッキ」や「キビ」は漢字音とは認めない方がよいであろう。いうなれば，「反故・反古」の字音「ホンコ」が「ホウゴ」「ホウグ」と表記され，さらに短呼されて「ホゴ」「ホグ」となっても，「反」字

に「ホウ」「ホ」,「故」や「古」に「グ」という字音が認められないように,臨時的・個別的なよみ方（故実よみの一種）と解しておくべきであろう。漢字音の中には,「ホイ」のように「焙」一字しか例のないものもあるが,「レッキ」や「ボダイ（菩)」のように，3拍以上になるものは考えられないのである。「菩」はもともと「菩提」を1字化した略字なのである。

字音はすべて仮名文字で1字（例. 以・戸・波・久・夜など1拍）か2字（例. 的・達・鉢・郁など2拍，茶・斜・著・朱など1拍）が普通であって，3字で表されるのは拗音拍を含む場合に限られる（例. 着・脈・職・極)。そして，先に「3　語の形」(3-4) で示したように，1字で2拍になる場合は，第2拍が撥音，引き音節，チ・ツ・キ・ク・イのどれかに限られる。ウマ・ムマ・ウメ・ラニ・ゼニ・エニなどは，上の規定から外れるので，厳密に言えば漢字音とはできないのである。

(ii)呉音・漢音と慣用音　「天然」はテンネンとよまれるが,「自然」はシゼンとよまれる。また「天文」はテンモンであるが，「人文」はジンブンである（「人文」をジンモンという人があるが，これはテンモンのよみ方に牽引された誤りである)。さらに「無言の行」の場合はギョウであるが,「行を共にする」の場合はコウである。このように,「然」「文」「行」などには複数の字音がある。しかし，すべての漢字にこのように複数の字音があるわけではなく，扇セン　参サン　先セン　五ゴ　以イ　再サイ　消ショウ　漢カン　議ギ　飛ヒ　変ヘン　連レン　黒コク　詩シ　天テン　真シン　履リ　などは（理論的にはともかく，現実には）1とおりのよみ方しかない漢字である。先にあげたネン・モン・ギョウが<呉音>であり，ゼン・ブン・コウが<漢音>である。後にあげたセン以下は，呉音漢音共通音である。呉音・漢音以外に唐宋音がある。「行」のアン（行脚・行燈),「子」のス（椅子・払子),「頭」のジュウ（饅頭),「経」のキン（看経）など，11世紀以後に入宋したり宋から来日したりした禅宗の僧侶や商人によってもたらされた，宋代・元代の新しい字音であるが，特定の漢字，特定の語に限られ，その受容は極小部分で断片的なものであった。仏教・道具・住居などに関する語彙がほ

とんどである。

漢字音に関して触れるべきものに，「空」のクウや「通」のツウのような<慣用音>のことがある。「空」は呉音ク，漢音コウ，「通」は呉音ツ，漢音トウであって，現在日本で広く使われているクウやツウとはちがっている。しかし，漢字音の中には，このように慣用音として定着しているものが割に多い。これも字音の一種と考えなければならない。「石」には呉音セキ，漢音シャクのほかに慣用音コクがあり，「分」にも同様にブン・フンのほかにブがある。

ここでわが国の呉音・漢音などについて歴史的な説明をしておこう。

古音：系統不明

呉音：推古期までに入った字音で，中国南方音に由来すると考えられている。主に仏教関係語彙に残るが，仏教の弘通に伴い，庶民の生活語彙になったものが多い。

漢音：中国の隋唐時代の音に由来し，古代日本で正音とされたために，字音の中でいちばんよく用いられている。

唐(宋)音：宋元以降の新しい音で，禅宗の僧侶・商人などを介して，部分的に弘まった音。限られた少数の単語の中に残っている。

いくつかの漢字について，呉音と漢音を対照してあげてみる。

(上段は呉音，下段は漢音)

(1)	馬	万	米	微	無	亡
/m/	メ	マン	マイ	ミ	ム	モウ
/b/	バ	バン	ベイ	ビ	ブ	ボウ

(2)	内	奴	男	難	鮎
/n/	ナイ	ノ・ヌ	ナン	ナン	ネン
/d/	ダイ	ド	ダン	ダン	デン

(3)	人	女
/n/	ニン	ニョ
/z/	ジン	ジョ

(4)	間	家	(5)	礼	西
/e/	ケン	ケ	/a/	ライ	サイ
/a/	カン	カ	/e/	レイ	セイ

(6)	厳	建	(7)	吉	質	越
/o/	ゴン	コン	/チ/	キチ	シチ	オチ
/e/	ゲン	ケン	/ツ/	キツ	シツ	エツ

「法」の字音は，現代ではともに「ホウ」になっているが，字音仮名遣では呉音「ホフ」，漢音「ハフ」であった。基本的な漢字にこのように呉音・漢音の２系列があるということは，学習にも多くの困難を招来することになる。たとえば，次に示すように２系列の使い分けが個々の語ごとに固定していて，記憶の負担は決して軽くない。

家来ケライ：家族カゾク，白米ハクマイ：米価ベイカ，無理ムリ：無音ブイン，内容ナイヨウ：境内ケイダイ，登城トジョウ：傾城ケイセイ

このように熟語で２系列の区別があるときは，「白衣」のビャクエ（呉音＋呉音」とハクイ（漢音＋漢音）のように，どちらか一方の音に統一してよむのが原則である。ビャクエは僧のまとう黒衣に対する俗人の意で，ハクイは単に白色の衣服の意である。「兄弟」のキョウダイ対ケイテイ，「男女」のナンニョ対ダンジョは異音同義であるが，「有為」のウイ対ユウイ，「正気」のショウキ対セイキは異音異義である。しかし，どちらの場合も異音，つまり語形が異なるわけであるから，別語扱いになるのは当然である。（先に「人文」をジンモンとよむのは誤りとしたのは，「人類の文化」の意であるからでもあるが，「文」をモンとよむときは「人」もニンとよむべきであるからであった。）しかし，この原則にも例外があって，「埋没」（マイモチのはず）がマイボツであったり，「未亡人」（ミモウニンかビボウジンのはず）がミボウジンであったりする。このように呉音と漢音の間には，相互の牽引（使用者からいうと混乱）が起こって，字音の混淆がときに生じる。慣用音が生まれる１つの理由がここにある。「月」は漢音ゲツであり，呉音としてはゴチ

が想定されるが，ガツになっており，「乙」の漢音イツに対して，呉音はオチであるべきところが，オツになっている。

(iii)拍数　漢語は漢字の音よみによって漢語たりえるわけであるから，拍数は単字の場合，1拍か2拍に限定される。以下2字漢語，3字漢語というふうに字数を増やすと，拍数は，1＋1，1＋2，2＋1，2＋2（以上2字），1＋1＋1，1＋1＋2，1＋2＋2，2＋2＋2……（以上3字）のように，n字のときはn拍から2n拍の間に分布することになる。「四季（シキ）」「三者（サンシャ）」「原稿（ゲンコウ）」;「歯科医（シカイ）」，「陶磁器（トウジキ）」，「助走路（ジョソウロ）」，「安全弁（アンゼンベン）」のような例があげられる。しかし，かつて『当用漢字音訓表』によって漢字音の分布を調べた（表30参照）ところ，1拍漢字の異なり字数は，

-a　66，-i　183，-u　64，-e　16，-o　77

-ja 16，　　-ju 26，　　-jo 40

計488字で，異なり総数2,029字の24.05％にすぎなかった。つまり，漢字音のうち，ほぼ4分の3は2拍であるため，現実には2n拍として実現される熟語が多く，うち2×2の4拍がもっとも多いことが推測される。漢語の多数が，本章の和語の拍数のところであげた表24・表25が語るように，4拍に集中している理由がここにあったわけである。

(iii)連濁　漢語は和語とはちがって，語形が変化することは少ない。助数詞の中で，入門者にもすぐ学習事項になる「-本」「-匹」「-杯」など，/h/を語頭にもつものが，/-poN/，/-hoN/，/-boN/のように交替するのが，もっとも顕著な例である。語頭の/h-/が変化する場合は，原則として/p-/になり，「発表」ハッピョウ，「出発」シュッパツ，「寒風」カンプウのようになる。中世和語の約45％に見られた＜連濁＞は，侍＋大将（ダイショウ），当て＋推量（ズイリョウ），水呑み＋百姓（ビャクショウ），口＋達者（ダシッャ），水＋鉄砲（デッポウ），湯呑み＋茶碗（ヂャワン），唐＋獅子（ジシ），骨折り＋損（ゾン），千成リ＋瓢箪（ビョウタン）など，漢語の中にもかなり見られるが，先に紹介した『日葡辞書』の例のような，中世の少数の熟し

表30　当用漢字の字音の頭音・末音の分布

（『新潮国語辞典』初版巻末付表により算出，Ｓ21告示およびＳ29補正を併せる。）

	あたま／しり	なし	k＋	g＋	s＋	z＋	t＋	d＋	n＋	h＋	b＋	m＋	r＋	w＋	計
1	-a	1	30	6	9	1	3	4	1	3	2	3	1	2	66
2	-ai	2	20	8	24	5	19	7	1	10	8	5	3	1	113
3	-aku	2	18	4	8	0	6	2	0	8	5	2	4	0	59
4	-ati									1					1
5	-atu	1	6	1	7	1	1	2		2	4	1			26
6	-an	4	44	8	11	2	13	8	4	20	7	4	5	2	132
7	-i	21	35	11	46	20	11		4	19	5	3	8		183
8	-iki				4	2				1			1		8
9	-iku	1	1			1	5		1				1		10
10	-iti	2	1		2				1						6
11	-itu	2	2		7	2	2			4		1	3		23
12	-in	11	12	2	27	8	6		5	4	3	2	7		87
13	-u	5	12	2	5	3	1			21	7	6	2		64
14	-ui				14	2	4						4		24
15	-u:		1	3	3		2			2					11
16	-uku									9					9
17	-utu		2							2	2				6
18	-un	2	4	3	1					7	3				20
19	-e	5	5	3	2	1									16
20	-e:	10	28	3	31	2	23	1	1	10	1	7	11		128
21	-eki	6		3	14		6			2			2		33
22	-etu	4	7	1	10	2	5		1		1	1	4		36
23	-en	13	29	11	24	7	8	4	5	7	3	3	5		119
24	-o	1	19	13	11		10	5		6	7	2	3		77

25	-o:	13	61	8	30	9	36	9	6	21	21	6	8		228
26	-oku	4	9	2	9	5	7	3		1	6	3	3		52
27	-otu	1	1		2		1			1	1	1			8
28 ▶	-on	5	12	3	5	1	1	2		3	2	4	1		39
29	-ja	2			12	1	1								16
30	-jaku	6	3	2	9	3	2			1	1	1	1		29
31	-ju	5			14	7									26
32	-jui	2													2
33	-ju:	15	20	1	22	12	12		3				7		92
34	-juku				6	1									7
35	-jutu				1	2									3
36	-jun				3	11									14
37	-jo	5	9	3	9	7	2		2				3		40
38	-jo:	20	28	5	61	23	24		1	8	5	4	14		193
39	-joku	5	3	1	9	1	2						2		23
	計	176	422	107	452	142	213	47	36	173	94	59	103	5	2,029

た合成例と，現代日本語の中の大量の漢語とでは趣を異にするはずである。明治以後の教育の普及に伴い，字音の教育が徐々に徹底してきた結果，単字の字音に還元されたものもあり，むしろ連濁という口頭語的な現象は，漢語の中では減少してきており，漢語の連濁率は，和語のそれよりは低いと見られる。（参照『国語学大辞典』の「連濁」の項　奥村三雄氏執筆）

(2)　音象徴語

漢語の音象徴語も古くから日本語の中で使われていて，

鏘々　玲瓏　劉亮　韡韡　殷々　滾々　淙々　朦朧　淋漓　齷齪　磊落

など，数も少なくない。しかし，擬音語が主であって，擬態語の数は限定されている。

(3) 品詞

漢語は漢字を媒体とするから，和語の一歩外側にある語種である。したがって，漢語の分布する主な分野は名詞に限られる。しかし，

極・大変・大層・一層・勿論・畢竟・偶然・段々・往々・多少・日夜・到底・存外

のような副詞と，僕・吾人・拙者；貴下・貴兄・諸君；某氏などの代名詞の2品詞では，漢語そのままの形で用いられるものがかなりある。漢語に和語の形態素を付した，後述の混種語形態のものは，研究-スル，論-ジル　などのサ変動詞と，有名-ナ，堂々-トシタ（～タル）のような形容動詞が多い。『岩波国語辞典』について調べたところ，形容動詞（ダナ型）全数（1,648語）の中では「温和-ナ」のような漢語系のものが，1,096語（66.51%）で，「にこやかな」のような和語系のもの340語（20.63%），「イージーナ」のような外来語系のもの98語（5.95%），「悪達者な」のような混種語系のもの114語（6.92%）を大きく引き離して，実に全形容動詞の3分の2を占めている。その他の品詞としては，「故-博士」「当-研究所」「各-大臣」「前-総長」「諸-外国」「明-八日」「本-大会」などの連体詞，「万歳」「畜生」「南無三宝」などの特殊な感動詞をあげることができる。

(4) 語義と造語力

漢語は名詞・動詞では微細な意味を限定的に表すものが多い。和語「なおす」に対する漢語の　訂正する・修正する・修整する・更正する・修理する・修繕する・添削する・修復する・治療する・矯正する……，和語「なさけ」に対する漢語の　情・人情・愛情・情愛・慈悲・仁愛・愛恋・厚情・同情・恩情・愛憐……等々はその例であって，複雑な類義関係をつくっている。そして，漢語の個々が和語よりも狭い意味であるため，実際の運用にあたって，共起する名詞や形容詞との組み合わせが制限されるのが普通で，外国人がしばしば誤りをおかすようになる。また，専門用語である「合法性」と「適法性」のように，簡潔な表現で概念を限定できるのは，漢語の特徴と見るべきである。1字漢語の中には，業ゴウ，対ツイ，客キャク，香コウ，

吉キチ，肉ニク，極ゴク、直ジキ，晩バン，絵エ，幕マク，封フウ　のように，かなり基本的で，人々によく用いられ，口頭語の世界でも活躍しているものが多い。一イチ，二ニ，六ロク，七シチ，九クなどはそのもっとも著しいもので，数詞という基本語詞の中に入りこんでしまっている。漢音を用いる1字漢語はどちらかといえば呉音のそれよりも少なく，その上基本的とは言えないものが多い（例．愛・才・品・礼・金・会など)。「礼拝」のライハイ（仏教)：レイハイ（キリスト教)，「人間」のニンゲン：ジンカン，「一途」のイチヅ：イットなど，呉音・漢音二様のよみ方があり，意義の分化が起こっているものもある。上に見た，語数としても無視できない形容動詞の分野では，一律に漢語が分布しているのではない。形容詞の少ない意味分野に一定数の漢語系形容動詞が分布しているだけではなく，形容詞のきわだって多い意味分野にもまた漢語系形容動詞が多く見られる。（参考　玉村文郎「現代形容語彙の構造―『分類語彙表』の『相の類』の分析―」『同志社国文学No.11』）同じことは，外来語系形容動詞の分布についても言えるところである。『分類語彙表』の中の「3,330風俗」（歴史的，和風，下劣，野卑など)，「3,368ていねい・親切（対人態度)」（丁寧，無礼，尊大，不親切など)，「3,341偉い・けち・すごい・不届き」（偉大・無欲・老膾・淫蕩など)，「3,345快活・柔和・勇猛」（明朗，温順，貞淑，野蛮など）に代表される「生活態度」や「行動・性格の評価」の分野において，少なくない形容詞・和語系形容動詞に漢語系形容動詞が加わり，語彙の層に厚みができるという増幅現象が起こっている。「相の類」全体としては，漢語系形容動詞の厚みが顕著である。

漢語は造語力が強く，他の語種の追随をゆるさない。それで，

初期微動継続時間・自動音量調整装置・女子年少者労働基準規則・世界食糧備蓄制度

などの長大語が大量に形成され，日常頻繁に使用されることになる。その際，基本単位の拍が短く，微細な概念を明確に表すものが多いこと，またその基本単位の組み合わせ手続きが簡単で自由な結合をゆるすことによって，

他の和語・外来語の及ばない造語力・生産性を発揮するのである。そのほか，インド・ヨーロッパ語の non-, anti-, pan-, re-, con-, syn- などに対応する 非-, 反-, 抗-, 汎-, 再-, 共-, 同-のような接頭的成分，-ness, -hood, -fication -ization, -tic, -al などに対応する -性，-度，-化，-的のような接尾的成分があって，近代の文明文化の受容において重要な媒体となる言語の翻訳を容易にした漢語の特性も無視できない。そして，漢語によるこのような翻訳語が形成され，弘通する下地には，外来語の直接使用よりは，漢字による訳語の方が，一般の日本人に分かりやすくて親しみやすい上に，拍数面での省力性が迎えられるという事実があることが考えられる。脱酸素剤，前癌症状，反中性子，汎発性紅斑性狼瘡などの例をあげるのに事欠くことはないであろう。しかし，「撥水性」のような例になると，これが「水をはじく力」の意味であるとすぐにわかる人はごくわずかになるであろう。とくに，近年漢語漢文の学習が浅くなったために，若い世代の漢語ばなれが強く，「可処分所得」のような中国語の統辞法の知識を要する新造語については一部に問題が生じつつある。青年層の造語でないのに「券売機」「盲導犬」「霊送鳩」などが数年前に登場し，定着してしまった。これらは，本来なら〔他動詞＋目的語＋名詞〕という語順によるべきもので，「売券機」のようにすべきものであった。造語法一般については後の章で詳しく扱うことにする。

(5) 漢語の身元

＜漢語＞の定義には漢字という文字が関わっているが，漢語個々が，もと中国において使用されていたか否かということは問題でない。古代においては，もちろん中国から受け入れた漢語が多かった。そして中国由来の漢語の中には，「葡萄」「卒塔婆」「仏陀」のような，中国語にとってすでに外来語であったものがまじっていた。また，日本側でつくった漢語（和製漢語）も少なくない。「火の事」→火事，「かへりごと」→返事，「はらを立つ」→立腹，「おほね」→大根，「日の手当」→日当 などは，いずれも和語に漢字を当て，のち音よみに変えたために出来た和製漢語である。新しいものとしては，

「平米」（ヘイベイ），「路肩」（ロかた→ロケン），「木賃（アパート）」（モクチン）などがある。これらも音よみをされるので，中国での創出・使用とは無関係に漢語とされるものである。逆に，中国近代音でよまれる「再見（ツァイチェン）」「你好（ニーハオ）」「上海（シャンハイ）」「老酒（ラオチュー）」などは，漢字で書かれ，音よみをされても，漢語ではなくて，外来語とされる。

6—4　外来語（洋語）

外来語は3つの語種の中の末っ子で，日本語の歴史の舞台にいちばんおそく登場した。すでに見てきたとおり，異なり語数では，明治期以後増加のみちをたどってきて，10%近くを占めるまでになっているが，延べ語数では約3%どまりであって，量的に見た場合には，日本語の語彙全般にあまり大きな影響を及ぼすほどではないと思われる。しかし，分野的にはファッション・科学技術・芸術・流通産業などにおいて，使用層では知識階層・芸術家などにより，活発に使われ，絶えず新しい外来語が採用されている。そして，外来語の使用が，異なり語数としても延べ語数としても徐々に多くなってきているのも事実である。

〔文例1〕　わからんほど，ありがたい？

日曜日の午後，ひまつぶしに婦人雑誌のページをくっていた。

「まずクリアベースやファンデーションで明るいいきいきした膚をつくりましょう。……アイメークアップの色はアイシャドウがサトルブルー，そしてアイライナーやアンダーライナーはサトルブラック。……口紅のあとはリップグロウで仕上げを……」

まるでチンプンカンプンである。そばにいた女房にたずねたが，よくはわからないという。「読んでわからないような本を買う気が知れんなァ」と皮肉ったら「そんなら，あんたこれわかるの」と出されたのが最近評判のカメラの説明書。

「世界のエレクトロニクスの最先端をゆくI^2L（アイ・スケア・エル）技

術を中心とした，超集積度のＬＳＩデジタル回路の演算増幅器，アナログスイッチをフルに活用した回路，厚，薄膜技術応用の双曲線函数抵抗器，アナログとデジタルの混成回路，またこれらを一体化する実装技術……」

恐れ入りました。職業がらカメラの扱いなら，人並み以上に知っているつもりだが，これにはお手上げである。売る方がどんなに高度の技術を開発しようが勝手。こちらは，とにかくいい写真が簡単にとれれば文句はないのだ。

むずかしい言葉や横文字をら列すれば，高級だと錯覚しているのではないか？　若いころ，われわれも習い覚えたばかりのドイツ語をやたらと使って気取ったものだが，それはあくまで，お互いに理解しあえる学生同士の話。使用者にわからないような解説や説明など，いったい何の意味があるのか？と，ボヤいていたら，息子から「オヤジさん，古いなァ」と笑われた。彼の説によれば，ＣＭなんかわからんほうがいい場合がある。そのため，もし高級だと錯覚してくれたら，それだけで大成功。特にファッションなんか，わからんＣＭの方が売れ行きがいいとか。駅の売店をキオスクなんて舌をかみそうな名前に変えたり，日本の専売公社が横文字のタバコばかり売り出すのも同じ理由。要はフィーリングの問題だそうな。

オヤジとしては，再び恐れ入った次第。しょせん，流行語やわからぬ用語などは整理されるはず。気にしないことにしよう。（南）

（1977—１—25　朝日新聞朝刊）

〔文例２〕　片かなの英語　　常盤新平

第一線のビジネスマンといわれる人の話を聞いていると，たいてい英語がポンポン飛び出してくる。こちらにフィロソフィーがあって，それに沿ったプランニングを行い，社会的なニーズに応えるものであれば，成功しますよ，なんて言われる。

日本語でなく英語を使うところが，じつは曲者（くせもの）だ。きびしい国際社会に生きているかのようである。「必要」を「ニーズ」と言った方が，説得力がありそうな気がする。聞くほうも妙に有難い感じがする。

「哲学」と言っては陳腐になってしまう。やはり「フィロソフィー」でなければ。この場合，「ヒロソヒー」などと発音してはいけない。

このような風潮を嘆いているわけではない。英語を使う必要性は十分に認めている。英語を使うほうが，話が通じやすいという事情も大いにある。

けれども，英語を使いすぎると，話そのものがウサンくさくなってくる。そういう相手が信用できなくなるのである。何もそうまで無理をしなくたっていいじゃないですか，また，そんなにハッタリをかけなくてもいいじゃないですか，と言ってやりたくなる。この人，本当に英語を知っているのかな，とつい疑いも持つ。

正直に申し上げれば，英語まじりの話を聞いていると，英語を知らずに英語を使っていると思われるような，そらぞらしいＴＶのＣＭを連想するのである。（1977—１—25　毎日新聞朝刊）

上の例に見るように，外来語が増えてきていて，そのことに対する反省意見もしばしば提出される。しかし，外来語の増加傾向は弱まりそうにはない。先に述べたとおり，strike がストライクやストライキ（ストとも）のように，原語の１拍が５拍にもなるような長大化による効率のわるさがあるにもかかわらず，外来語が増える事象には，訳語を考える手間と時間を省き，即刻即席に使うというスピード至上の風潮がうかがわれ，そして何よりも，和語や漢語では表せない新鮮で垢抜けした感じを伝えたいという欲求が見られる。

通例音素文字を用いている原語から入った外来語には，原則として連濁は起こるはずもない。ハイキングとバイキング，クラスとグラス，カールとガール，コールドとゴールド，ハットとバット，サインとザイン，キャップとギャップ，クリーンとグリーンなどの語頭清濁音の対立からも，連濁は起こりようのないことがわかるだろう。しかし，「赤ゲット」「長ギセル」「雨合羽（ガッパ）」のように，ごく稀な例ではあるが，連濁が見られる。これらはいずれも近世に入った語で，庶民生活の中でよく使われてこなれた外来語

で，外来語意識の稀薄になったことを物語っている。

外来語の音象徴語としては，チ(ッ)クタ(ッ)ク，ジグザグがあげられるぐらいで，ほかには日本語の中で市民権を得たものはまず考えられない。この点漢語とは大いに趣を異にする。また，品詞に関しては，名詞への集中率が漢語よりもさらに顕著である。-スル，-ナのような和語形態素を付して，動詞・形容動詞になるものも近年増えてきて，かつてのコップ・ストーブ・ミルク・ハンドル・ランプのような名詞に限られた外来語の世界に大きな変化が見られるようになった。この延長線上に，ハウス/メゾン/カ(ー)サ（いずれも「家」），キャ(ッ)スル/シャトー/シュロス　のような異なる原語の並立，あるいは，ガレージ/カーポート　のような和製英語との並立が見られるようになった。そして，これらはかつての　コップ：カップ，トロッコ：トラック，ストライキ：ストライク，カルタ：カルテ：カード　のようにちがった事物を指す分化の方向へ進むよりは，同一事物の異なる表現，類義語の組として増加する方向にある。

外来語の語形の中には，ガール，ビヤ，ナイス　のように，単独では用いられず，複合形式の中でだけ用いられるもの（ガールフレンド，チアガール；ビヤだる，ビヤホール；ナイスピッチング，ナイスナイス）もあって，対になるボーイ（boy）とガール（girl）が日本語の中で同等同資格ではたらいているわけでないことにも注意する必要があるだろう。サンキュー，グッ(ド)バイ，バイバイ　などは感動詞として親密な間柄でよく使われるようになったが，代名詞　ユー（you），ミー（me）などは，風俗小説的なとらえ方でしか問題にはならない。これに対して，ワイフやハズは，妻・家内・夫・主人といったこなれた和語・漢語の使用に心理的抵抗を感じる層が気楽な場面でよく用いるようになってきた。

ハード（ウェア）・ソフト（ウェア）に象徴されるような最先端の科学技術分野の用語としての外来語の中には，漢語や和語に翻訳することなど考えられもしないものが増えている。

外来語を使うに当たって，日本人は原語にあった形態素などは通例落とし

てしまう。

smoked salmon→スモーク・サ(ー)モン

curried rice→カレーライス

sunglasses→サングラス

homesickness→ホームシック

on the air→オン・エア

中には，日本でつくったもの（和製外来語）もあって（例．セブンスター seven stars），一概には言えないが，複数語尾・過去分詞語尾・接尾辞・冠詞などが脱落しやすいという傾向は十分に認められる。外来語を歓迎しはするが，外来語自体を意味・語形の両面にわたって正確に受け入れることはあまりしない。「スチーム・フェイシャル・ブラシを使ってブラッシングする」（新しい蒸気洗顔法と器具の宣伝文）のように，外来語を使っても，それは単語個々を日本文の中に借り入れて使っているだけで，漢語の統辞法ほどには，西欧語の文法をまるごと理解して使うようにはなっていないし，またそうなるはずもないのである。「ツーバイフォー工法」とか「アンツーカコート」（全天候テニスコート）とかに見られる前置詞を含んだ外来語も，日本人は全体として非分節的に理解し使用しているのである。このような前置詞入りの新しい和製外来語の出現はまず考えることはできないであろう。

6—5　混種語

以上に述べてきた3種の語種のそれぞれが，たがいに同種どうし結合することは当然であるが，そのほかに異種の単語が結合したものが古くからあって，「めガキ（女餓鬼）」（万葉集），「キシまい（吉師舞）」（三代実録），「キョウづと（京苞）」（宇津保物語），「てグソク（手具足）」（日葡辞書）など，古典にも例は多い。このように複数の語種から成る語が＜混種語＞である。混種語は単種結合の量的限界（語数）や質的限界（意義）を克服し，間隙を補完するために求められたと考えられるが，混種語が生まれる場合は，多くその成分が語種のちがいを越えて結合しえるほどに，日本語の単語としてよ

く用いられ，よくこなれているという前提条件があったことが考えられる。詩歌などにおける文学的営為や一般書の翻訳作業に随伴しがちな臨時的造語を除けば，「手」と「具足」のように，成分がいずれも安定してよく使われていたという，混種語誕生に先立つ一定の使用期間が想定されるのである。「道普請（ブシン）」，「赤ゲット」のごとき，連濁を起こしている混種語については，十分その条件が認められる。近年，混種語は増加の一途をたどり，

防犯ブザー，リチウム電池，湯加減チェック，ガス漏れ警報装置，後方まきつけ一回ひねり，鎌倉彫り家具三点セット，五段変速26型スポーツサイクル，ウインドファン早期据付特典セール，ミンクカラー付きアフリカンラムハーフコート，純玄米酢，婦人カジュアルシューズ，パイレックス盛鉢セット，バイリンガル時代，本場大島紬アンサンブル，礼装用道行コート，家づくりノーハウ教室，電子ロック付き入り口

など，いたるところに長短さまざまの混種語が見出される。表22，表23を見ると，現代日本語の中で混種語が占める比重はそれほど大きくは見えないが，それは，辞書の見出し語という性格や，用語用字調査において対象とされたのが雑誌であったことに起因していると考えられる。現実にはさらに長い，複雑な結合による混種語が，各専門領域で大量に使われていることが想定できるし，今後ますます増えることが予測される。

混種語は本質からして他の単種語よりも長い。漢語・外来語に和語形態素成分-スル，-ナ，-ニ，-ト　などを付けて，動詞・形容動詞・副詞などがつくられることはすでに述べたが，このように混種語を形成することは，和語動詞・和語形容詞・和語形容動詞・和語副詞など，新しいことばづくりがほとんどできず，また，意味分野の上でも，形容詞・形容動詞について先に見てきたような偏りがあるのを補完するものとして重要な意義をもっている。

和語だけの世界では，造語力が必ずしも十全にはたらいているようには見えないが，混種語の中の和語のはたらきは大きい。とくに，＜-付き，-漏れ，-出し，-入り＞などの動詞成分，＜赤，白，早，広＞などの形容詞成分，＜口，型，手，方＞などの名詞成分が，もっとも基本的な成分として，

使用される度数の高いことを看過してはならない。

6—6　語種と語彙徴標

川柳に「失念と言えば聞きよい物忘れ」とよまれているように，和語には卑俗感がつきまとうのに対して，漢語・外来語にはあらたまった感じ，優雅で洗練された感じ，新鮮で知的な感じが伴っていることが多い。

男前-美男(子)-ハンサム，宿屋-旅館-ホテル，いどむ-挑戦する-チャレンジする，開く-開設(開館…)する-オープンする，つめたい-冷酷な-クールな

のように，和語→漢語→外来語（混種語）と転換するのにつれて，スマートさが大きくなる組をいくつも考えることができる。このような語感が，語種について問題になる事項の１つである。また，上の語種の転換に伴って，意味が広→狭→広に変わることが多いという事実も，語種に関する考察事項の１つである。

さらに造語に関して，どんな語種がよく用いられるかという観点から調査や研究が行われることがある。日本人が幼児期から獲得する語彙の大部分はたしかに和語であるから，いちばんよく意味のわかる和語を中心にして新しい語がつくられるのが理想であろう。しかし，現実は必ずしも和語中心であるとは言えない状態である。その理由の何点かについては，これまでの各章で触れてきたが，さらに<造語法>の項であらためて考察することにする。ここでは，さまざまな語彙に関わる徴標をあげて，語種との関係が概観できるように，表31と表32を作成した。表についての説明は割愛するが，この２表によって，語種を中心にしてこれまでに触れてきたことをまとめてほしい。

表31　語種と他の徴標との関わり

語種／徴標	和語	漢語	外来語	混種語	語種／徴標	和語	漢語	外来語	混種語
語頭濁音	稀	多	多		造語力		強		
語頭半濁音	極稀	なし			複合成分位置	後項		前項	
語頭ラ行音	(極稀)				機能	自立的	付属的		
拗音		多	多		表記	平仮名中心	漢字	片仮名のみ	混ぜがき
長音		多	多		文字意識	なし	高	(低)	
語形の長さ		短	長	長	同音語	少	多	少	(極少)
語形変化連濁	多	《音訓》(少)	なし		品詞	全	名詞中心	名詞中心	名詞動詞形動
〃 活用	多	なし	なし		自立語付属語	両	自立語のみ	自立語のみ	自立語のみ
〃 連声	稀	(極稀)	なし		多義性	大	(小)	小	
語構成	多様複雑	複雑	単純並列のみ	多様複雑	命名法		限定的具体的		
語構成意識	透明	半透明	不透明	半透明	アクセント	多岐	単純	単純	
使用頻度	高		低		略語化	弱	強		
使用範囲	広		狭		基本度	大		小	小
意味・抽象度	高		低		音象徴語	多		稀	
語感	親近卑俗	硬質佶屈	疎遠洗練		難易	易		難	
結合力		強			文章語・口頭語	両	文章語的	口頭語的	口頭語的

(『日本語教育事典』の288ページの表3を一部補訂した)

表32 語 の 基 本 度 と

区間 ＼ 拍数・品詞		1	2	3	4	5	6	7	名	代	verb 五	上一	下一
1～100	和	4	44	13	2	1			16.5	4.5	16	3	6
	漢	4	22	6	3				27	1.5			
	洋												
	混			1					1				
1～200	和	6	78	41	3	1			41.5	10	27	5	12
	漢	10	32	10	14				54	1.5			
	洋			1	1			1	3				
	混			1	1				1				
1～300	和	7	94	65	9	3			53.5	14	36	5	16
	漢	21	45	22	25				86	1.5			
	洋			1	2			1	4				
	混			2	2				2				
1～400	和	11	114	85	17	3			77	16	44	7	18
	漢	24	61	33	39				120.5	1.5			
	洋			1	2			1	4				
	混			5	2				4				
1～500	和	12	133	106	28	5			95	16.5	56	7	25
	漢	25	74	46	55				155	1.5			
	洋		1	1	3			1	6				
	混			5	2				4				
1～600	和	13.5	155.5	123	36	5			114	17.5	70	7	28
	漢	31	83	63	68				188.5	1.5			
	洋		3	2	5			1	11				
	混			5	3				4				

語　形・品　詞　と　語　種

変	連	形	形動	副	感	接続	助動	助詞	接頭	接尾	計	記号	新出記号
2	1.5	2		2	1.5	1.5	2.5	1	1	3	64		
									1	5.5	35		
											1		
2	3.5	4	1	9.5	1.5	3	2.5	1.5	1	4	129		
									2.5	8	66		
											3		
1											2		
2	7.5	11	1	15	2	4	2.5	1.5	1	6	178	1	〃 同じくの符号
0.5									3.5	21.5	113		
											4		
2											4		
2	8	14.5	1	21	2	6.5	2.5	1.5	1	8	230	2	● すもうの黒星
0.5				2					5.5	27	157		
											4		
2	1										7		
2	8	17.5	2	29	2	7	3.5	2.5	1	10	284	3	○ すもうの白星
0.5	1			4					5.5	32.5	200		
											6		
2	1										7		
2	9	20.5	2.5	33.5	3.5	8.5	3.5	2.5	1	10	333	3	
0.5	1			5.5					7.5	40.5	245		
											11		
3	1										8		

区間＼拍数・品詞		1	2	3	4	5	6	7	名	代	verb 五	上一	下一
1～700	和	13.5	166.5	149	45	7			122.5	18	85	7	34
	漢	32	95	82	85				226.5	1.5			
	洋		5	2	6			1	14				
	混			5	3				4				
1～800	和	15	181	162	55.5	7.5			136.5	18	92	10	40
	漢	33	106	99	112				272.5	1.5			
	洋		5	4	7			1	17				
	混			5	4				4				
1～900	和	16	194	177	69.5	8.5			155	19	100	10	47
	漢	37	117	114	133				309	1.5			
	洋		6	5	8			1	20				
	混			5	6				4				
1～1,000	和	16	205	199	78.5	12.5			169	20	112	11	51
	漢	38	131	124	158				349	1.5			
	洋		7	6	8			1	21.5				
	混			5	7				5				
1～1,100	和	19	219	221	84.5	12.5			186	20	123	12	56
	漢	40	139	137	178	1	1		387	1.5			1
	洋		8	10	10			1	28.5				
	混			5	9		1		7				
1～1,200	和	20	238	247	94.5	14.5			208.5	20	141	12	62
	漢	41	147	156	187	1	1		417.5	1.5			1
	洋		9	13	10			1	32.5				
	混			5	10		1		8				

変	連	形	形動	副	感	接続	助動	助詞	接頭	接尾	計	記号	新出記号
2	9	27.5	3.5	42.5	3.5	9.5	3.5	2.5	1	10	381	3	
0.5	1		1	7		0.5			8.5	47.5	294		
											14		
3	1										8		
2	9.5	28.5	3.5	47	4.5	11.5	3.5	2.5	1	11	421	3	
0.5	1		3	10.5		0.5			9	51.5	350		
											17		
3	1			1							9		
2	9.5	32.5	4.5	51.5	4.5	11.5	3.5	2.5	1	11	465	3	
0.5	1		10	10.5		0.5			9	59	401		
											20		
5	1			1							11		
2	11	37	5	55.5	4.5	13	3.5	2.5	3	11	511	4	＋〔プラス〕
0.5	1		12	12.5		1.5			10	63	451		
			0.5								22		
5	1			1							12		
2	11	39	5	61.5	4.5	13	3.5	2.5	4	13	556	4	
0.5	1		13	14.5		1.5			11	65	496		
			0.5								29		
6	1			1							15		
2	12	47	5	62.5	5.5	13	3.5	2.5	4	13.5	614	4	
0.5	1.25		13	14.75		1.5			11	71	533		
			0.5								33		
6	1			1							16		

区間＼拍数・品詞		1	2	3	4	5	6	7	名	代	verb 五	上一	下一
1～1,220	和	20	240	251	95.5	14.5			212.5	20	142	12	62
	漢	41	150	160	191	1	1		427	1.5			1
	洋		9	14	10			1	33.5				
	混			5	11		1		8				

（注）『現代雑誌九十種の用語用字（1）総記および語彙表』の「第2表　使用率なお，語彙表において，「ア，アア」のように2形を表出しているもの，「ア小数を用いた。

〔問68〕次の文の中の和語・漢語・外来語を抜き出せ。（助詞・助動詞を除く）

①サンドイッチの食べ残しをある社員が平気で紙くずかごに捨てて，年配の社員から注意された。

②日本から飛行機でわずか3時間。ヤングはまるで日本の海水浴場にでもいるように，にぎやかに波とたわむれる。

③駅の周辺は，デパートやスーパーをはじめ近代的なビルが林立するショッピングゾーンです。

④混迷の時代にはよきリーダーが必要とされるでしょう。人の上に役立つ身としてマネージメントの上で宗教心が大切だとおもいます。

〔問69〕次のうち和語と考えられるものはどれか。

ザマ　ガンドウ　ブリキ　ボンゴ　バケツ　デズ　バネ　ビーズ

〔問70〕次のうち，漢語の語形でないものはどれか。

エダ　ツキス　ゴット　キラ　ポンプ　コッタン　ミュンソク　ビンピップ

〔問71〕-リで終わる副詞，-ニで終わる副詞，-トで終わる副詞を5語ずつあげよ。

〔問72〕漢語の副詞には，本章であげたもののほか，どんなものがあるか。

〔問73〕3拍3字の漢語熟語を3語あげよ。

変	連	形	形動	副	感	接続	助動	助詞	接頭	接尾	計	記号	新出記号
2	12	48	5	62.5	6.5	13	3.5	2.5	4	13.5	621	4	
0.5	1.25		13	14.75		1.5			11	72.5	544		
			0.5								34		
7	1			1							17		

順語彙表（全体）」の1,220語を100語ごとに区分してまとめた。
マリ」（名・副）のように2品詞以上にまたがるとしているものを処理するために，

〔問74〕次の漢語には2とおりのよみ方がある。よみ方と意味を考えてみよ。
工夫　学生　仏語　人間

〔問75〕音よみ・訓よみ2とおりのよみ方ができる漢字熟語をあげよ。（本章であげたものを除く）

〔問76〕漢語で連濁を起こしている例をさがしてみよ。

〔問77〕和語・外来語（混種語）の形容動詞を5語ずつあげよ。そしてそれらがどんな意味分野のものか，それらがどんな語感をもっているかを考えよ。

〔問78〕1字漢語（例．役）を10語あげて，それらが混種語の成分になるかどうか調べよ。

〔問79〕「パン」「タバコ」のように，言いかえの語のない外来語を10語あげよ。

〔問80〕家庭にある器具の名や住居に関係のある外来語を10語あげよ。

〔問81〕アイス（ice），ホーム（home），ボックス（box），ライン（line），ハイ（high）を用いて，外来語熟語または混種語をつくってみよ。

〔問82〕イタリア語・フランス語・ドイツ語から入った外来語を3語ずつあげよ。

〔問83〕次の外来語には，それぞれ複数の原語がある。それらについて調べ

てみよ。

トラック　ライト　プロ　マウス　コード　バス　コート

〔問84〕次の漢字を結合させて，2字漢語をつくれ。

上　学　流　小　等　級　木　品　質

〔問85〕次の漢語を形容動詞と副詞に分けよ。

本来　篤実　自然　突然　健康　一体　奇妙　率直　無論　至極　快活

〔問86〕次の外来語を漢語または漢語と和語の混種語に訳してみよ。

デモクラティック　ローカル　ドメスティック　オートメーション　ソーラシステム　アーバンライフ　メカニズム

〔問87〕「クールな」のような性格・行動の評価に関係する外来語（混種語）の形容動詞を5語あげよ。

〔問88〕次の混種語はどんな語種から出来ているか。

吸い上げポンプ　パリ大学　山中湖　三人乗りボート　近所づきあい　水玉模様　ゴミ焼却場　ギャンブル公害　銀行引受手形　背面とび　児童演劇コンクール　えびフライ定食　お子さまランチ　オートロック解錠ボタン　インスタント食品コーナー

〔問89〕外来語で，「アベック（フランス語）＋シート（英語）」のように複数の外国語の結合で出来ているものも広義の混種語と見られる。このような例をあげてみよ。

〔問90〕次の外来語を，漢語または和語になおせ。

アイメイト（eye-mate 和製）　ヤング　ギャル　アベック
スナック　タレント　ベビーカー　クランケ　エアポート
パーキング　ノースモーキングカー　トルソー　トロイカ

〔問91〕次のものを成分とする混種語をつくってみよ。

①切符（きっぷ）　②付き　③入り　④口（くち）
⑤番　⑥役　⑦主義　⑧性
⑨反　⑩ママ　⑪パン　⑫サービス

〔問92〕新聞・雑誌・専門語辞典などから，多単位の混種語を探してみよ。

参考文献

国語学会編『国語学大辞典』　1980　東京堂出版

阪倉篤義ほか『日本語の意味・語彙』（シンポジウム日本語③）1975　学生社

Frederick Bodmer: *The Loom of Language* 1943 London, George Allen & Unwin LTD

林大監修『図説日本語』　1982　角川書店

市河三喜編『研究社英語学辞典』　1968　研究社

大塚高信・中島文雄監修『新英語学辞典』　1982　研究社

石橋幸太郎ほか編『現代英語学辞典』　1973　成美堂

松浪有ほか編『大修館英語学事典』　1983　大修館書店

金田一春彦監修『明解　日本語アクセント辞典』　1958　三省堂

久松潜一監修『新潮国語辞典』　1965　新潮社

田中章夫『国語語彙論』　1978　明治書院

郡司利男『ことば遊び12講』　1984　大修館書店

玉村文郎「日本語の音韻の概説」(『日本語と日本語教育—発音・表現編—』所収)　1975　文化庁・国立国語研究所

樺島忠夫「基本語彙」(『日本語と日本語教育—語彙編—』所収)　1972　文化庁

水谷静夫「語彙の量的構造」(『岩波講座日本語 9　語彙と意味』所収)　1977　岩波書店

真田信治「基本語彙・基礎語彙」（同上所収）　1977　岩波書店

E.L. Thorndike: *An English Word Book* 1962　大修館書店

E.L. Thorndike: *Teacher's Word Book* 1921 Columbia Univ. New York

Ernest Horn: *A Basic Writing Vocabulary* 1926 Iowa Univ. Iowa City

岩崎民平・小稲義男監修『新英和中辞典』　1971　研究社

国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字(1)(2)(3)』　1962～64　秀英出版

国立国語研究所『電子計算機による新聞の語彙調査(II)』　1971　秀英出版

国立国語研究所『分類語彙表』　1964　秀英出版

佐藤喜代治編『国語学研究事典』　1977　明治書院

中国語学研究会編『中国語学事典』　1958　江南書院

中国語学研究会編『中国語学新辞典』　1969　光生館

北原保雄ほか編『日本文法事典』　1981　有精堂

デンツェル・カー（魚返善雄訳）『現代支那語科学』　1941　文求堂書店

佐藤喜代治「国語の語彙の特色」(『国語教育のための国語講座 4　語彙の理論と教育』所収)　1958　朝倉書店

玉村文郎「語形と語性」(『日本語と日本語教育—文法編—』所収)　1973　文化庁

徐青『词汇漫谈』 1983 浙江人民出版社
山田孝雄『國語の中に於ける漢語の研究』 1940 寶文館
甲斐睦朗編『小学校国語教科書の学習語彙表とその指導』 1982 光村図書
池原楢雄著『国語教育のための基本語体系』 1957 六月社
L.Faucett, I Maki『英語重要單語統計的研究』 1952 篠崎書林
阪本一郎著『日本語基本語彙（幼年之部)』 1943 明治図書
垣内松三著『基本語彙学(上)』1938 文学社
Helen S.Eaton : *an ENGLISH FRENCH GERMAN SPANISH Word Frequency Dictionary* 1940 Dover Publications, Inc. New York

日本語教育指導参考書　12

語彙の研究と教育(上)

昭和59年 9 月20日　初版発行
平成 4 年12月21日　6刷発行

定価620円
(本体602円・税18円)

著作権所有　国立国語研究所
〒115
東京都北区西が丘3-9-14
電話 (03) 3900-3111

発行　大蔵省印刷局
〒105
東京都港区虎ノ門2-2-4
電話 (03) 3587-4283～9
(業務部図書課ダイヤルイン)

落丁，乱丁はおとりかえします。

ISBN4—17—311312—9

政府刊行物販売所一覧

政府刊行物のご注文は下記の政府刊行物サービス・センター、政府刊行物展示室および政府刊行物サービス・ステーション（官報販売所）をご利用下さい。

◎政府刊行物サービス・センター等（大蔵省印刷局直営）

（名称）	（郵便番号）	（所在地）	（電話）
霞が関	100	東京都千代田区霞が関１－２－１（農林水産省別館前）	東京 03(3504) 3885
大手町	100	東京都千代田区大手町１－３－２（大手町合同庁舎第2号館内）	東京 03(3211) 7786
大阪	540	大阪市中央区大手前1丁目5番63号（大阪合同庁舎第３号館内）	大阪 06 (942)1681・1682
名古屋	460	名古屋市中区三の丸２－５－１（名古屋合同庁舎第２号館内）	名古屋 052 (951)9205・9341
福岡	812	福岡市博多区博多駅東２－11－１（福岡合同庁舎内）	福岡 092 (411)6201・6204
札幌	060	札幌市北区北八条西２－１－１（札幌第１合同庁舎内）	札幌 011 (709)2401・2402
広島	730	広島市中区上八丁堀６番30号（広島合同庁舎２号館内）	広島 082 (222) 6012(代)
仙台	980	仙台市青葉区本町３－２－23（仙台第２合同庁舎内）	仙台 022 (261)8320・8321
金沢	920	金沢市広坂２－２－60（金沢広坂合同庁舎）	金沢 0762 (23)7303・7304
沖縄	900	那覇市久米２－30－１（久米庁舎内）	那覇 098 (866)7506・7508
展示室	105	東京都港区虎ノ門２－２－４（大蔵省印刷局虎の門工場２号庁舎内）	東京 03(3587) 4292

◎政府刊行物サービス・ステーション（官報販売所）

（名称）	（郵便番号）	（所在地）	（電話）
札幌	060	札幌市中央区北二条西13丁目（エイケービル２階）	札幌 011 (231) 0975
青森	030	青森市本町２－７－16（今泉書店）	青森 0177 (76) 3611
盛岡	020	盛岡市南大通１－16－２	盛岡 0196 (22) 2984
盛岡丸内	020	盛岡市内丸17－７	盛岡 0196 (53) 4163
仙台	980	仙台市青葉区宮町３－８－12	仙台 022 (222) 6486
秋田	010	秋田市大町２－２－２（石川書店）	秋田 0188 (62) 2129
山形	990	山形市本町２－４－11（八文字屋）	山形 0236 (22) 2150
福島	960	福島市大町７－20（福島西沢書店）	福島 0245 (22) 0161～3
水戸	310	水戸市宮町２－２－31（川又書店）	水戸 0292 (31) 0102
宇都宮	320	宇都宮市馬場通り２－１－６（有・うちやま集英堂）	宇都宮 0286 (33)4094・3533
前橋	371	前橋市本町１－３－４（煥平堂）	前橋 0272 (23) 1211
浦和	336	浦和市高砂１－３－４（岩淵書店）	浦和 048 (822) 7633
浦和駅前	336	浦和市高砂１－７－９（岩淵書店）	浦和 048 (829) 2345
千葉	260	千葉市中央区亥鼻１－４－４	千葉 043 (222) 7635
横浜	231	横浜市中区住吉町１－９（横浜日経社）	横浜 045 (681) 2661～3
東京	101	東京都千代田区神田錦町１－２	東京 03(3292) 2671
渋谷	150	東京都渋谷区神南１－22－４（大盛堂書店内）	東京 03(3463) 7555
池袋	171	東京都豊島区西池袋１－17－７（芳林堂書店内）	東京 03(3984) 1101
立川	190	立川市曙町２－１－１（ルミネ立川店７Ｆ オリオン書房立川ルミネ店）	立川 0425 (27) 2311
新潟	950	新潟市東大通１－５－24（北越書館）	新潟 025 (244) 5297
富山	939	富山市掛尾町180－１（Booksながだ本店）	富山 0764 (92) 1192
金沢	920	金沢市片町２－１－７（株・うつのみや）	金沢 0762 (64) 2288
福井	910	福井市中央１－４－18（勝木書店）	福井 0776 (24) 0428
甲府	400	甲府市中央４－２－18（柳正堂書店）	甲府 0552 (35) 2201
中央	400	甲府市中央１－６－３（柳正堂セントラル）	甲府 0552 (35) 2202
長野	380	長野市大門町66－１（長野西沢書店）	長野 0262 (33) 3187
岐阜	500	岐阜市泉町５（郁文堂書店）	岐阜 0582 (62) 9897
静岡	420	静岡市追手町10－121（新中町ビル１階）	静岡 054 (253) 2661
名古屋	460	名古屋市中区栄３－27－30	名古屋 052 (264) 9155
名古屋駅前	450	名古屋市中村区名駅３－25－５	名古屋 052 (561) 3578
豊橋	440	豊橋市呉服町40（豊川堂内）	豊橋 0532 (54) 6688
津	514	津市中央12－12	津 0592 (28) 4812
津駅前	514	津市羽所町17－116	津 0592 (27) 7526
大津	520	大津市中央１－５－２（沢五車堂書店）	大津 0775 (24) 2683
京都	604	京都市中京区河原町六角下ル東入	京都 075 (221) 4444
大阪	550	大阪市西区江戸堀１－２－14（肥後橋前）	大阪 06 (443) 2171
神戸	650	神戸市中央区北長狭通５－４－３	神戸 078 (341) 0637
奈良	630	奈良市大宮町６－１－９（啓林堂書店）	奈良 0742 (33) 8001
和歌山	640	和歌山市本町１－７（宮井平安堂）	和歌山 0734 (31) 1331
鳥取	680	鳥取市末広温泉町164（富士書店）	鳥取 0857 (23) 7271
米子	683	米子市四日市町86（今井書店本通り店）	米子 0859 (32) 1151
松江	690	松江市殿町63（今井書店）	松江 0852 (24) 2230
岡山	700	岡山市駅前町１丁目地下街区３号（山田書房）	岡山 086 (223) 7048
岡山幸町	700	岡山市幸町３－22	岡山 086 (222) 2646
広島	730	広島市中区国泰寺町２－２－17	広島 082 (242) 4680
山口	753	山口市道場門前１－３－11（文栄堂）	山口 0839 (22) 5611
徳島	770	徳島市一番町３－22（小山助学館）	徳島 0886 (54) 2135(代)
高松	760	高松市番町１－９－16	高松 0878 (51)6055・6056
松山	790	松山市三番町４－６－13	松山 0899 (41) 7879
高知	780	高知市本町５－２－21	高知 0888 (72) 5866
福岡	810	福岡市中央区天神４－５－10（地産マンション１階）	福岡 092 (721) 4846
福岡県庁内	812	福岡市博多区東公園７－７（福岡県庁内）	福岡 092 (641) 7838
福岡市役所内	810	福岡市中央区天神１－８－１（福岡市役所内）	福岡 092 (722) 4861
北九州	803	北九州市小倉北区城内１－１（北九州市役所内）	北九州 093 (582) 4124
佐賀	840	佐賀市白山１－２－18	佐賀 0952 (23) 3722
長崎	850	長崎市出島町５－15（税関前）	長崎 0958 (22) 1413
熊本	860	熊本市新町４－１－19（長崎次郎書店）	熊本 096 (352) 5069
大分	870	大分市中春日町５－22（春日歩道橋南）	大分 0975 (32) 4308
宮崎	880	宮崎市橘通東３－６－19（田中書店）	宮崎 0985 (24) 0386
清武	889-16	宮崎郡清武町加納３－10（見聞読タナカ）	宮崎 0985 (85) 8400
鹿児島	890	鹿児島市上之園町33－14（中州通り・甲南高校沿）	鹿児島 0992 (85) 0015
那覇	900	那覇市久茂地１－１－１（文教図書）	那覇 098 (863) 5288